紀伊國名所圖會

後編

四之巻

在田郡

海部郡

839
Ⓜ 6
80

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

紀伊名所圖會後編巻之四

目録

湯淺莊　吉川村　逆川　逆川王子
御茶屋跡　田村　枇杷　森景基故居
國主神社　田坂　白上峰　施無畏寺 并圖
明恵眞蹟　託宣石圖　白神磯 并圖　毛無島
苅藻嶋 并圖　方寸跡 并圖　顯國神社　駈馬圖
湯淺驛　月見石　鎧師　石崎
湯淺氏故居　湯淺全圖（宗永并圖上覺 宮佛本宮在司）　諏訪神社　湯淺次郎故居 并圖
湯淺醬油　玉井醬　仙光寺　深専寺 并圖
白樫左近將監像　福藏寺　入江松原　眞楽寺
本勝寺　寶林寺　白方宿所　車石 并圖
満願寺　常樂寺　久米崎王子

帝國圖書館
曽山文庫
根岸信輔氏寄贈
昭和八.九.一四.寄贈
国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

湯淺城績
廣川
天國劔 并図
天神社 并宝物図
鷹嶋
井関驛
馬留王子
光賀八幡宮
鹿瀬山 并図
海部社
蓬莱 并図
戸津井 十九島図
大引浦
東泉寺
櫻嶋
宇佐八幡宮

靈巖寺跡 并図
廣橋
八幡宮 并図
立神
廣城跡
井関川
津木坂
岩渕社 并図
井関山
衣奈荘
衣奈八幡社 并図
小引浦
由良荘
修善尼寺
妙見宮
柏村
由良湊 并全図

穴地蔵
養源寺 紺甲冑・竹の図
男山陶器 并図
あべ岬
能仁寺
本山八幡宮
上草瀧
觀音堂
鹿背城績
由良坂
縁起一筐
白崎 并図
興國寺 全景・國師像・葛山像・天狗奉筆写・手迹 太子傳畧・国師手書・淳眺画像・半身・龍女 宝珠・鷲峰十境・坐禅石・勅使公・聯額
荘天神社
長谷寺 并図
沙攪明神
河戸浦

廣荘
扉印判
法藏寺
貝化石
井関王子
河瀬王子
藤瀧 并図
鹿瀬荘司
法華壇
鷲林寺
黒嶋 并図
海瀬嶋 并図
白山權現
御殿跡
小杭
富嶋

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

湯淺荘 七ケ村を総ぶ其中吉川湯淺の二村爰に記す

○吉川村 糸鹿山北面の麓にして村中を貫て宮前を歴て次氏村 本逆村といひしに後世略を忌みて吉川と改む

施無畏寺蔵

うきやこそなからちのす余を頼ちて

正平九ねん甲午十二月 廿日 えや

ささらさまの村内 字をすのいを

○逆川 源ハ湯淺村界の尾より出て吉川湯淺二村を経て湯に入る郡中此川皆東より西に流るゝに独り此川西よりして東に流るゝを以て此名あり御幸記に水逆流河といへる即是なり

夫木抄

きく度に名さへうらめし熊野路や逆川の瀬といふにせむ　民部卿為家

おもふ身のよしの笠さへ先にそそさか川の所ゆかしき　源淳國

○逆川王子社 吉川村にあり一村の産土神なり社の前を流るゝ糸鹿といふ社辺に逆川あり又みそぎ川ともいふ

御幸記云

又凌嶮岨昇イトガ山下山之後参サカサマ王子ニ水逆流河有之此名云云

宇治田忠卿紀行

糸鹿山をこえれば程なく湯淺河といふ所にてやすみて手をそゝぎ来ぬてつからんを乃しけうして

手に結ぶ糸鹿の山のみそぎ川くらぬよしに渡るべきみぞ

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

○御茶屋跡 田村の畑中にあり慈聖御書の時の御茶屋跡なりといふ

田村 吉川村より南に在り西の海濱にありて北は千田村と山を以て界し南は栖原村と田坂を以て界とし次の一村の區域となせり

產物枇杷 田村の谷〻に多く植て交へてうゑて其味他にまされり 年〻其實を結ぶ 紀攝或は他国の市中に出し賣る事多し三方諸國に送るといふ

森九郎景基故居 田村にあり景基は湯淺宗重の九男にして田村栖原等を領せし事古文書に見えたり當村東麓に居して累世居住せしと

又湯川直光より津守孫東文に與ふる文書を藏む

國主神社 本國神名帳 田村にあり攝社十一社村中にあり

國津神

當社古くより久授呂の宮といひ傳ふ久授呂は國栖にて呂は助語なり寛文記に上古吉野の國栖人來りて此地に祀るといへり

又社傳に天曆二年大和國三輪臣の身河邊橋司といふ人に三輪大神託宣ありしより紀伊國海部の郡に大穴持命出雲より鎭座ありて此地に鎭座すべしといひしかば同年九月朔日より始く加太浦邊より移り同年十一月に橋司千田浦に來り宿祢しまた夢の中に須佐男命託宣ありて其日當て此地の海辺に祀りしそれ時に出現ありて二百餘歳後此地に鎭座せしより告あるとあり此の後によれば大國主神を祀るもの淡村の千田須佐男命を祀れるを合せ祀りて此社も亦授なりて其後

社地より南入町許に小濱といふ浦あり

卽其濱の巖窟に坐禪ありしと文永七年湯淺氏の衣問森某此地に遷しまつれりといふ 祢宜栖原森といふ

田坂 又田村坂といふ田村より栖原へ越る坂なり山上眺望よし

白上峯 田坂より東栖原田村の界にあり山三峯ありて東を白上中を白上西を白上といふ明恵上人の舊跡なり眺望最よし東西白上に率都婆ありて文字今磨滅せり

東白上率都婆銘

金剛藏菩薩 建久之頃蟄居修錬之間文珠浮空中現形之處

西白上率都婆銘

文珠師利菩薩 建久之頃遁本山高尾来草庵之處

一本明恵傳云

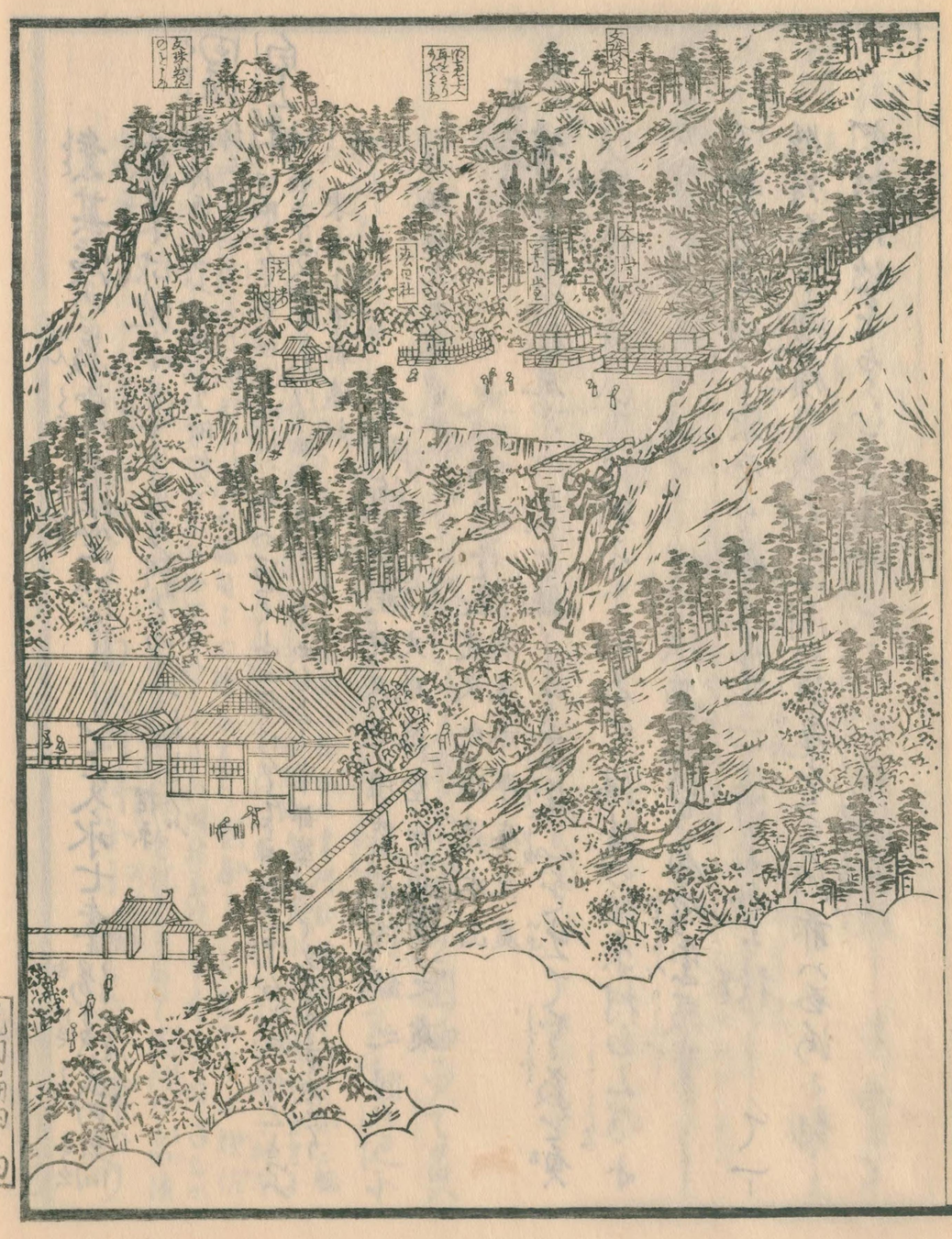
建久六年の秋高雄の交を辭して高尾山を出て聖教を負ひ佛像を荷ひて紀州に下向まして湯淺の栖原村白上の峰に一字の草庵を構へて止住す其山のさま峰巒巖崖峨々として磐石嵳峨たり東西は長く南北は狹くして一段殊に高き嶺の巖上に二間の孤庵を立て前は西海に對し阿波路をかすむ雲濤渺茫として眼海蒼茫として南は遊岩を

施無畏寺（せむゐじ）

重陽衛雨遊施無畏寺

四顧塵煙斷鳥啼
白日閑只聞清梵
響寺在老杉間
石齋青苔秀崖頃
野菊香滿城風雨
日古寺過重陽

上街邦彦



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

漸く其嶺横に連なりて東は白上の峯其尾渉下りて
深谷に至れり其谷といふ谷ありて渓嵐常に起りて響を
巌洞に至る草庵の跡並びの前に一株の楠ありて其下に
縄床一脚を置てり庵の後に白巌累々として青苔数茂
せり崔嵬の勢巳に[illegible]の形に類せり云云

絶無畏寺

白上山下栖原村にあり東云
宗古義派別梅尾高山寺に属す

南紀風雅集

施無畏寺　北圃仲温

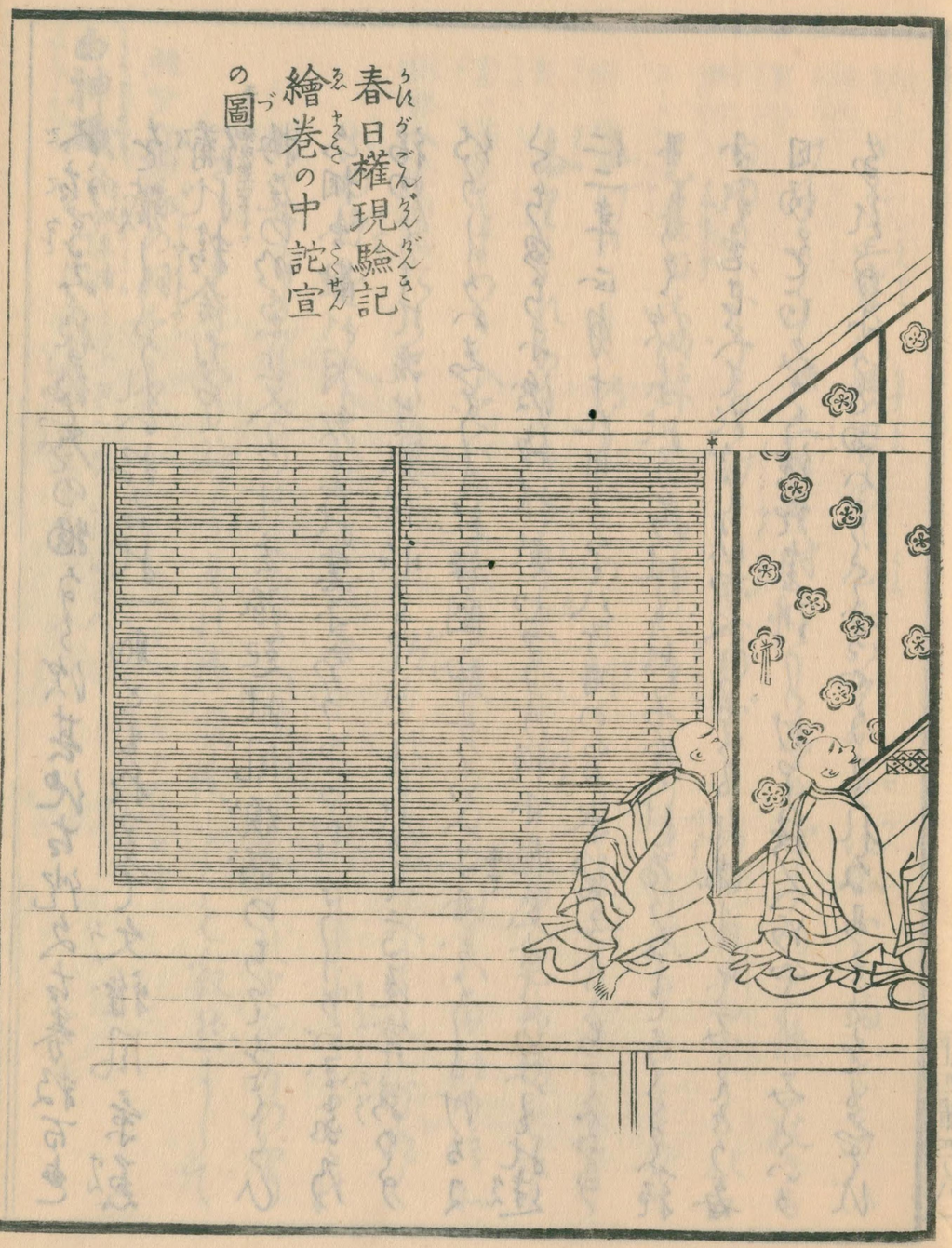
明公卓錫白神峯法界風烟接海浄香象護真孤洞水
金猊留偈積巌陰攅松畫暗濤聲合脩竹曉寒林靄深
借問誰能参妙理山僧興語出塵心
自註云明恵上人始建寺我郷白神山寺
記稱上人夢與文珠大士語特別攬猊尾

當寺は明恵上人練行せし白上峯の麓にして當郷の東九郎
景基此地を卜して一堂を建立し上人を屈請して供養
の法筵を栖原浦に展べ永く漁撈殺生の業を禁断し
て供養の布施に頼く生類の罪を無くさと絶ちしによりて

寺を絶無畏寺と号せらると上人の滅後に弟子喜海法紋
親縁を安置し寺を再び三部華厳光明真言を施入
し叢林事に因一寂文を寄附せしむ八所差図に見えたり今も
今此境内山林除地にして本堂開山御影堂寶蔵経
守其日社建ならべ四面楓樹多し又本堂の縁に上人
手植せし那木桧扇の古木ありしに天保十四年九
月十一日未刻山崩して其古木寺傷れしと本坊も堂
舎の下になりて西南の海に面し毛無荊藤の鳴くそ
手みもとよぐ寶満鳴子もやし寂れてとも不武霊場
の結界を加く浪の響に[illegible]上人の心をまなしく
當郷のあわげ心に深び因になんて更に懐舊の情
を起せり又藤原景基が寄附状に郡中一円四十九貫
等名を書連ねて上人加判せられ文書及其他乃寶物

湯浅庄栗原村

春日権現験記絵巻の中詑宣の圖



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

入諸るみ所の餘経(よのつね)の物なる欤其他古紙文古券数百通
を蔵(ざう)しければ好古の一助ともなりて文雅風流兼(けん)
備(び)の精舎(しやうじや)なり

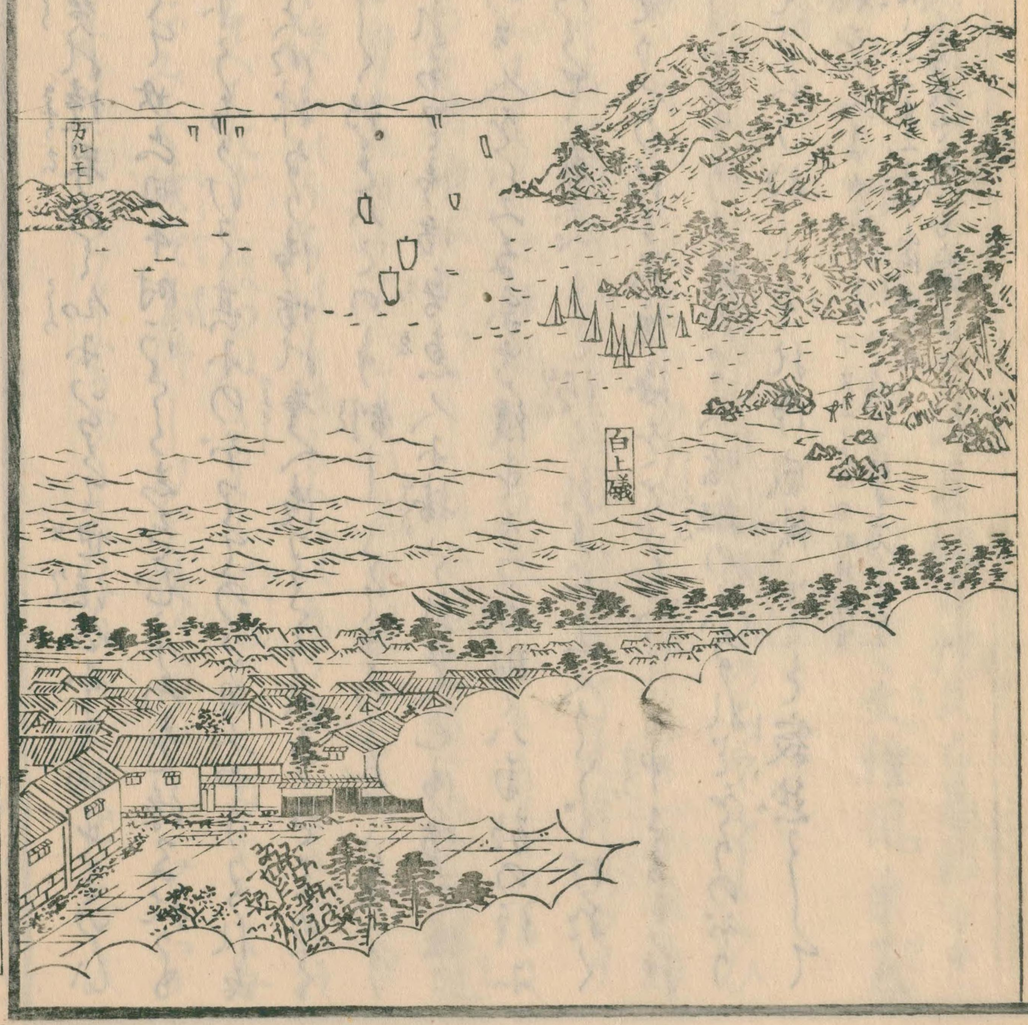
春日権現験記第十七
梅尾の明恵上人は十三歳起の風頻悩(がんなう)のちりをそらひ
六相の観の月秋の空にあらはこそのなりしかば、遂に家乃
福田として死生の依怙とせんとなきそれゆゑなる尾崖(らうろう)数の事
修りしかば、ここし紀伊国白上といふ所におもむきける
こちなむに渡海の観行あり。往に槙尾(杢ママ)氏女といふも此遠(えん)
仁二年正月十九日より八ヶ月の間水漿をさえて食ず
母あやしく涙ながら、ちのちに念の事なるとうらがふ程
に動(えんしやう)ぞくてたかも涙つねよりも紀満(ひまん)してみえたり毎
日涌をとりみて読経(どくきやう)念仏しけるに、諸人いやしみていふ
あはれなりと思ふゆゑにふるやうまれるなどとをかしそびれ

くじ三寳(さんばう)の境界(きやうがい)のこゝろにかなひて世(せ)法仏法ともにそむきぬといひ
けるとかくて廿六日午時ばかりうちしつりしてを清むるにも
なのらへふちらけるに其(それ)ふのおりてのこゝろなふやうなりしを
見まつる大明神(うが)なり清場の庵(ひとそく)へならせたまふときもあく
まげかしく御まぶこのおり割(さい)しそのうへかうんがそふ(ぬ)る
条(まね)ありかれありし清場普恵(ちゑ)人に授(さづけ)かれ此人也清場を信じ
そてまつる人をはゞみる家業に繁盛する所あり時く八幡社の御所に
へもきたらせたまふべしと仰(おほせ)られければ上人かしこまりければく
其の仰(おほせ)をうけ給はりて渡海をとゞむべしと申(まう)されたるそれ
時ならぬ所をもをりさせたまひしかば懐姙(くわいにん)の人あれど其のあり
いさゝかそさわりなし。それ清威儀もとを寂然(じつねん)として

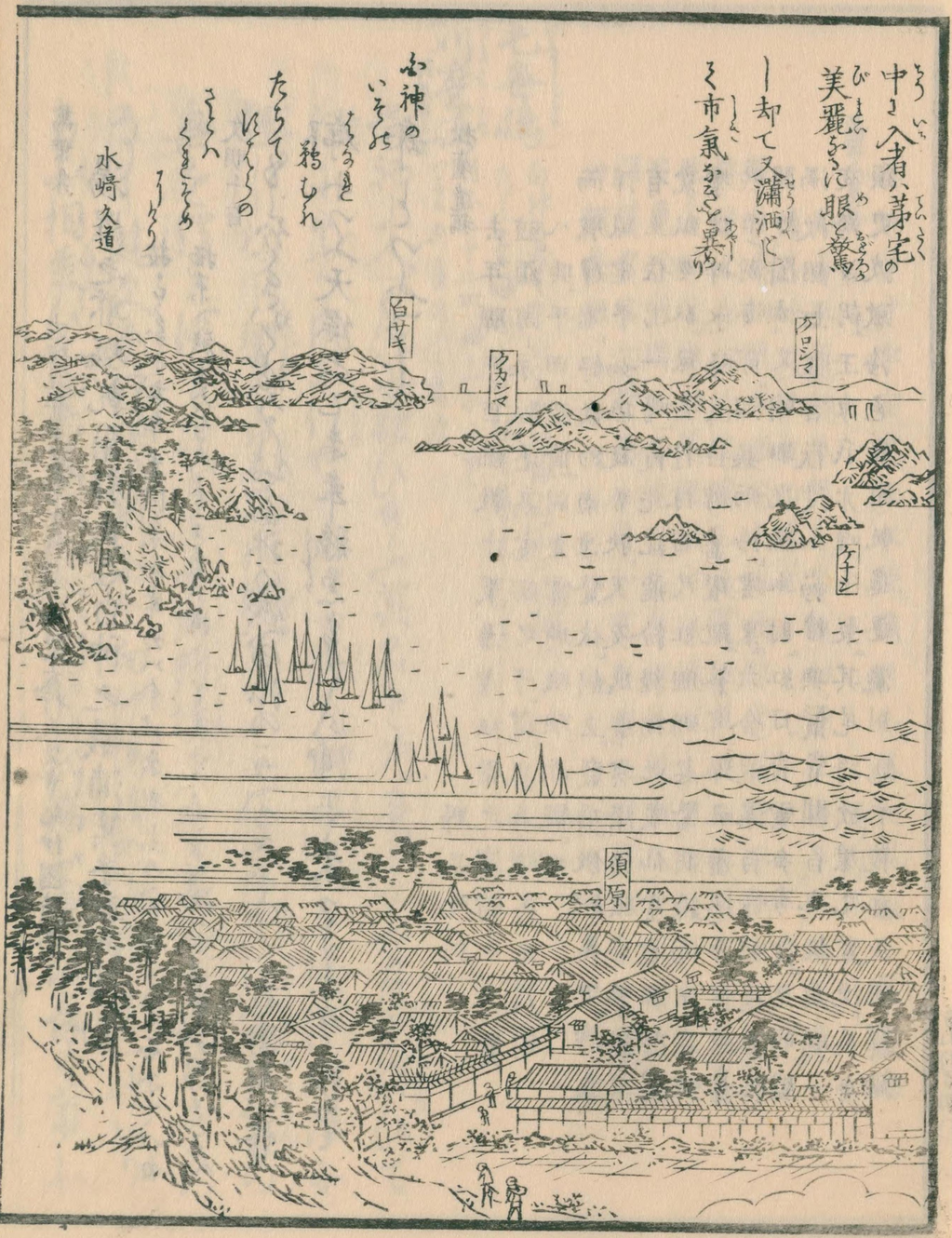
白神礒(しらかみのいそ)　今栖原浦(すはらうら)といふ白上山の山前(さうぜん)海に入て小嶼をなせるを以て白上磯といふ
飛騨(ひが)の羽(え)をふるがゆし　下文にも在 日明神宮のまことも彼処にあり

白神磯
眺望の圖

須原ゝ國内豪
富の叢淵ゆして
皆こゝれ陶朱倚
頭の徒なりさも
ざこん歎謂江戸
捆持なべ賣
買貨殖の産業ハ
彼地ゆて営々矣
故ゆ一なひ此邑



中ゝ入者ハ茅宅の
美麗ゆに眼を驚
ー却て又瀟洒ゝ
ゝ市氣ゆゝと異り



水崎久道

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

萬葉集 大寳元年辛丑冬十月太上天皇大行天皇幸紀伊國時歌

湯羅之前塩乾爾祁良志白神之礒浦箕乎敢而榜動

按ずるに古年妻湯泉御幸ありし今の糸我山の官道よりも西にていつも栖原へ越るなるべし さて此浦より舟にて由良へ渡りたまへるなりけらん

文明千首 右衛門督

もろこしもかくぞありしや白神の磯べの浪のこりへる名ごりを

序にいふ天保六乙未年鯨魚多く此浦に来りしことあり一奇とすべし

松廬遺稿 野呂隆訓

去年臘末巨鰌數十聚湯浅栖原之海時々浮鼻竝額游泳驅逐高處臨之可窺其奔躍兵正月旬八與平田君偕同登霧崎磯頂而觀之

両腋痒不舒欲釣南溟鼇依劍立巖頂微睨萬里濤春
洋風定平如砥凝碧眈天及成紫雲際浩曠杳無窮只
有土佐山一嘴霞庀乱飛紛糢糊此裏仙窟有耶無褰
裳飄然馭風去折採百尺紅珊瑚忽驚明鏡面生澀玻
蟄破碎水怒立巨鯨耆躍蹴蒼穹蹄吼盪拋奔雷急驀
然噴潮海可涸暴雨捲雲黒六合飛漲白條倒迸散乾
闢押闔虚又喻眼光灑血射紅日青電争奔發星曄盤
渦掀翻虹龍宮嶽没山崩鯖與鬣甞聞白也捉月明一
夜跨汝朝王京我亦喤手製其尾將欲攀九宵挽長庚
須史波激海色綠晴帆遥逐瀛州鵠下視垂天鵬翼端

益知方寸宇宙寛振衣長嘯日已落天風颯々蒼髪寒

溪琴山房詩 垣内保定

乙未正月鯨魚數十來集栖原之海予作鯨魚來

傷其非可來處而来也

鯨魚來栖原之海鯨大海浅鯨常鋑蹄涔轍鮒汝當悔
横海之志何所施撼山長鬣徒磊磈山人傷之為裁詩
鯨兮鯨兮慎勿陥禍機世路崎嶇不可近淳朴古風今
皆違吁嗟鱗介之族何荼毒短鋋長鏑尾汝窺獨有南
溟堪窟宅一帶豫山翠如圍好潜此間莫輕出待我騎
汝朝紫微

毛無嶋 白神の磯より十二町許海上にあり 岨しくたる岩嶼にして絶て草木なし

苅藻嶋 明恵傳記云 又苅藻とも書す 同二十二町海上にあり

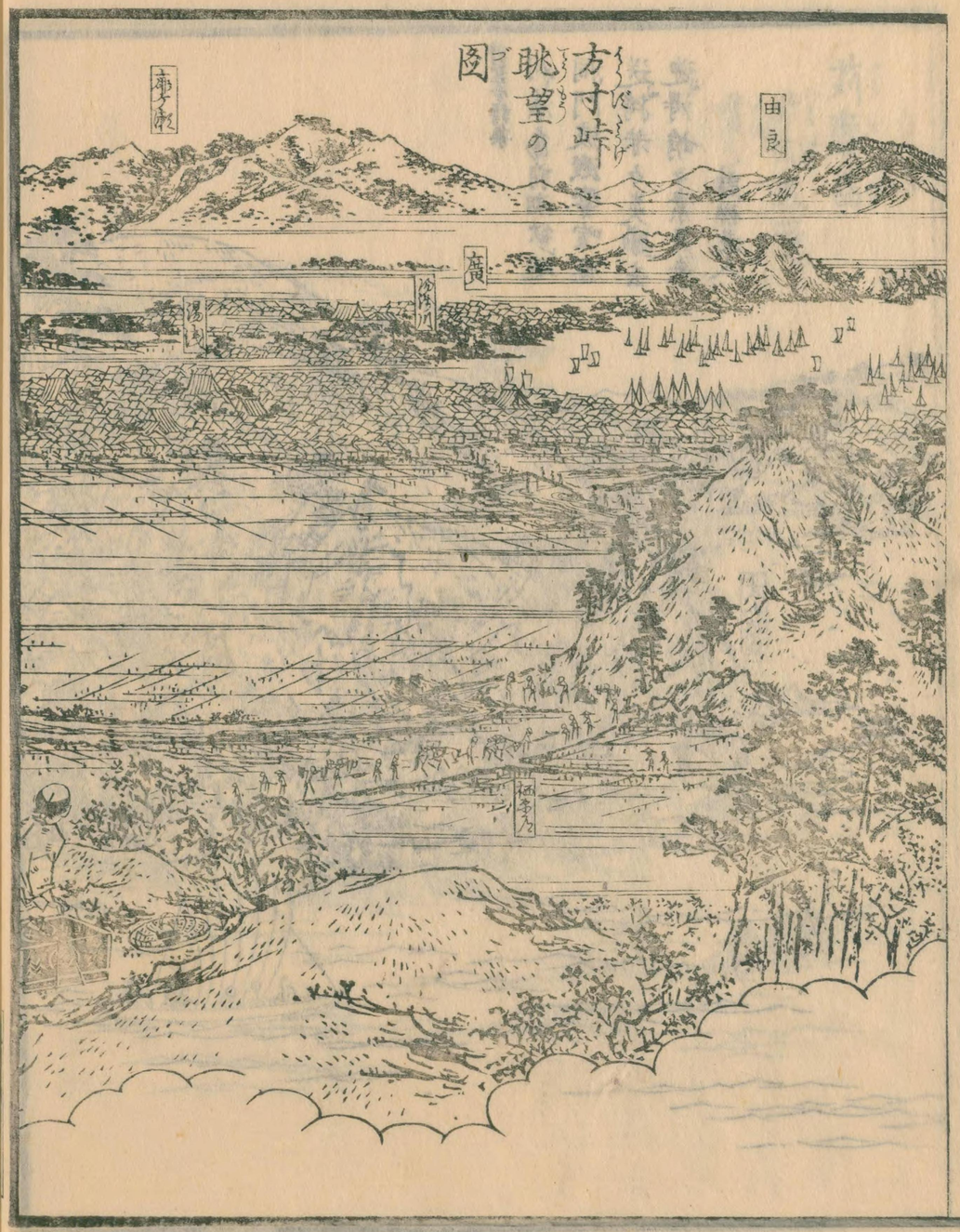
當地上人一の嶋に擬ひて其名を苅磨とよぶ月に棹ひて彼に寄り風に任せて海に渡る樵月光を漁海の浪に耀し松風響を嵐の指に傳ふ至情の漁父宮挽鏡の興を催さずといへども塵縁対境して其心を鈍めざるはなし建久末比頂紀州に下向次湯浅の海中に二嶋ばかり南北相並びて其間三四丁ばかり此嶋を東西長く南北

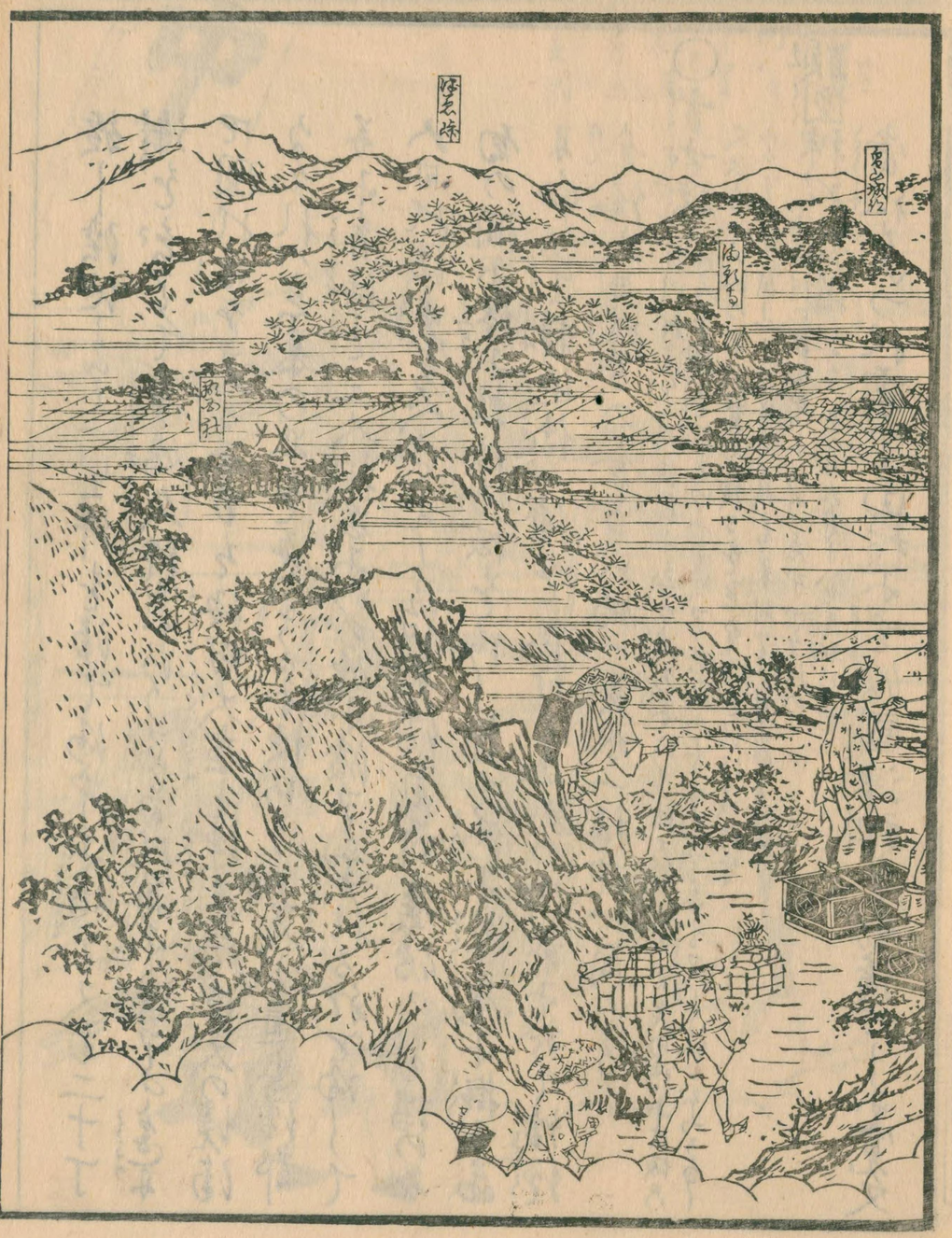
苅磨島
岩穴東西へ
貫くとぞ

詩聖堂詩集
刈藻島前潮欲迴
洞門波濺響喧砉
送將芒々夾曦去
迎得娟々素月来
詩佛老人

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

方寸峠眺望の図



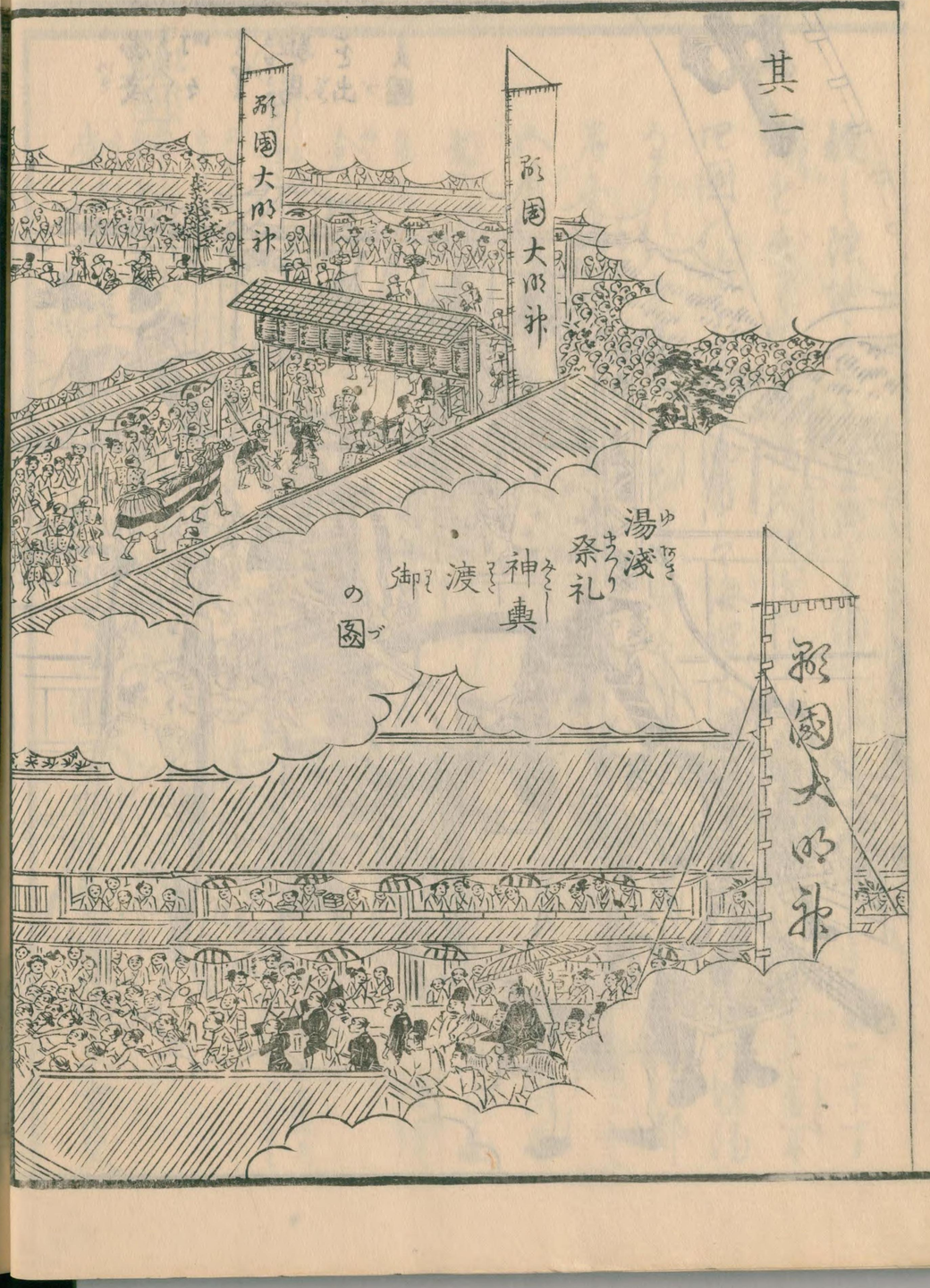


国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

程し隣地より一里許を隔て海中に侍りて又南二十丁
許を去りて竈鳴久礼島あり西南の角に當りて遠望すれ
此國の海をも見る西方は海畔大嶋と連りて西天の境涯
なりければ意恵の思を起さるゝに便ありとて人と道忠僧都
并に喜海と三人相共にかの島に渡りて留れる事と約して
八日の後来るべきよし約束して南荊鷹嶋の南端の西
面の洞に縄に数枚の板を作し敷て佛に草庵に擬して西
に向ひて釈迦像一鋪を懸けまつるかの御前に於て読経
念誦し日を送るの食ふ所は鉢一貝水一桶飯一筒なり

○方寸峠 吉川村より湯浅村に至る處なり坂の廿一丁里老の傳に此坂乃古名を御坂をとのといへり然れども古書證にも見えず未だおぼつかなし
又云古へは此山の東北麓を越る道なりしを湯浅持守宗重なる時此山を居城とし後麓を木村に移れしとぞ

顯國神社 湯浅村の長田中にあり在中の村の産土神なり毎年九月十八日馬駈あり
當社をいつの世にか田村に坐す國津神を勧請せしに寛文



湯淺祭礼

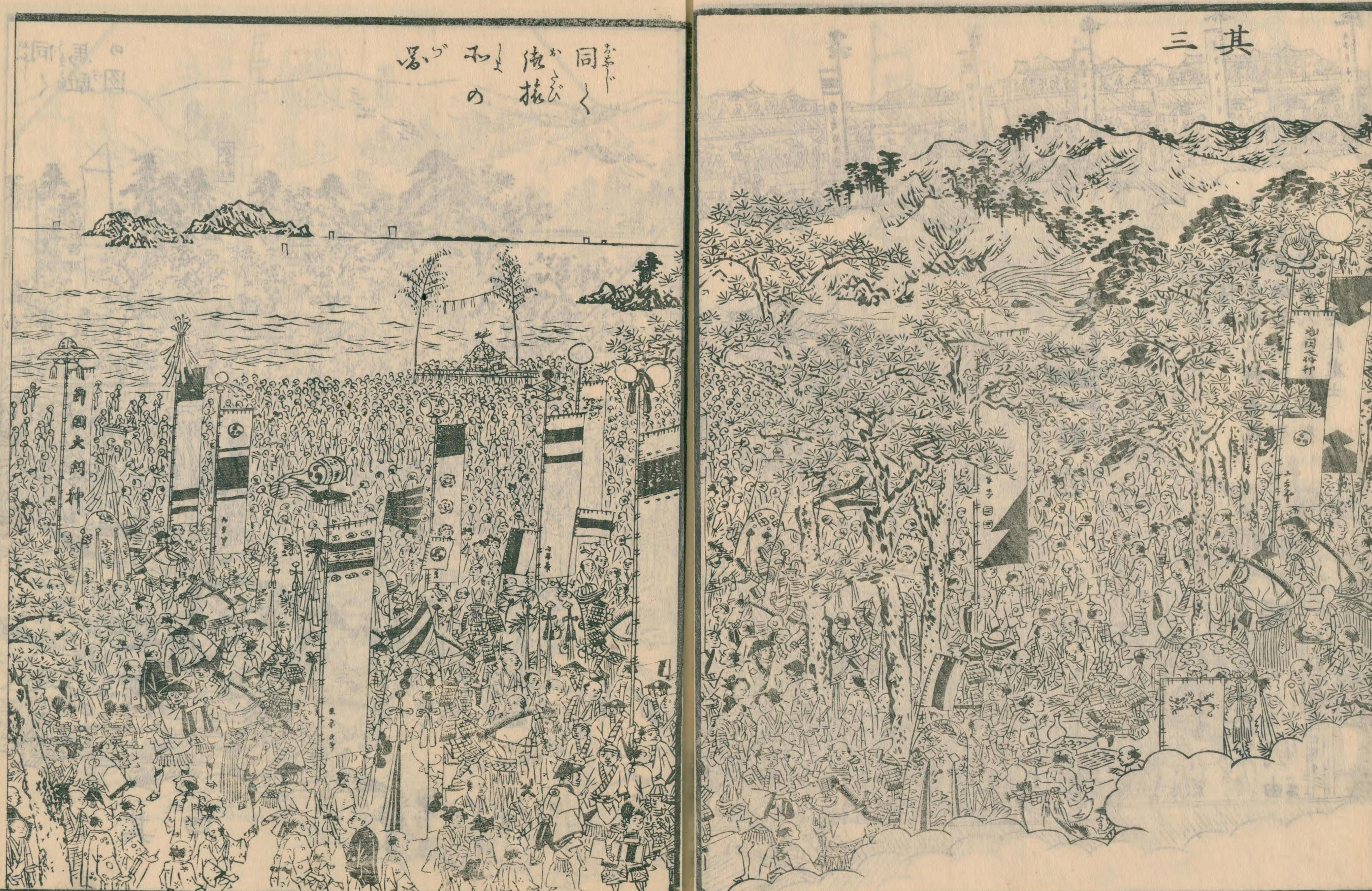
神輿渡御の図

江南竹枝
九月南中祭土神青龍
白虎畫旗新滿路紅塵
玉驄躍萬人爭見鐵衣
人
海莊處士

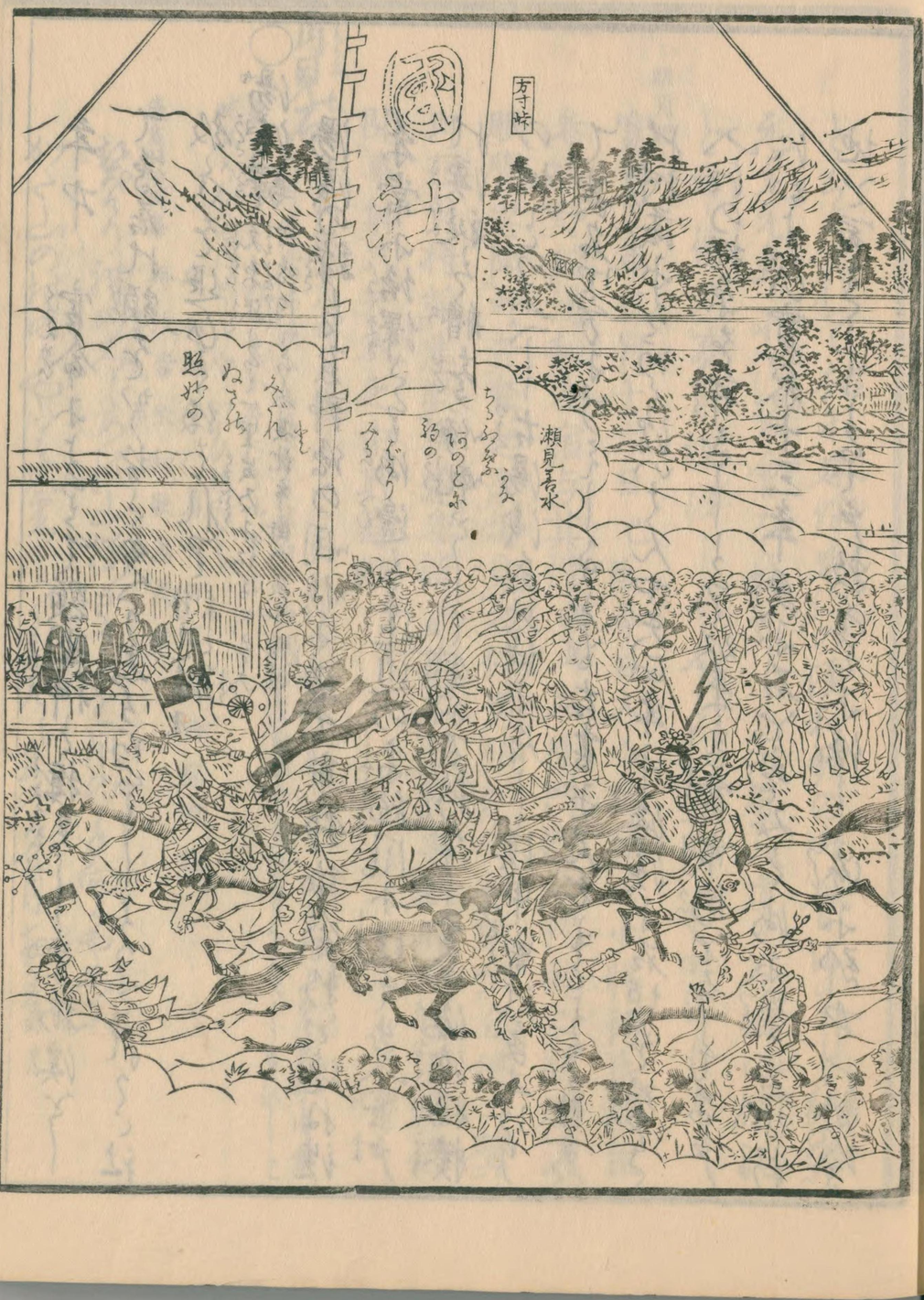
国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

同く流鏑馬の図

其三



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用



同く馬駈の図

其四

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

年中　官命によりて顕国神と称し李楊渓として
旧居の額をかゝげられたりしよりこれを社
殿を造りて後これは（作とも長尾系とも云）

○湯浅驛（広村より一里余にある町なり町の内にも又其他市街の名多し略す）

湯浅の驛は熊野街の咽喉に居て市鄽旅舎軒を連ね往
来常に絡繹たり海邊を遠近の商舶風に従て出入蟹戸
に漢縫て艤をなし帆して実に海陸輻輳
の地といふべし古湯浅氏此地に居し頃甲冑の良工あり
て其名四方にきこえしかども古書に見えざれば
此村落中をかは流れは天正年中海浜に石垣を築き
入江の水を埋めしより以来富賈市街となりて千戸
におよび寛永十二年更に石をもて海に築出し軒
地と為しより戸数ますます繁栄し遂に郡中の都会

となれりて本に建保建仁の頃和歌の御会ありし行宮
元文元年に涅槃会を修せし宗景入道が石崎の彼
ど市街の繁に埋没して今これを知るよしなし

明月記
寛喜二年正月十六日己酉今日人々物語云少将頼氏朝臣
参熊野於湯和左宿与其侍後見左衛門尉合枕臥之間燈消
眠覚忽聞奇音驚起秉燭見之件男顔加手被斬唱念仏二声
即死少将雖悲歎猶遂参詣云々甚不可然事歟昨今已下向云々
聞事躰只共人之中所為歟

月見石　湯浅の北辺居町東側の人家の裏にあり建保四年八月後鳥羽上皇熊野御幸
の時此地の湯浅に出御ありし此石に御輿をうけさせ月を賞したまひしと
或人いへり又小町の裏に井あり御幸の
時此水を供御せしといひ伝ふ

後鳥羽院御集　建保四年八月廿日五首御熊野詣
路次當坐和歌湯浅宿

契りあれや神のみしめは山桜さそふ風のまゝに向ふや
かゝる山の村のゆふやみ寒くしてまどろむ夕の夕月ぞする

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

秋山月
おなじ秋の空に光添もんや峯よりいつる月かな

冬山暁
さえつゝや峯の木枯よも吹らん吹添ゆる雪け山の端

獣火 山羇旅
なかくも旅寝の袖もぬれにし山の雪風のさそふ

明日香井集

建保四年八月廿日

熊野詣の途中湯浅の宮にて御会ありけるに

山家
分けゆけばみる山桜や咲ぬらん雲よりさきに分れる花風

山夕
日影さす雲にうつるその夕暮山をわけ入れば雲に風ぞ涼しき

山月
深山やいつも夜わたる秋風の吹上れ涙にいはるる月影

山晴
えはさる様の外にてやらておのれしくる峯の横雲

山旅
秋の夜わたり白妙の衣手に分かさなりてさしみちれ山風

湯浅師(ゆあさし) 湯浅氏の一門湯浅うらし須より始まるとぞ伝へて今知るもれす

異制庭訓往来云

鎧中署鑣形鍬首竹角等一向違古躰宗当世様召寄紀伊國湯淺乃至洛陽邊聞候物具細工共自核調至為立随分認手砕心所結搆也

太平記西院本主上山門臨幸條

湯淺荘司進出テ申ケルハ畧威毛コソ好モ候ハ子共我等ガ手ツカラタメ拵テ候物具ヲバ如何ナル筑紫ノ八郎殿モ左右ナク裏カヽスル程ノ事ハヨモ候ハジ云云

とあるにより湯浅の物具細工名高かりしなるべし

石崎(いしざき) 古人石崎を湯浅の古名といへり然れども宗景が居址なりしゆゑ名るなりし湯浅中れ字なれ湯浅と湯川とあせり

一本明恵傳云

元久元年二月十五日於紀州湯淺石崎入道宅親類宗景修涅槃會

湯浅氏故居(ゆあさうぢこきよ) 湯浅村須谷町の小に湯浅殿屋敷といふ所ありこれなりや

湯浅氏は藤原姓と云又紀氏ともいふ湯浅氏の内行もよりて知れるなり次世に此地に居して武勇を以て称せられ康和元年宗永といふ人始て此地に居るといへども其後平治年間権守宗重其名天下に聞ゆ其子孫多く宗光に至り次宗光が子孫繁栄して数十家に分れ其裔宗家と共に宗重の子孫当国に繁栄し一族家中一揆の連署に六十人余の姓名を載られたるも一門家盛の事を証すべし又承久の乱に保田氏執権の時までも此一家一門京都六條の辻子に館ありて朝廷を警固せしなり云々且九州に紀伊の国より小十八ヶ所の繋を立て当国にて其中北過ぎ

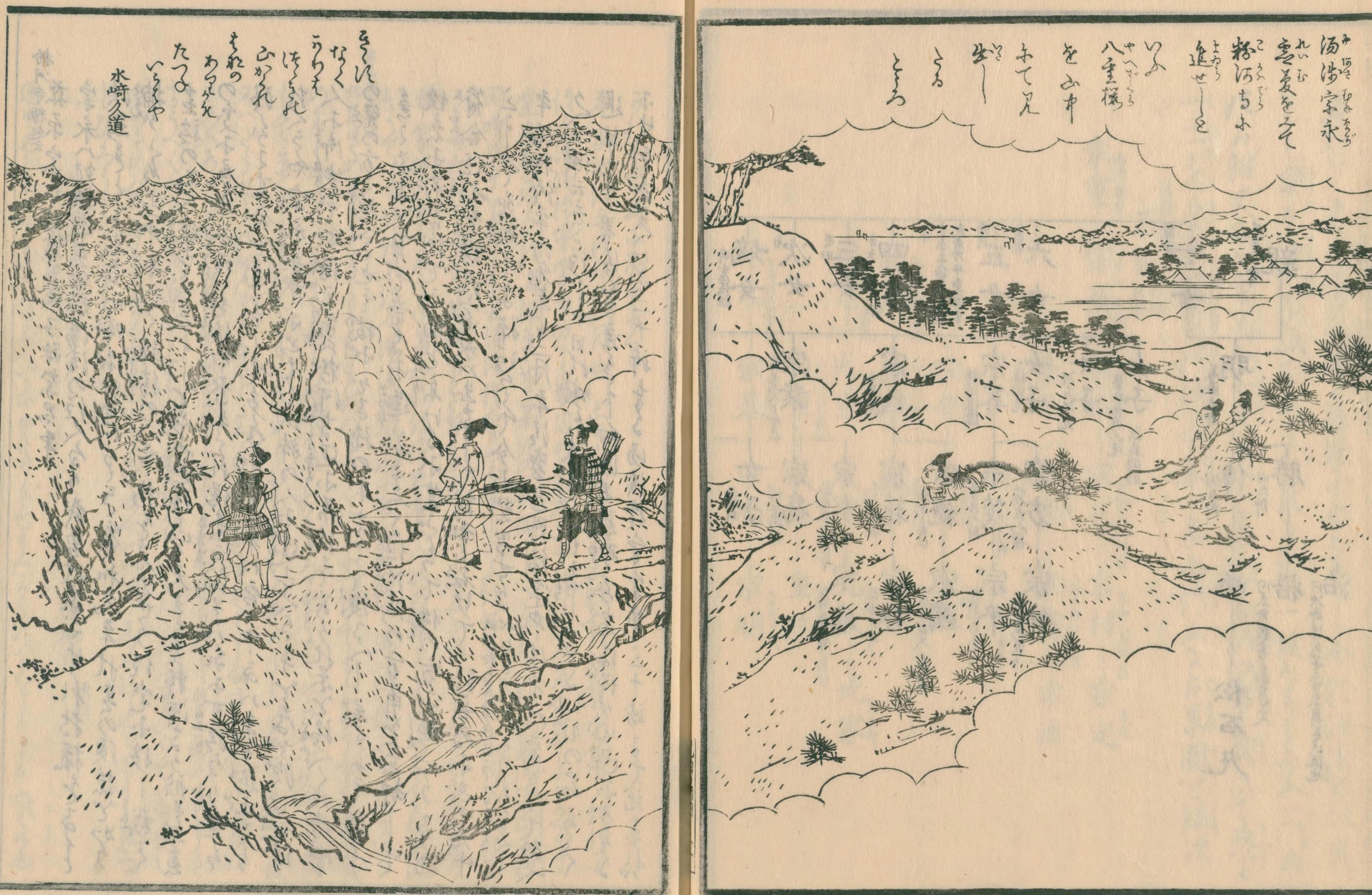
太平記評判云 此の代より大番役に漏れし一箇の役人数百人紀伊の子孫とも言伝へし

名にゆもそれより以後子孫繁衍し今れ湯浅を以氏
とし或ハ?を以て氏とせるもあれども皆一族なりとぞ一門の
姓名雑史古文書等ニ見ゆるといへども紛冗を厭ひて纔に
一二を挙げ後世に傳ふ山家が家に傳る古系圖を孫次

湯浅一門
系圖（大槪取要）

宗重（湯浅権守）
- 宗景（太郎 嫡流）
  - 宗弘（弥太郎）
    - 宗良（太郎入道 紗㳒?）
      - 宗村（太郎入道 阿執）
        - 宗定（彦太）
        - 宗治
    - 宗直（三郎）
      - 宗有（三郎太郎入道 宗忍）
    - 朝弘
      - 義弁
  - 景元（九郎）
  - 宗弁（景元舎弟）
    - 女子（宗有妻）
    - 宗武（八郎）
- 盛高（二郎 次男流）
  - 盛綱（十郎）
    - 盛平（太郎左衛門）
      - 盛安（太郎兵衛入道 智性）
- 宗方（六郎 三男流）
  - 光重（太郎）
    - 成光（太郎）
      - 光政（又太郎）
        - 光家（彦太郎）
  - 貞重（刑部入道 寂西）
    - 成重（太郎入道 定仏）
      - 重政（太郎兵衛入道 蓮智）
- 宗光（七郎兵衛 四男流）
  - 宗基（太郎左衛門）
    - 宗尚（右衛門太郎）
      - 宗明（又太郎左衛門）

- 嫡女（崎山居信勝）
  - 女子（惣持）
  - 宗業（三郎左衛門入道 智照）
    - 宗為（彦左衛門尉）
    - 宗家（二郎兵衛入道 浄智）
      - 宗泰（七郎兵衛尉）
  - 宗氏（三郎左衛門）
    - 宗範（太郎 世阿）
      - 宗春（兵衛太郎）
    - 宗親（二郎入道 西仏）
      - 宗國（二郎左衛門入道 宗西）
  - 宗篝（栨田法橋）
    - 宗茂（太郎左衛門尉 仁義）
      - 宗平（左衛門太郎 本名）
    - 宗方（二郎左衛門尉）
      - 宗仲（二郎左衛門 業り）
  - 女子（栨田尼）
  - 女子（河邊 河尼）
  - 女子（藤三郎女 崎山尼 法名円明）
- 次女（南）
- 三女（保田）
- 四女（吉原 上野）
- 五女（一宮 吉原上人母 了全法院 武者所平重國妻 ／ 糸我河）
- 六女（吉原）
- 七女（藤並）
- 親（藤並十郎）
  - 明（藤並太郎）
    - 傳（同五郎）
      - 尚
        - 松石丸
    - 勝（同六郎）
      - 悟（同太郎 殺害 文永年中?入）
      - 治（同次郎 源氏等宮原具足氏流也）


源渉宗永
霊夢をみて
粉河寺に
進せしを
いふ
八重桜
を山中
にて見
出し
ける
ところ
ちりも
なく
うつも
はてられ
ひかれ
たれの
あつみえ
たつる
いろそや
水崎入道

粉河寺縁起云
藤原宗永移栽花木子孫繁昌事
宗永は紀伊國在田郡湯淺の住人なり武勇の家に生れ指揮をなすに
次第まことも當寺に帰依の心ふかくきに承和元年に其の須抜をかり
捕へて山中に入り殊勝の八帝標を見出せり住宅に移し栽へて
聖語の如く進むべきよしをさて其跡山の天王なる粉河なる彼是思慮
の處に夢中に落る雲海の衣着る僧来て云かの花は家に可留なり只すて
浮かず本命を違ふはずして多年になりぬ宮が申すは爭か點止せら
れべきや宗永夢中に思ふく此辨の人に進むべきずとなく汝云誰
人に御坐すや僧云我は粉河なる辺に居住してあり此花を移すべくは御堂
の兇の方に移すべき也是を拔きて子孫の末までも護るべしと夢さめて後より
急ぎて花木をもりて當寺に進みてまつる但約諾の方角を忘却して
使者に不告訖て理由を来けるに先立ちて件の方に移しけるに其の
符合によるを驚き宗永は出家して飲西と名付けて一念無為に志して九十
にして死ぬその子孫につきて今に繁昌せり 此縁起は天福年間のこと ばかりなれバ今をもてみるに其のしるしなるべし
平治物語平治元年十二月平清盛熊野詣途中洛中に変を聞て都へ
帰る條云去る十日北陵六波羅より飛脚到来しつある切目の宿にあり
追付たり 暑清盛急ぎて下向に暑熊野參詣は湯淺權守宗重に
に丈を立ちれバ分二十騎なる湯淺權守宗重三十騎にて就集れバ

この外凡百騎に及ぶ事なし
平家物語平治二年八月山門と南都合戦の條云大衆入て院宣を承り紀伊國
住人湯淺權守宗重以下畿内の兵者二千餘騎大衆にさしそへて清水寺
堂舎を攻らる 暑源平盛衰記の文同しさらなれと暑湯淺宗重
同時の事を書して云湯淺權守宗重といふ紀伊國の武者にありしか
わつか廿七騎でまゐりたる其時はよき勢すでに三百餘騎にこそなりたりけれと云へり
平家物語云寿永四年暑丹波侍從忠房は八島の軍より落て紀伊國へおちて
湯淺權守宗重と頼んで湯淺の城にぞ籠りける
岩山氏文書云
ゆあさの入道がもとにこれもりへもんぐくがむつきそてもとよりゐざしんも
のゆゑは也さゞめさくわがやうれ時へきれくあるんどはそでひらんれ丈をつるへ
してまへめしてほんどきくべきよしおほせつかはしもつらせたまへくは
又ハぶつうせられおんぎうるんどさうでなおならせてかまし候さぶらうやうにとゆの
さの入道がるとぶらゐあくて敵よるてもやうにおほせられてはとひろうしやう
まうべく候よしもくもぶうせられぬ房ちうられさへぶうでなおならせてあそびし
ゆあさの入道がもとはもんぐくがうのやさせあくべはうしんほうべきよし候よ
どひろうしてまふべく候 恐々
元暦元年二月廿日
九郎殿
在御判 頼朝
追申 ともかくもゆあさの入道がやうはよくよく申せられさせたまへくれぐれもとくしてまふべく候也

平家物語ニ寿永三年三月惟盛卿熊野参詣の條ニ云是ハ当国の住人湯浅権守宗重が子に湯浅七郎兵衛宗光といふもの也（今日高郡岩代王子乃辺ニ又あり）

明恵傳記曰建久九年（略）石垣山奥人里三十町許隔テテ筏立ト云處アリ奥アル霊地ナリ上人ノ舅湯浅兵衛尉宗光ガ知行處也（略）翌年上洛其後又筏立ニ栖ム

同書曰石垣ノ地頭職違乱ノ事出来シカバ保田ノ星尾ト云フ處ニ移リ住（上人ノ行状ニ云元久二年秋紀州ノ庵所地頭職ノ事申ス人有ルヲ他ノ領ニ成リシカバ六借事有テ又移ル）

東鑑（尾ニ住還）云兼元四年二月十日紀伊國安弖川庄地頭職者故右大将軍御時為高野大塔造営奉行賞賜高雄文学房訖御素意被改彼一身之處此間湯浅兵衛尉宗光称得上人譲状望申安堵御下文被経御沙汰以件地頭職不申子細無左右難譲補輙不可被許容之由雖被仰之宗光為御家人有其功之上准新恩可宛給之旨頻依愁申今日被成政所御下文云云

上覚

一本明恵傳記に上覚上人を明恵の叔父としるせり今系図を按ずるに此人すく高雄抄清書然聖達中より引きたれ係にまず宗重が子の十二男なり紫華の御坂上のことなるをぞ宗重にをさせけるそのかみ文覚が一具の上覚といひしはこれなりとかや

孫六入道宗佛

太平記云元弘二年三月八日（略）楠正成は去年赤坂の城にて自害して焼死したる体を似せして落ちたりしを実とこころえて武家より其跡に湯浅孫六入道宗佛（孫六今湯浅ニ作ル太平記四）を地頭に居置きたりしに今は河内の国に於いてはかるる者もなしと心安く思ひける所に同四月三日楠五百余騎を率して俄に湯浅が城へ押寄せて息をもつがず攻戦ふ城中に兵粮の用意乏しかりけるにや湯浅が所領紀伊国阿瀬川より人夫五六百人に兵粮を持せて夜中に城へ入れんとしける由楠伝へ聞きて兵を道の切所へさしむけて悉く是を奪ひ取りて其俵に物具を入れて馬に負せ人夫に持せて兵を二三百人兵士に拵へて送る体をして追つ返しつ同士軍をしければ湯浅入道是を見て兵粮を入れんとするを楠が兵と戦ふぞと心得て城中より打出てそぞろなる敵の兵どもを城中へぞ引入れける楠が勢ども思ひのままに城中へ入りすまして俵の中より物の具取り出しひしひしと堅めて同時に鬨の声をぞ揚げたりける城の外の勢同時に木戸を破りて塀を越えて攻め入りける間湯浅入道内外の敵に取籠められて戦ふべき勢もなかりければ忽ちに頸を伸べて降人に出でにけり云云（抜屋義助紀州下向條にもみえたり）

本宮太郎左衛門（或八郎）

太平記貞和四年正月八日四條縄手合戦の條に云和田新発意如何にもして師直に近付き組んと伺ひける処に武蔵守に打違へて死なんと進附くるを此程河内より降参したりける湯浅本宮太郎左衛門と云ふ者是を見知て和田が後へ立寄り続様切て掛るに和田新発意は頸をかかんとすれば大の眼を見開て湯浅本宮をちやうど睨む其眼終に塞がずして湯浅に睨まれたれ大剛の者に睨まれて湯浅頸をば取りて気も臆しけるが天に見え俯けば見え後日より身を睨まれ眼は天に見えて然るべく病付て身心悩乱しけるが七日と申すに湯浅つひに死にぞしける

湯浅庄司

（ゆあさのしやうじ）死に至る。略同じ文正年に云源家は湯浅八郎に討たる太平記にあれども書せる事も知れず文状に一党の事見えたり湯浅庄司のこと書せるもの無し

湯浅又四郎旅居

旅居并に湯浅の城跡あり宗重の子なれば是也

御幸記云

廿三日天晴（略）午刻許入湯浅宿所五郎ト云男宿所事甚過差予之不堪感引所残鹿毛馬了今日適休息終日偃臥

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

湯浅醤油 村中にて製す醸法尚殊に世に勝れ名産にして其味極て美なり法華を去しめ云ふハ是又醤油を多く製し出す世に湯浅醤油の称ありて

玉井醤 村中大坂屋三右衛門店にて製す経山寺味噌の類なり或ハいふ経山寺味噌ハ興国寺の開山法燈国師宋より伝へて由良の庄にて此製法を伝へて由良にて製しそめしといへり或ハ今是を紀州にて製して法燈国師に因て製す一国産の一種とぞ実に未曾其の味なれバ紀州経山寺の称なく他邦にて唱ふるなり

諏訪神社 湯浅中町にあり祭礼七月廿七日より廿九日にて

社伝にいはく御射山にありしを後世此地にうつせりといふ氏神顕国神社よりも古き鎮座なれバ湯浅庄中に産土神と崇む又云むかし此神地へ壇を築きて世濁に祈りしを建て社とするなりしに元禄九年はじめて社殿を造営すとぞいへり

玉光山深専寺 同北町にあり浄土宗西山派なり

当寺ハ宝徳年中明秀上人の草創にして願主ハ白樫左衛門尉法名秀月宗悦居士なり今白樫の像を蔵む付物数品あり

平賀鳩溪の物類品隲に湯浅深専寺内に鑁八樹の大木ありまハり七八丈周囲一丈二尺と見えたり此樹今れ枝葉繁茂せり

熊頭山福蔵寺 同北中町にあり浄土真宗西派末寺三十八ケ寺あり

当寺縁起に云信州雲代の住人平林正友といへる者兵乱を避て当郡広京郷に移住す其子来文明年中蓮如上人の弟子となりて 法名浄久といふ 宮原に一寺を建立す次に六世の孫来此時永禄年中湯川直春海部郡衣奈浦にて寺地を免許し一寺を建立せしめ諸役を免許す次に天正年中当村に遷しし時須賀右近家次よりも諸役を免許す次に慶長以下継目ならず

真楽寺 御蔵町にあり

宝林寺 中町にあり

仙光寺 浄土真宗西派 横町にあり

来福寺 浄土真宗西派 中町にあり

入江松原 湯浅志に云北町の端人家の末衛を南へわけて松原ありて満潮もなかりし西まで続来り今の川のきハより東北方へ一連の並松ありしを入江の松原といへりとぞ古人云入江川松原にゆる汐風にちどり鳴よる名所の歌あり今の長方(?)年中久世利益といふ者此地を歌国に称誉の歌あるりといへり

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

白樫左衛門肖像

御幸記

十月九日 畧次又過今日御宿三四町許入小宅宿所自上雖有例假屋此家主依儲雜事入此所（文儀智 音男トイヘリ云云）先是又依文義從男取宿所先入小宅之間件宅有憚之由聞付之仍騒出テ入此所（先達如此事不憚之由 被称父喪七十日許云云）雖然臨時水ヲカキテ以景義令祓了又依有所思取潮垢離カク是臨時之事也此湯淺入江邊松原之勝形奇特也家長送題二首詠吟窮屈之間甚無術兼燭以後又著立烏帽子如一夜参上小時被召入蔀内又依仰講師事了即退出

享保七年九月十一日湯淺村の隣栖原にやどれ十二日入江の松をみて出たつ翌十三日つとめて此歌を出さんとせし時君にいのみそうまといふものしらせしかば、おもしろくおもひてかきとめおくもの也

しるかま

おれ読のゆらんのさらへ入そそのまま見ゆかくみのみゆくぬの絵

又贈別

又いつれ秋を契らむ入江川なくれ夜のくちひをとりそれてん

右二首のこころをとりてよみしは

木葉石（このはいし）

木葉地に落て上より土集り年を経て石に化しけるものなりとぞいへりこれを破れば木葉のかたちまさに交錯して恰も彫刻せしがごとし

かきつくしふるさとせはみそらの苔深の入江にかゝる藻屑と　似雲

木葉石（このはいし）　同村山の後にあり石質黒く和らかなり石面に歯朶の形あり

密厳院国山満願寺（みつごんゐんこくざんまんぐわんじ）　同村にあり　真言宗古義

傳へいふ後白河院の勅願所にして光意上人の開基なりむかし七堂伽藍二十六坊ありしが天正の頃高野山の僧木食応其（もくじきおうご）上人豊太閤に乞ひて本堂は山城の醍醐へ本尊は高野山二王門は熊野那智山へ引移せりといふ今纔に堂舎ありしのこるのみなり又別所山薬師院勝楽寺といふ頼慶の後浄土宗となれり今按ずるに正應二年法性寺太田郷寂楽寺と高野山と阿弖川庄を争ひ関東に訴しありて古文書所謂寂楽寺これなるの寺ならんか当寺より勝楽寺の辺に堂塔の名二十許田地の字に存すれども今略す

白方山勝楽寺（はくほうさんしやうらくじ）　同村にあり浄土宗西山派なり然るに満願寺に属せし処を院ありて別に山号あり勝楽寺といへる旧跡も六坊ありしといふ寺の前に満願寺

白方宿所　一本明恵傳記

兼元四年四月民部卿長房卿熊野詣下向之時於白方宿所上人對面之次花厳金師子章注釋重有懇望之趣

云云　頽廢して當るも又粟栖に手洗池宗此傳来せり　今本今の粟栖古松あり什物に八把大師の像八幡宮の西一町許に大つかといふ字在地あり　今猶ありて此様あるは其處によりて此跡ありて引べし今文なれば所悉　上人の内侍此所に居し此なれば然らんも載て後考をまつ

久米崎王子社　別所村の南古へより一町許東の方にあり嘉禎修造の後又破壊して築地のこるのみ　官府に於て小祠を建つ

御幸記　十日自夜雨降遅明休朝陽漸晴晝天猶陰拂曉凌雨赴道無程王子御坐云云　但依路遠向路頭樹拝云云　クメセキ云云

峯山岳藏文書曰　紀州道王子社等破壊事依湯浅有願可被修造也日時勘文遣之其内紀伊國湯浅庄久米崎王子社破壊無謂云云然者為地頭之役如本丁寧可被造営之状依仰執達如件

嘉禎二年七月廿四日　武藏守判　修理權大夫判

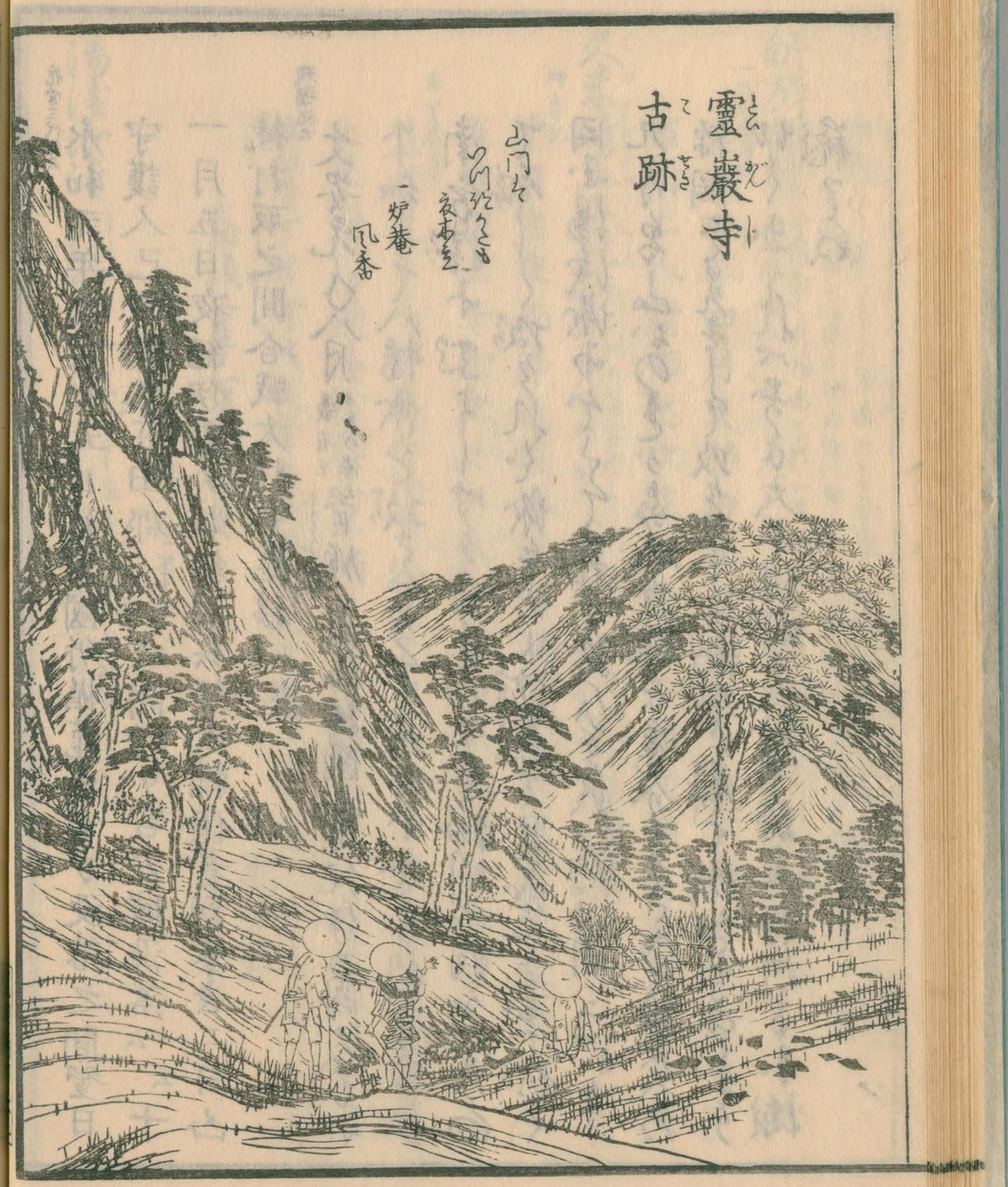
湯淺太郎殿

湯淺城蹟　同村の東山上にあり湯浅並郷其外村に傳れり　湯淺權守宗重ここに城を築きしといへり

花営三代記云　永和元年九月廿五日紀伊國所楯籠之宮方没落之間翌日守護人已下攻入在田郡湯淺等之間所々宮方城没落云云　十一月五日夜紀伊國大將細川兵部大輔使者到来去二日凶徒打取之間合戰大將引籠移云云

殘櫻記云　文安元年八月義有王云の條　管領畠山持国入道紀伊の国人等に下知して八幡城を攻させられしが然るに寄手利を失ひ南方勢に奪はれしかば重て細川出羽守を差向て厳しく攻られけれども城兵ども防戦て其城を棄て漸く同国湯淺城にぞこもりて籠城を続けられ　中間二年を経る　同三年丙寅九月畠山が家人捲佐をもとめて宗教叉入道禅綱を差向して攻られども城がた厳しく防ぎけるもつひに切て出られば寄手大に討死され宗教叉粉河寺に楯籠りける

霊巌寺古跡



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

慶雲巌寺址 名高村を去れる事東一里余の山中にあり紀仁志の実流と云ふ文中二年正月参拾と云ふ僧の寓居にして耕雲上人の書き入る跡

穴地蔵 一ツ山にあり
山田より登る所饑る洞窟にあり巌の中に地蔵尊を安置す作は
其湯浅乃地及西河を去りしてさくらぶる体系にあり

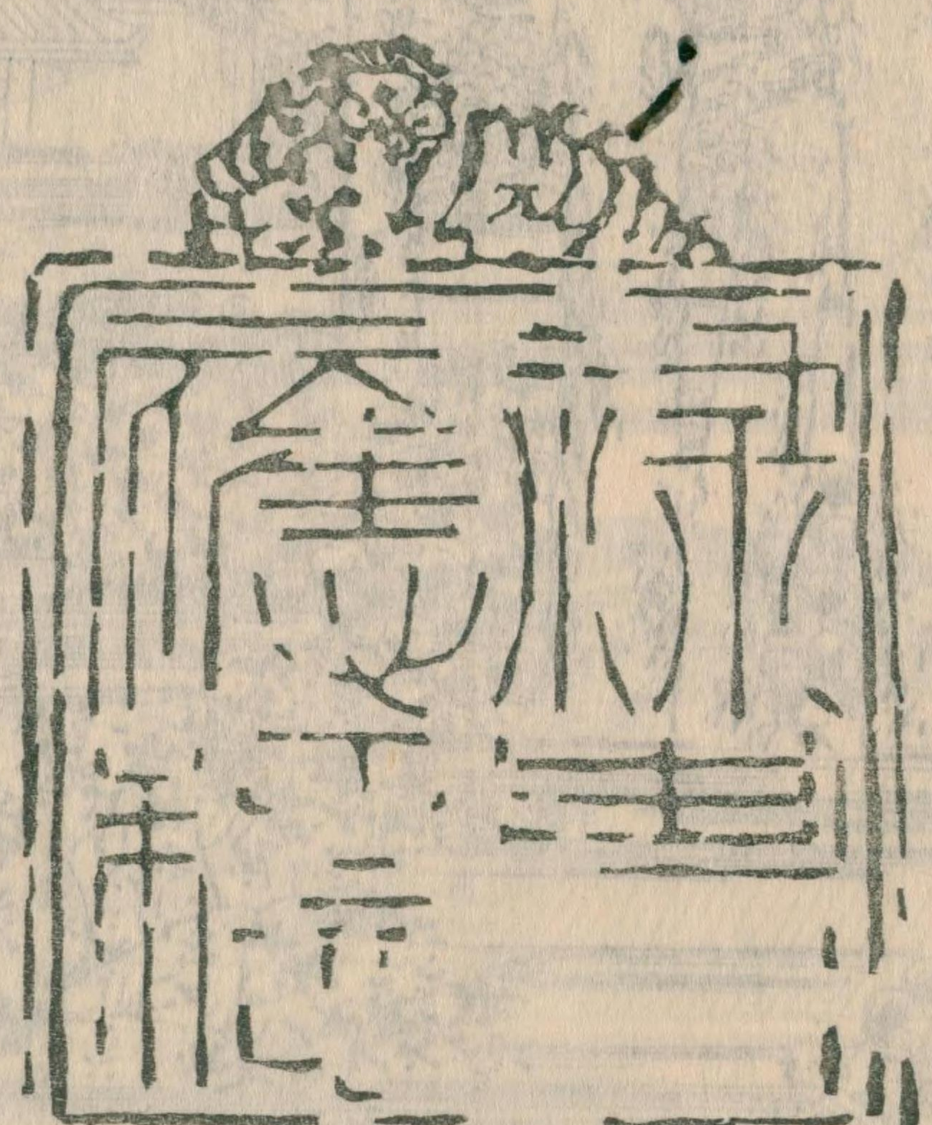
広荘 湯浅荘の南にありて十六ヶ村を総ぶ広の名東鑑文治二年閏七月廿四日広由良荘と見え倭名抄に海部郡由良荘此所下に見えたり

広川 湯浅木谷の奥より流出て諸村を経て広湯浦二村の際を去りて海に入る海口に白魚多し

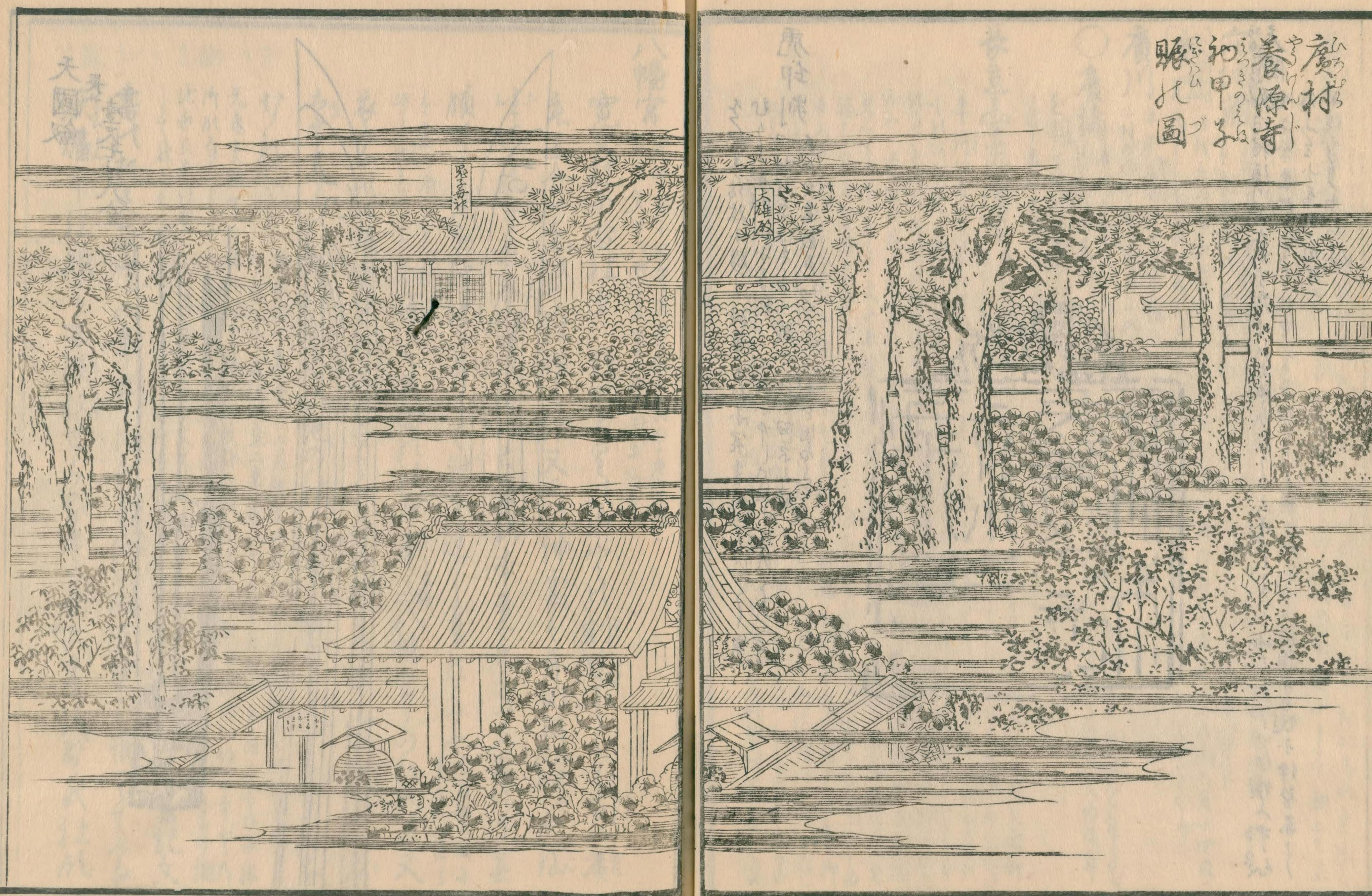
○**広橋** 広川に架して湯浅と広の境を新にし南岸を廣といふ広村も亦市街をなして
諸方の村落に行くに及び或書に弘法年中鳥山紀伊守の没後紀氏の法卒を率て河州弘誓を誓ひて広浦より名を紀州と云ひて

長安山養源寺 広村の北端にありて法華宗京本能寺末なり当寺は大本天台大廣郷法師某の画ありて紀州日蓮の徒とし広き一地なり其由来も二百年余以前に祖先の遺徳を広の風に至ひて弘め広らんとせし時当寺中に代々仕へし家ありて一向に紛失せしに祖先広浦に思ひしねらひて当寺に来り
此寺を建り大本天の此地に弘めらんとて爰に伝れる寺らんとして当寺に祝ひて
以下 有徳大君御潜藩の日宝永四年此像を御覧ありて翌年御寄附浄園院
夫人も御覧ありて更に表装を加へ給ひ正徳元年命ありて広村にあり此御殿乃地を
給ひ又寛延夫人の御殿を移されて寺とし後享保元年新田一町余寄附し給ひ同十六年御
寄進今此堂舎なり後に本堂及諸宇を建てしめ
祈禱料として年々金六十両宛を給ふ之を以て御信仰ありしを
伺ふべし 台徳を感せしめて其世に出世大黒と称へて近辺の人々皆崇めたる
なしぞ是大日にそひて当寺なり 紀中の年紀甲子日に祈願所と称する

虎印判 是紀州の名族にて法華を紀に弘め給ひし時或ハ
むかし熊野山に弘め給ひし田村に住みし此地に住みしものあり
同村提示源氏が蔵せられ今田村家にあり
氏の文書数通ありて此判を用ゐたり



天圀鋏 同村湯川氏の蔵する所にて古銘あり大将家にて納められしと云ふ御中の
今家に所有して其地の二字を銘せり天国の作として湯川家の鐵の伊勢家なり
紀州の小烏丸と同等の
名作なりといふ



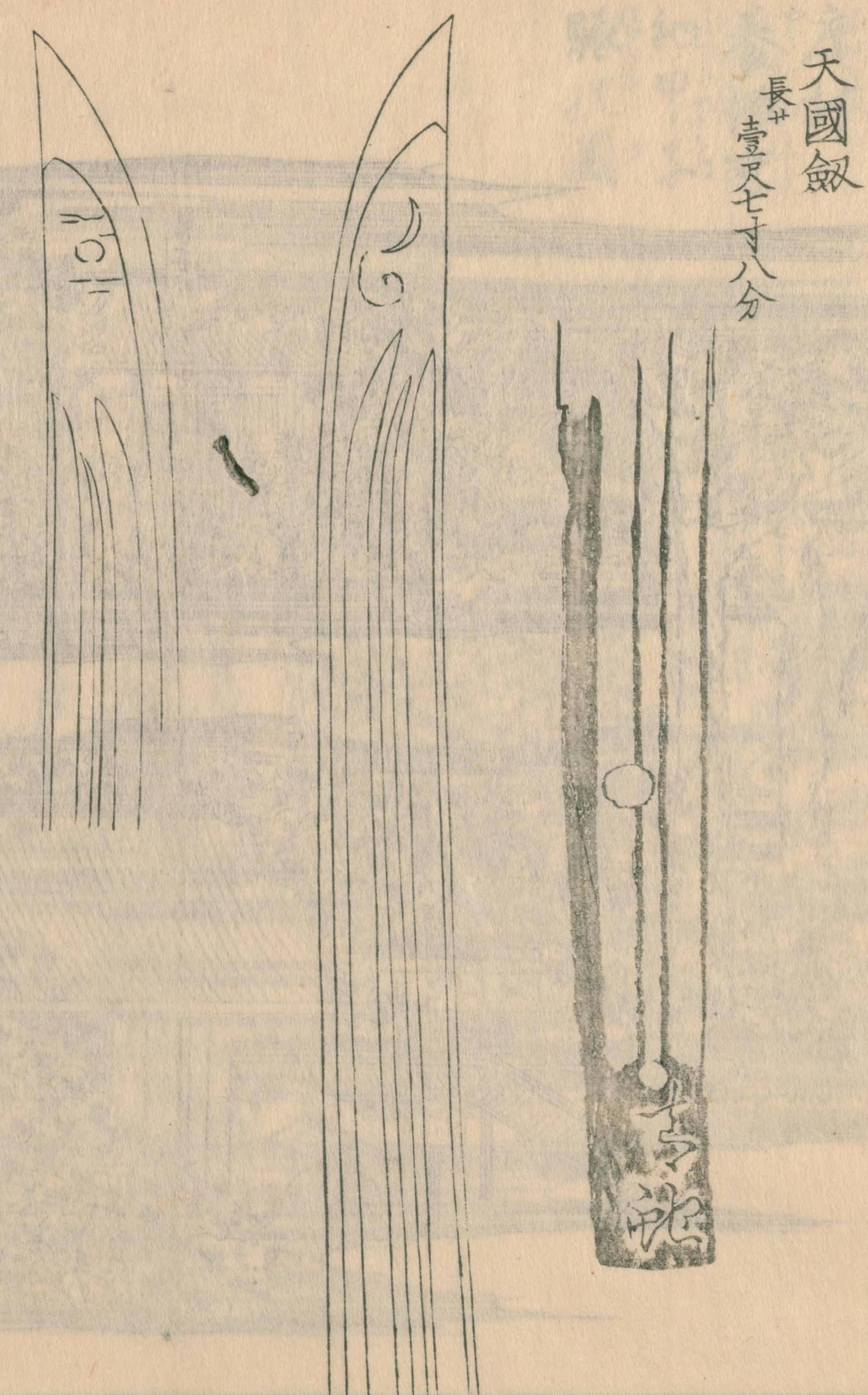
国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

八幡宮 中野村にあり元中七ヶ村の産土神祭日八月十五日近及田楽あり

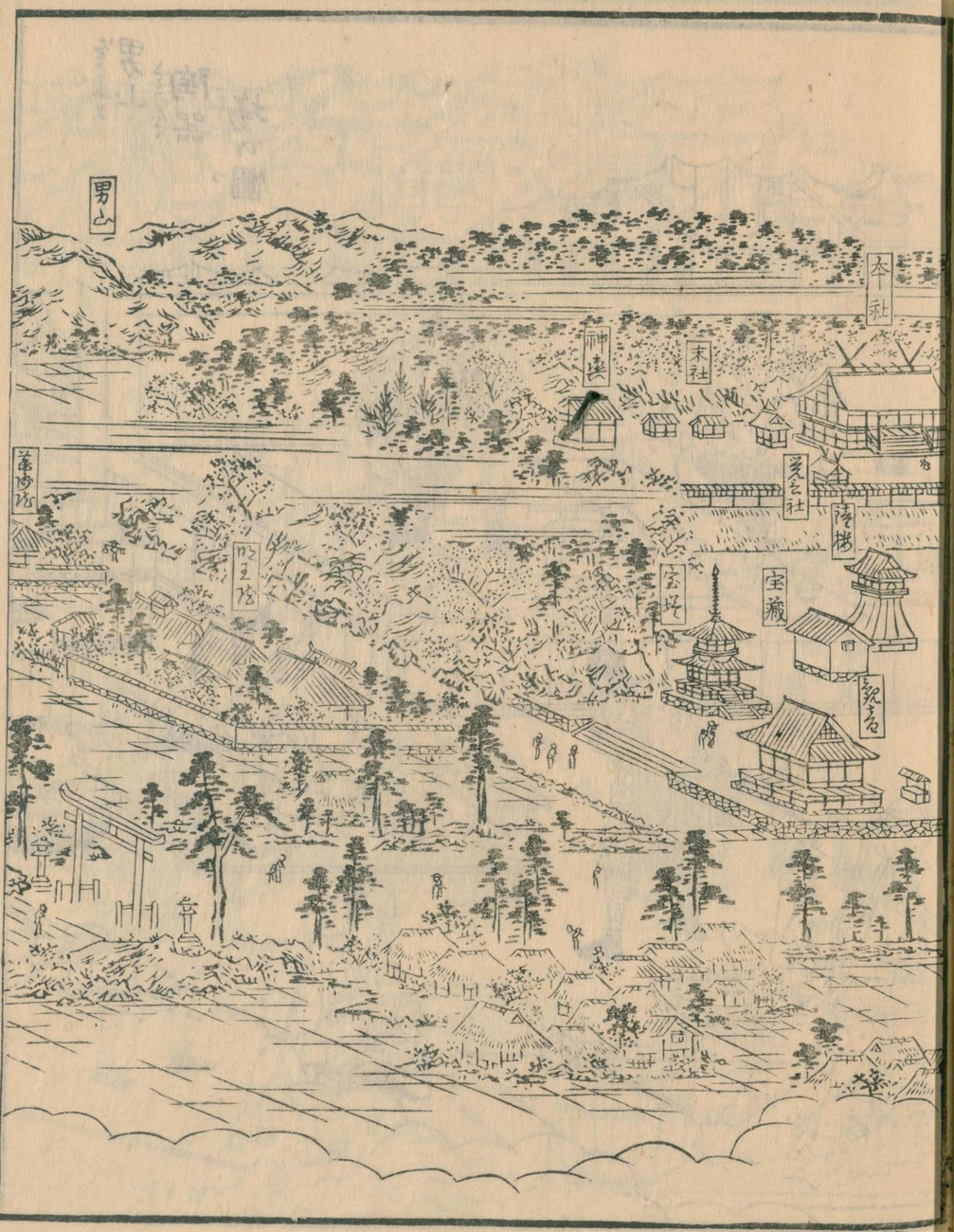
寛文記に當社は欽明天皇の御宇の創建にして古は廣大なり二分一を以て社領とし又云此神籬は前田村（荘中の村名）の小猿住せしを應永の頃此地の土豪梅本貴云といふ者により其順せし地を神地となして社を遷し奉れといふ（今相殿の御子是云の社なる）を舊の地とするを以てしとそ圓く前田の社を本山八幡宮といひ待ふ又衣家の八幡宮を勧請せしとともいへ共本山におゐるは衣家よりの勧請にあらく此地の社を本山より遷し奉れ家なるべし

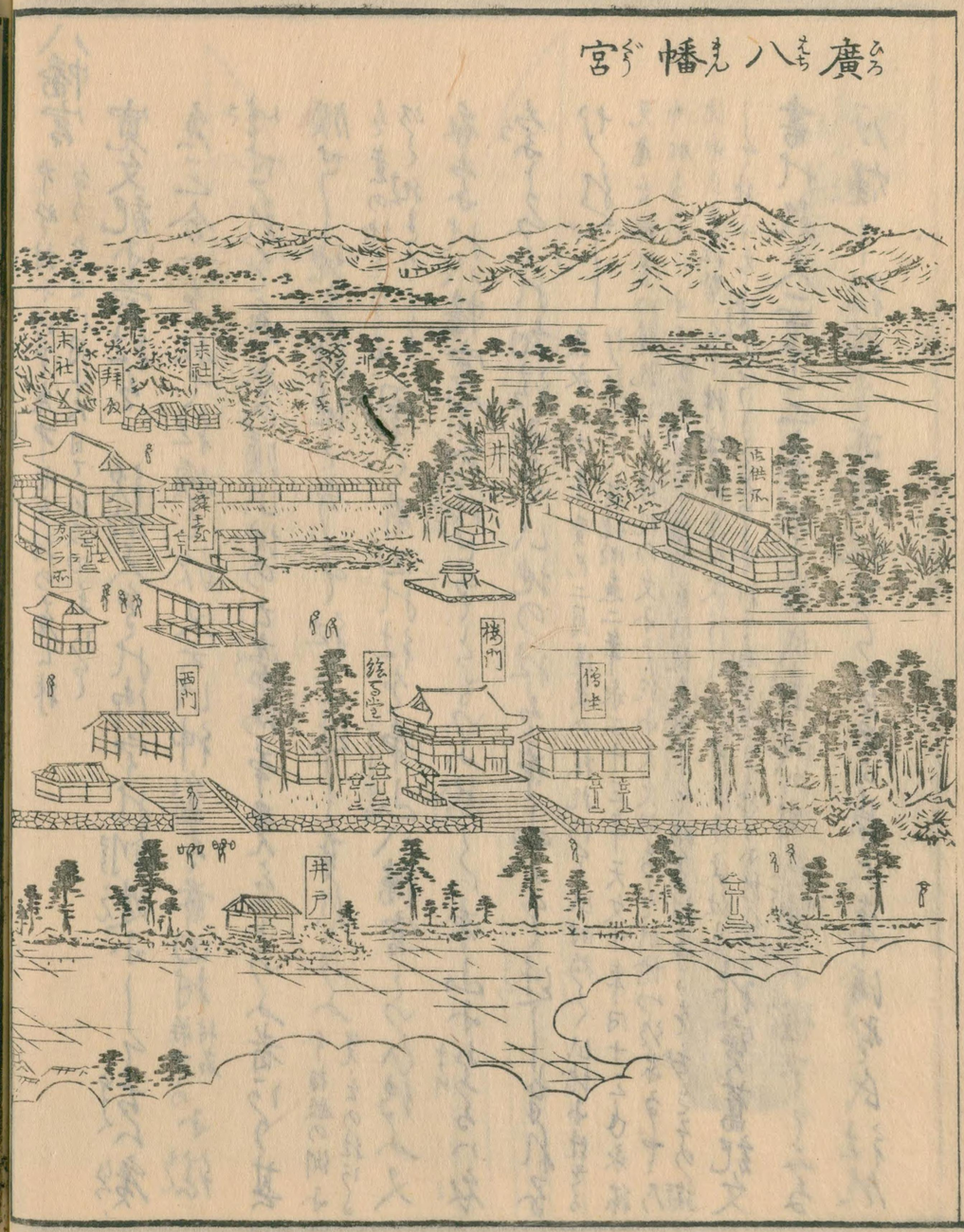
應永二十年癸巳二月造営の棟札にも此時始て此地に遷せるなるべし其他應二年永正十三年天文十年同十二年永禄元亀文禄等の棟札ありて棟札の文によれは天文の頃より湯川氏此地を領して始て社家を定め其の職に補しめ天文の頃より湯川氏此地を領して社家とし神主を定め其後氏を社務とし津守氏を公文とし竹井氏を禰宜とす今社家ありて神事に及べり

神寶舊記文書に就天正十三年豊臣氏南伐の時兵燹に罹りてみな灰燼し社領も亦没収せらる慶長六年浅野氏社領



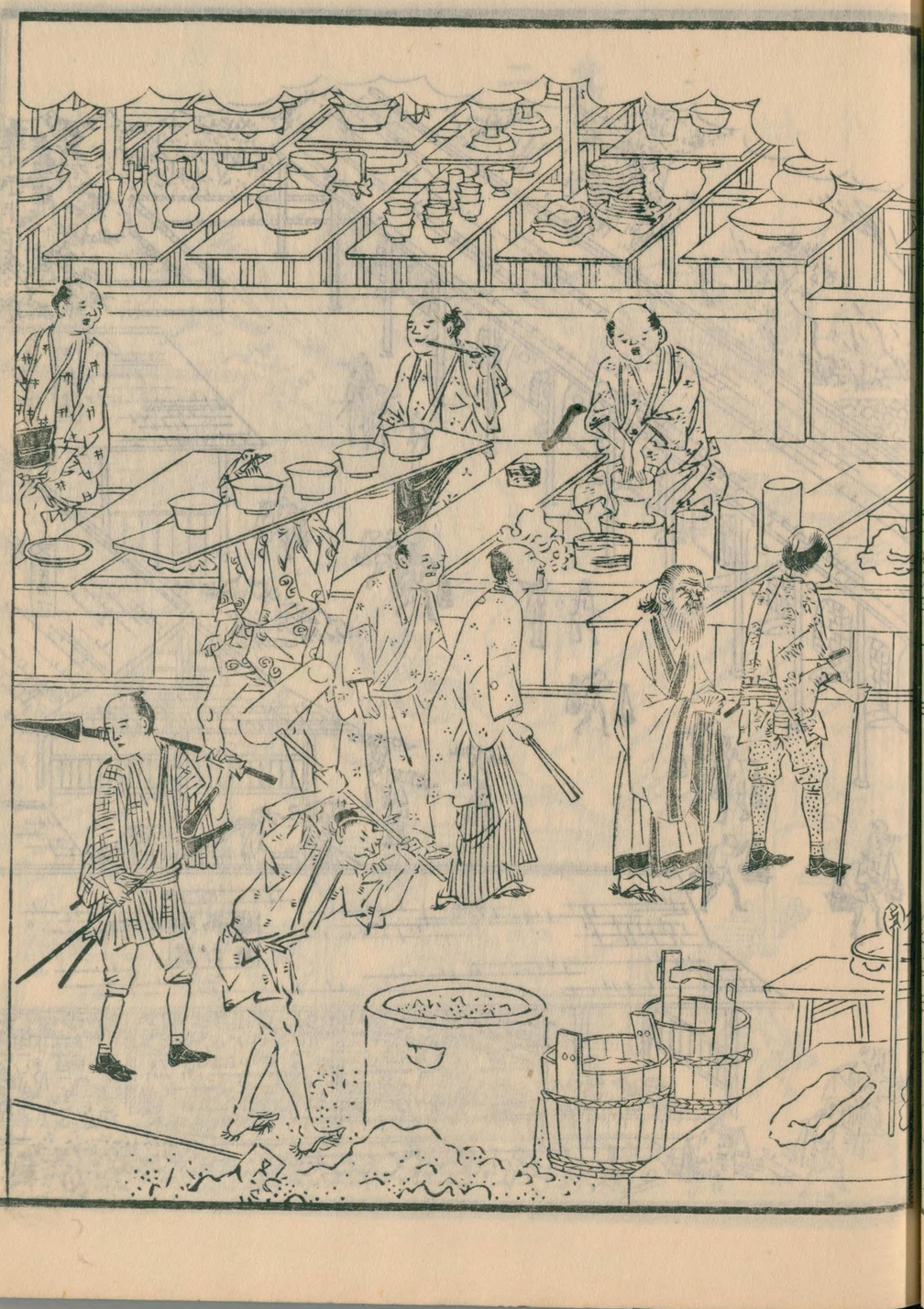
廣八幡宮

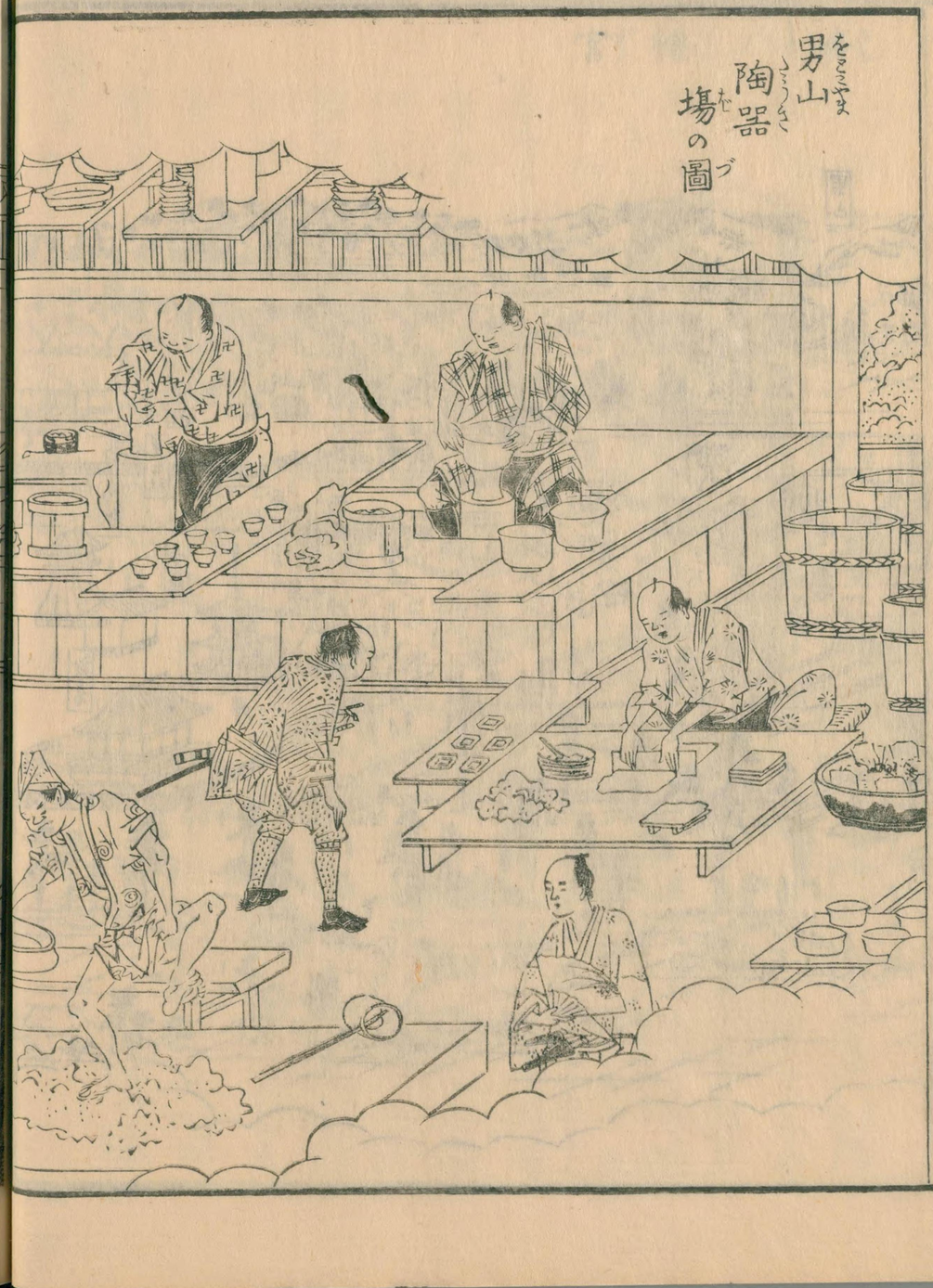




国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

をさゝやま 男山 陶器場の圖

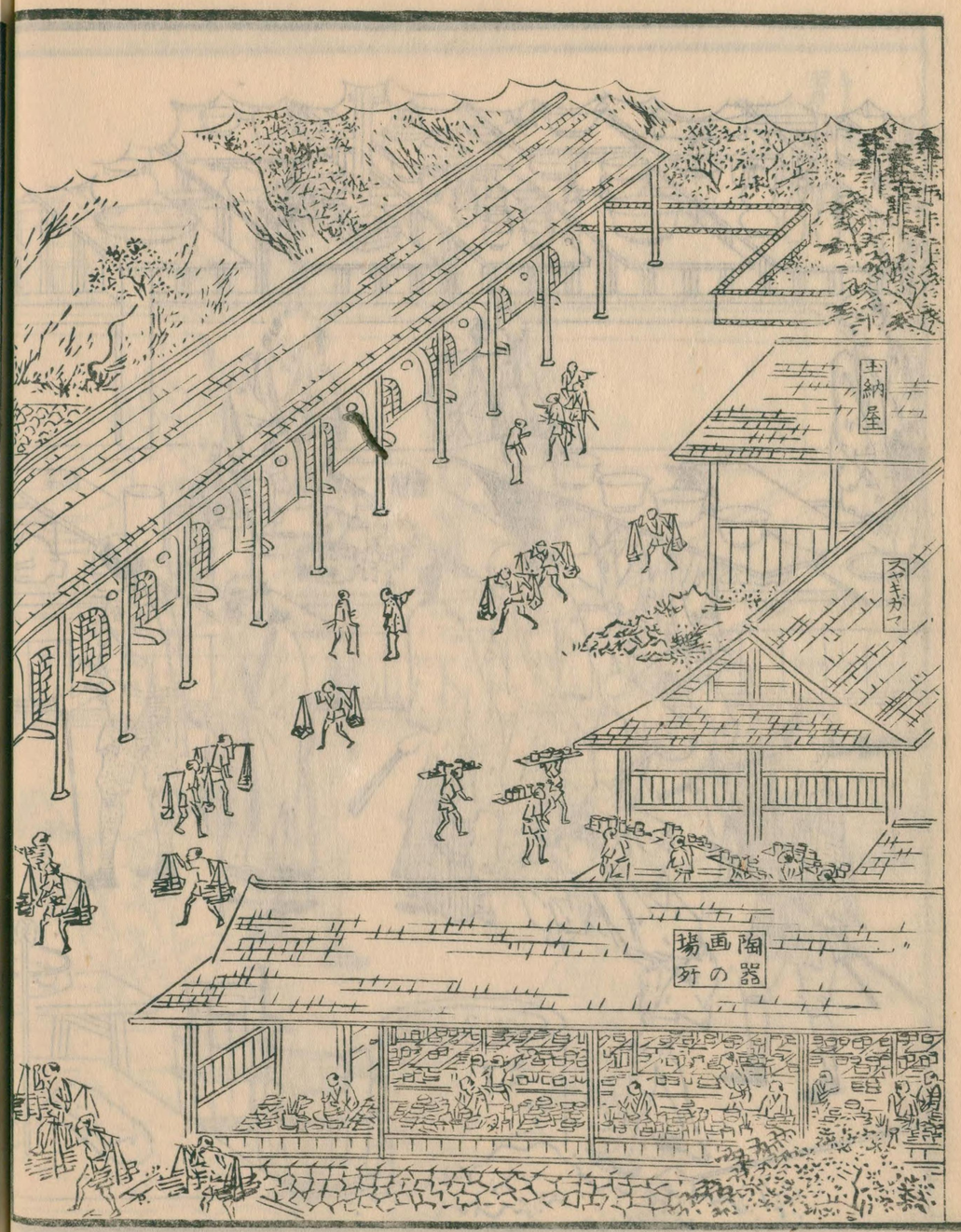




国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

其二



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

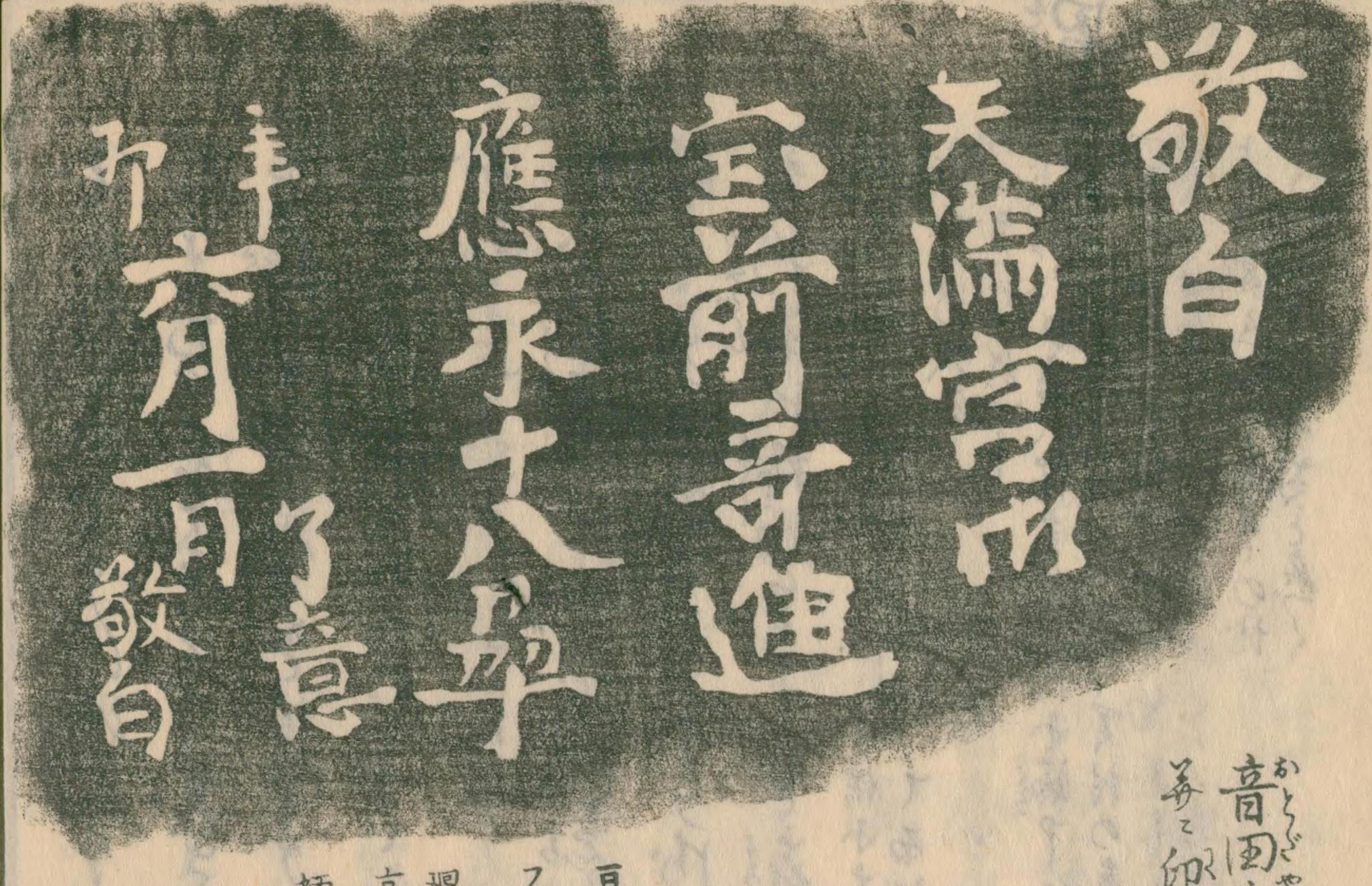
ガラス使用

十石を寄せらる元和以後是に廃闕しぬ又更に今銅
籠石燈籠ら額画馬戸帳の類数品を寄附しあへり又神
庫に藏る所古写の紺紙金泥の法華経及大般若経の古写
六百巻あり是を末に康暦永徳至徳等の年号を書写畢
巻の奥に当社に於て誦経ありて引尾立神社の寄附と
畧附らし此誦を写けくシツパラといふ其義を知るもの
なし今按ずるにシツパラを志駄良といふ古言を訛れる
なるべし（東にいふ方言に掌を拍つ事を小児に教ふるを シツタラといふ是も志駄良の訛言ならん）志駄良は史
官記天慶八年七月の條に志多良神の神輿三前を荷擔ひ
幣を捧げ鼓を撃ちて歌舞し羅列して摂津国より数
千万人石清水八幡宮に至るよし委く記し其時の歌謡に志だら
打と神は宣ふ打たる我等が命千歳しだらめとつゞくもうり
今も薩摩の上牟呂神社の祭に氏子等圍繞して手を下

垂て拍手をうち誦ありて其誦歌に志だらうちといふ詞
あり是等を合せて其古風を考ふるに志多良を即手
を垂らして掌を拍つ事なるべし又風俗歌に志
だらが畝人の一本ありて衣が丸へそいと妬し小夜に捨
かねもて訳がれまいかく嫉しくらふへ子売らうが斎も
同じ歌儛にして手を拍ち其いさとうしろふりても其是乃
誦まして家方に素うけるを嫉め打と然る時にて此
義有て此歌拍手をも其歌を持ちて歌ひしより
始まりしなるべし（俗に大夜をシタラ法ありといふ今も夕立をとさちえて面白くに此義せしより起れるかくしくら）
おうどの大夜と
いふを付る

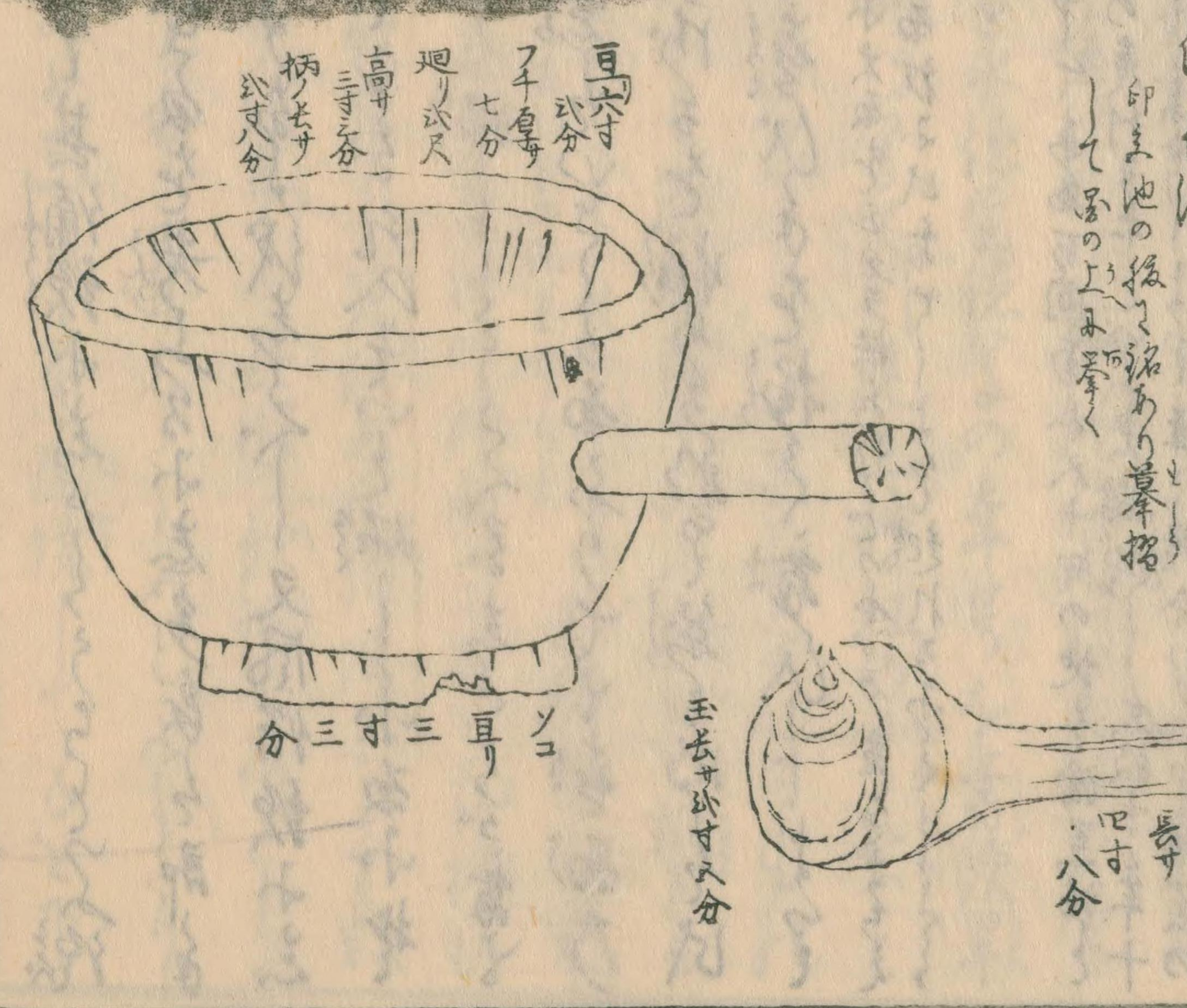
男山陶器場

男山陶器場　廣八幡宮の境内に有て東西百間南北五十間の地を陶器場と
次此地廣井原村の庄利兵衛といふ者製窯し文政十年十
一月廿八日　官許ありて陶器を製せしより年々盛に行はれて俵器の
傍らに伊満利燒の陶に似たるあり近郷廣串山の石を以て製れといふ近比山
上を開きて茶やの地
とし日ぐらしの茶と名づく



音田山天神社蔵神符印並ニ印色池

印色池の縁に銘あり摹搨して左に挙ぐ



池埀山法蔵寺 同村にあり浄土宗西山派なり

永享の頃此地に津守浄道梅本覚言といふ二人の土豪ありて惣持寺比丘祖阿弥和尚に帰依し後彼和尚本山の證入を請ひて當所に来りしかバ二人の土豪其地及山林若干を寄附すといふ 和名ハ塔頭小坊にして今も文殊坊自性坊の二坊存ス其他名僧寮西坊藤本坊梅住坊幾蔵坊残流坊残泉坊等乃六坊今皆廃絶して又末寺二十又ケ寺あり構末千余坊あり此辺の大寺なり 明應十年天文十二年此外の寄附状等あり又慶長十二年淺野氏寺領七石を寄せられ元和の後も繼開せられ園中に殿ぐれのもみぢとて楓の大樹ありて元和の頃 國君御遊覧のみぎりひ給ふとも今ハ往古の大風に倒れしとぞ

天神社 庄村の乾乙田山といふにあり此ヶ村の産土神なり又應永十八年の寄附の神符印と印色池とを蔵む其に本器ありて右色あり銘を乙田氏といふ

並神 西在の字小浦にあり小浦の岬に坐石を神躰として祭祀あり其小の小浦を向ひといふ

なぶく岬 西在と小浦との間の岬なり岬より磯多く巣をむすべて

貝化石（かひのくわせき） 西広村浜の山にありて蛤の化石多く採（とら）る
の化石あり又堅き粳石に似たるあり
鷹嶋（たかしま） 西広村の北方より二十八町にありて海中にあり北浦といふ湊ありて北風の時ハ
紀州に西面を堂の浦といふ所あり近世此書堂のほとりに今広村に
移して後に廃す
二ヶ所あり

玉葉集
紀伊国鷹島といふ所の石を文机のほとりにおきて侍りけるを見侍りて

我さりて後にしのばん人なくは飛てかへりね○鷹嶋の石　高弁上人

○広城址（ひろじやうし） 土俗高城といふ名島柳〔?〕城 別に古木谷村に残る

応永六年畠山基国当国を領し名草郡大野に城を築き遊佐豊後守入道同民部をして守護代とし次に其後此城を築て本城とす（紀伊国名草郡石垣庄大野城名草郡郷）基国紀伊に入り其後嫡男尚順入道卜山明応年中より天文年中まで此城に居住す天文二十三年湯川直光謀叛の兵を起し卜山東部の浪士をかたらひ火をかけて山を出て淡州須本に落るといふ
浦光明寺に葬るといふ

○雁頭山能仁寺（がんどうさんのうにんじ） 名島村にありて禅宗なり 寺伝に云 後村上天皇の勅願寺にして開山を三光国師といふ 其後兵火にかかりて伽藍悉く焼失し 後天正十三年三月寺を再興して禅宗となる
○井関王子社（ゐせきわうじのやしろ） 井関村北の入口にあり 土俗熊野九十九王子の一にて社地の字なり

御幸記
十日晨次参井関王子於此所雨漸休夜又明次参川ノセ王子

◎井関駅（ゐせきのえき） 湯浅より一里

南紀風雅集
井関阻雨　数見知豫
離家纔数日便抱旅旬情山林秋容老村烟暮色横東事青山遠病中白髪驚雖非異郷客幾度計帰程

○井関川 井関川瀬二村の堺にて橋を架けし
○本山八幡宮（もとやまやはたのみや） 川瀬村にあり
○川瀬王子祠（かはせわうじのほこら） 川瀬村の入口にありて御幸記の文上に引く所の川瀬王子を祀る 川を渡りて角瀬王子と称し 其後此辺より馬上にて参らしむるを留られしといふ故に今馬留の名あり
○馬留王子祠（うまどめわうじのほこら） 同村の東にあり 御幸の時此処にて馬を留めけるとぞ 或は当社をもうけまつりしとも謂るなり

藤滝

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

○津木坂（つゞきざか） 川瀬村の北をいふ東の方津木谷へ越る坂なり津木谷は二村あり
八ケ所にわかれたりといへども別に一区をなしたれば
風俗も同じ

上草瀧（かみくさのたき） うらこえあり
中村にあり巖よりつたひ落る
瀧なり蚕を治れといふ

蘇瀧（そのたき） 同村にあり其家ある其の傍にあり壮観なり飛泉乃上に藤蔓多く垂て石壁に
名とも傍に近来小堂を建たて又其家も道に傍へり小さき瀧あ
つて女瀧といふ

松廬遺稿
紫鐵如レ飛巖勢横　瀑光觸レ石濕雲生　只看百尺寒冰立　中
有二奔雷劈岳聲一
野呂隆訓

同
日暮秋溪聲益雄　急湍豚レ石捲二田風一　板橋與レ水纔三尺　人
過珠跳玉碎中

老賀八幡宮（こうかはちまんぐう） 中村にありて六ケ村の産土神なり社記に弘治年中の縁記にあり八月の
祭礼に流鏑馬（やぶさめ）田楽踊あり神宝に竜鏡獅子頭の古面あり裏に享
禄又壬辰八月吉日奉寄進津木宮
藤原朝臣大家吉兼としるせり

岩淵社（いはぶちのやしろ） 岩淵村にありしも此村は本谷の奥にて人家入十丁許の所に鎮坐して人物
を祀る神なり当社二柳明神を祀るといふ社家に嘉吉の年号
を志るせる縁起あり或説に
南紀に稀なりといへり

觀音堂（くわんおんだう） 同村の西山手にあり浄土宗西山流なり
慶長年中鹿瀬某創建すといふ

鹿瀬荘司（ししがせしやうじ） 鹿瀬荘司は元暦の頃八荘司の一といひ伝ふ今の鹿瀬六郎太夫家記に其
祖紀伊国藤原人助綾次出家して根来寺に住し其本坊と号し根来衆の
旗頭（はたがしら）を仕して六郎太夫と号し当庄数村に住し後堂家の附鹿瀬荘司の家
断絶せしを惜みて六郎太夫に命じ鹿瀬の名を継せしめ姓を鹿瀬と改むと
いへり元和の頃地士に命ぜらる茶山院明鏡
上人作の画像あり縁起の写一巻を蔵む

○鹿瀬山（ししがせやま） 生田より二里の境なり坂の嶺より
許まで下りる事廿一丁許に茶店あり

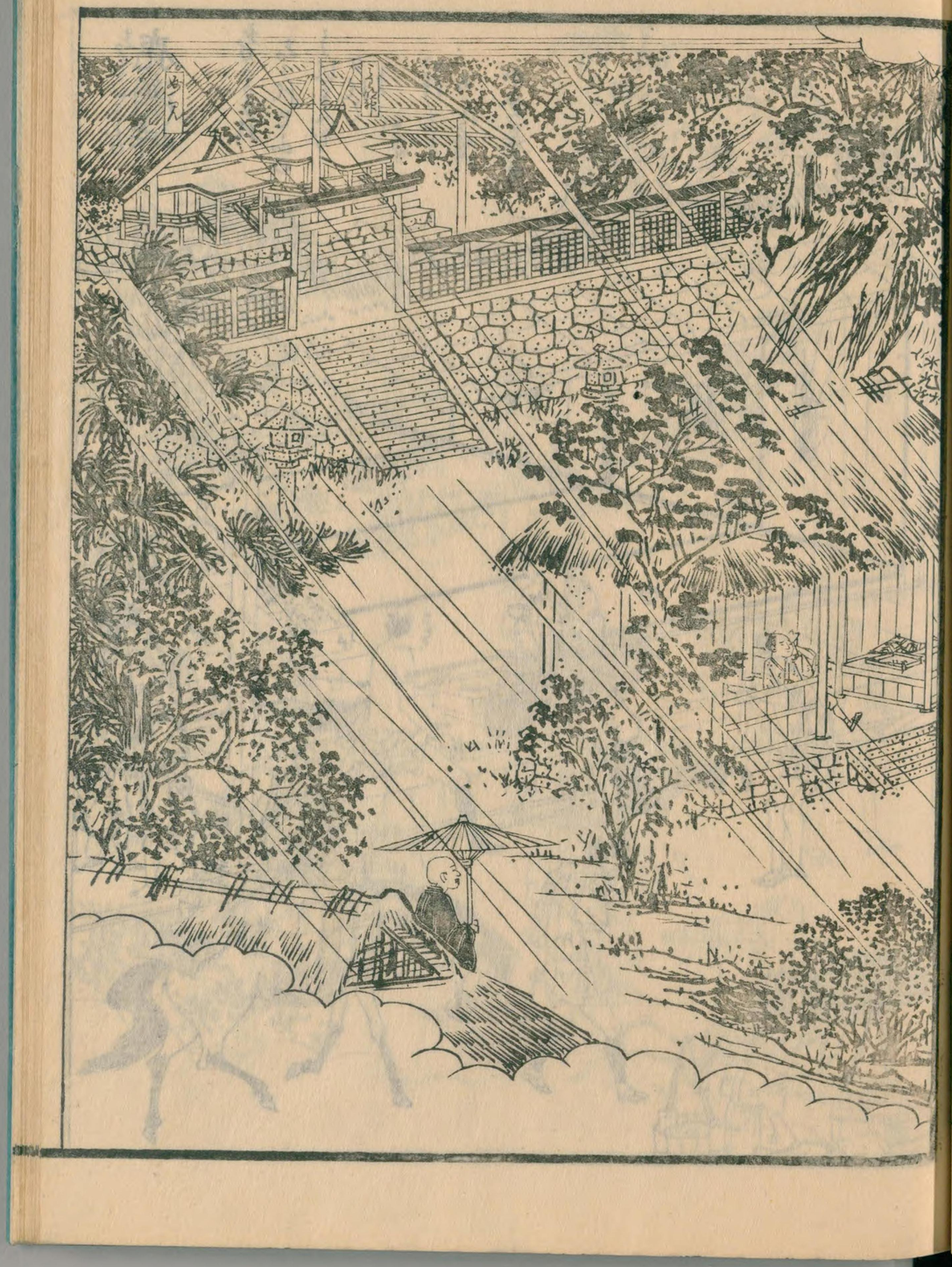
御幸記
十日　曙　次又攀二昇シヽノセノ山一　崔嵬嶮岨巖石異二昨日一

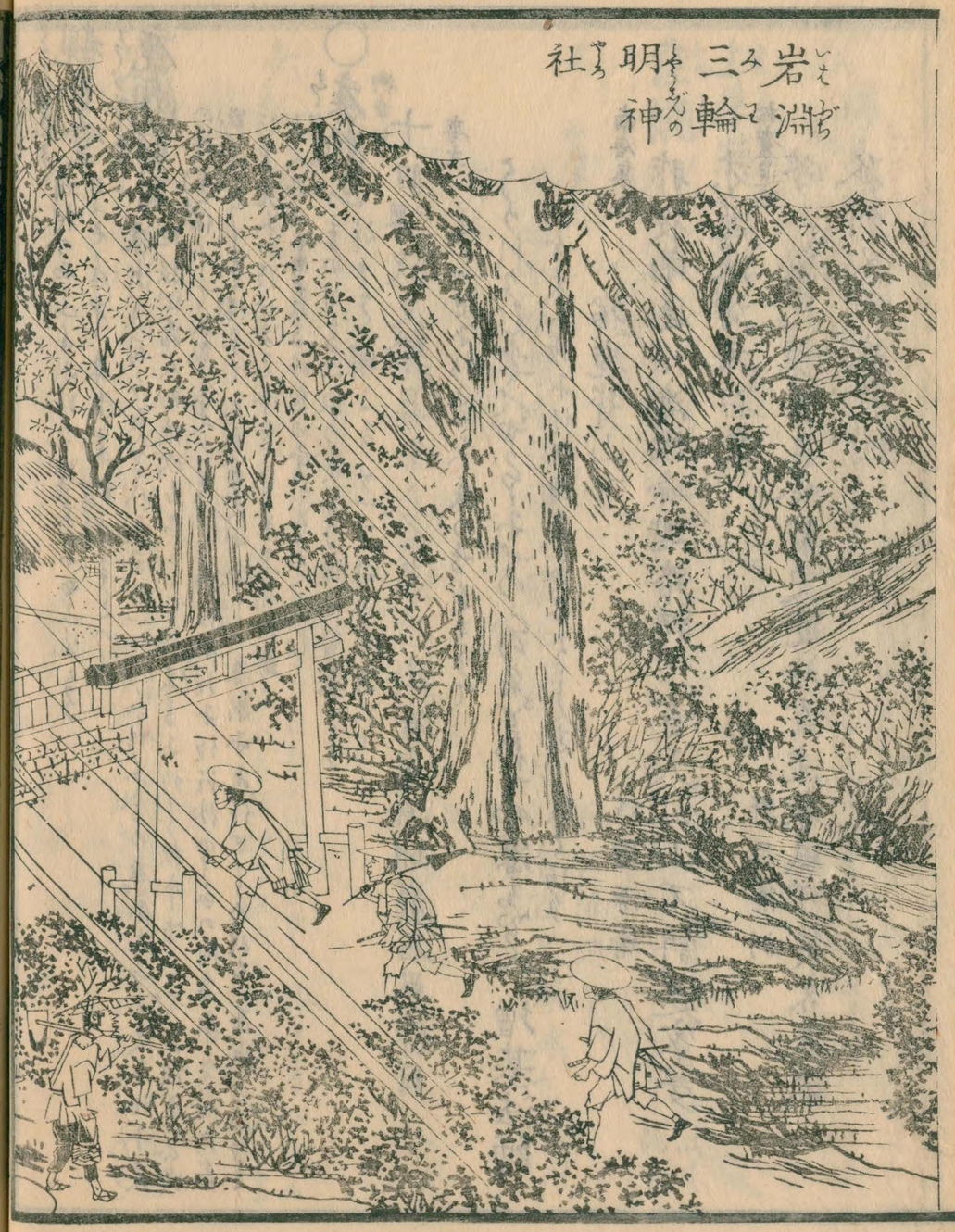
庵主
志くれせぬおる衣もの嶋をきゝて
うつれはむ妻なれやまとにせの山の名をきゝてや鹿のなくらん　増基法師
此歌夫木抄に紀伊郷にて行合よしと人志るしたといへり

南海集
宿二鹿背山下一
祇園源瑜
昨夜雨蓬沿海煙　峰廻路轉上二青天一　江山不レ許還家夢

松廬遺稿
才過二波濤一又石泉
夢入二梅花一憶二舊遊一　吟装更逐冷雲流　春風可レ笑客衣敝
孤劍又過鹿背岡
野呂隆訓

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

鹿瀬峠

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

○井関山（ゐせきやま） 糸我山の一名なるべし

新続古今集 ゐせきの山をこゆるとて

流れ出る涙ばかりをせきとめて井関の山と人は誠るか　道命法師

今按名蹟考に此人熊野へまゐりし人なれはその時よまれけらんといへり

夫木抄 ゐせきの山

天の河井関の山のこほりより白浪こゆる音そさしこほれ　光俊朝臣

初句を河内天河とも謂ひ、ゐせき山を夫木抄に河内としたれども、これは天上の銀河ゆゑ井関八郎の命がよめると同じなり

○鹿背城蹟（ゑくゞせのじやうせき） 今此奈良より西の方数歩にあり 海部郡衣奈由良の湊辺 在四日市北地も大半をとほへし 或説に湯浅の二郎が討死せし跡なりといへど、その地なるらんとしるしてみえたり

玉海云
治承四年九月三日略傳聞熊野権別当湛増謀叛略人家数千宇鹿瀬以南併掠領了

同
同五年九月廿八日略傳聞熊野法師源一同反了切塞鹿背山云云

併は悉也 當次は條下に見えたり

○法華壇（ほつけだん） 衣奈浦の良一町許にあり 下文に詳なり 旧地今畑となり 浅谷村玄海寺より碑を建て表せり

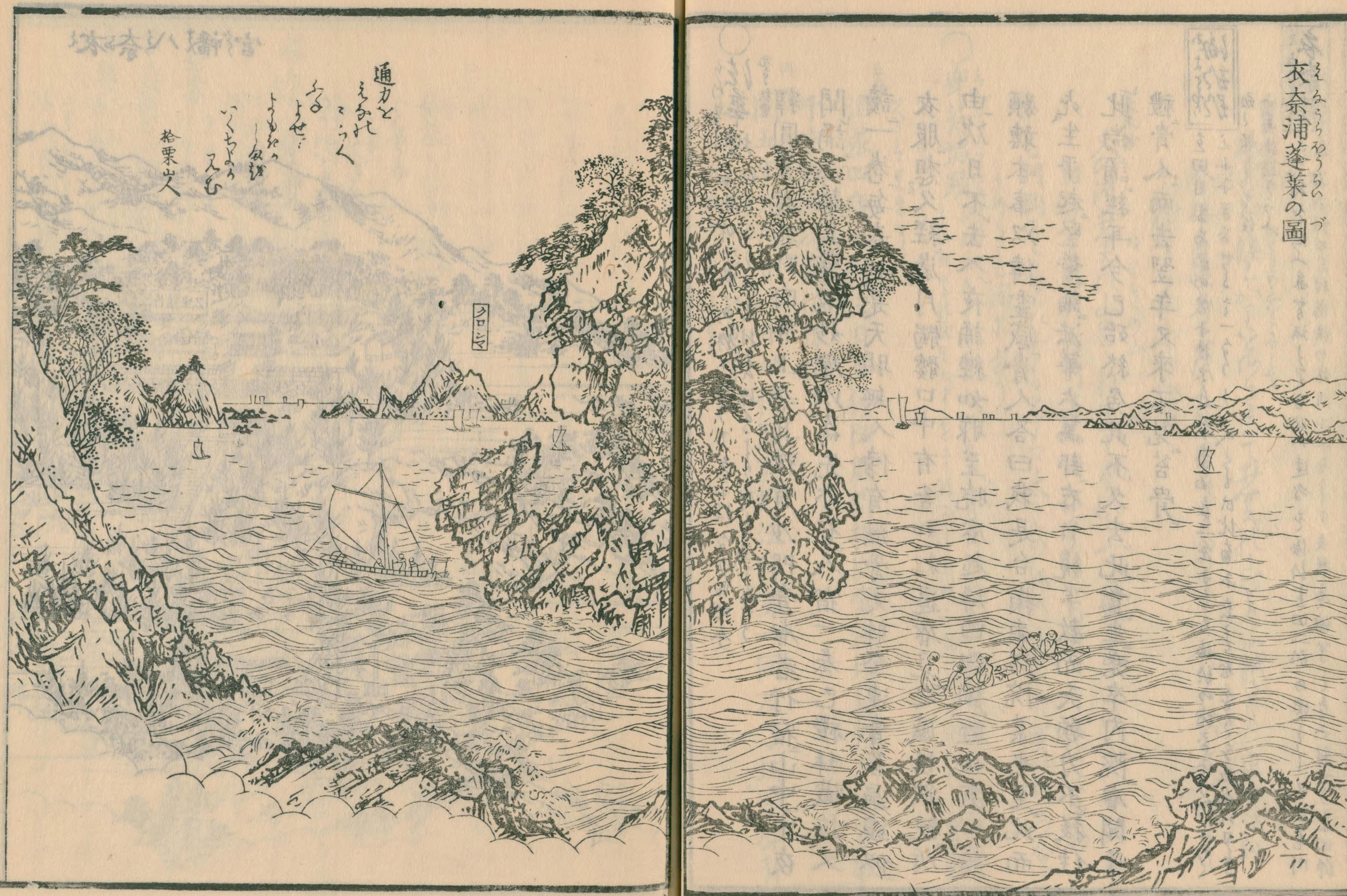
元亨釈書

釋圓善遊熊野肉脊山卒其後有沙門壹睿者行宿山中中夜聞誦法華其聲微妙睿以為先亦有人宿一巻已禮拜懺悔又讀一巻毎巻如是天明無人傍有骸骨支節全連青苔遍鎖似衣服想久經歳月髑髏口中有舌如紅蓮睿見之感怪欲視所由次日不去入夜誦經如昨至曉睿起拜曰既誦經必有心語願聴本事以傳靈感骨人答曰我是台嶺東塔院某也至此而死生平起堅誓誦法華六萬部存日纔半數而夭願力不援住此尚誦經耳今已殆終居此不久去此當生兜卒内院睿聞了禮骨人而去翌年又來不見苔骨

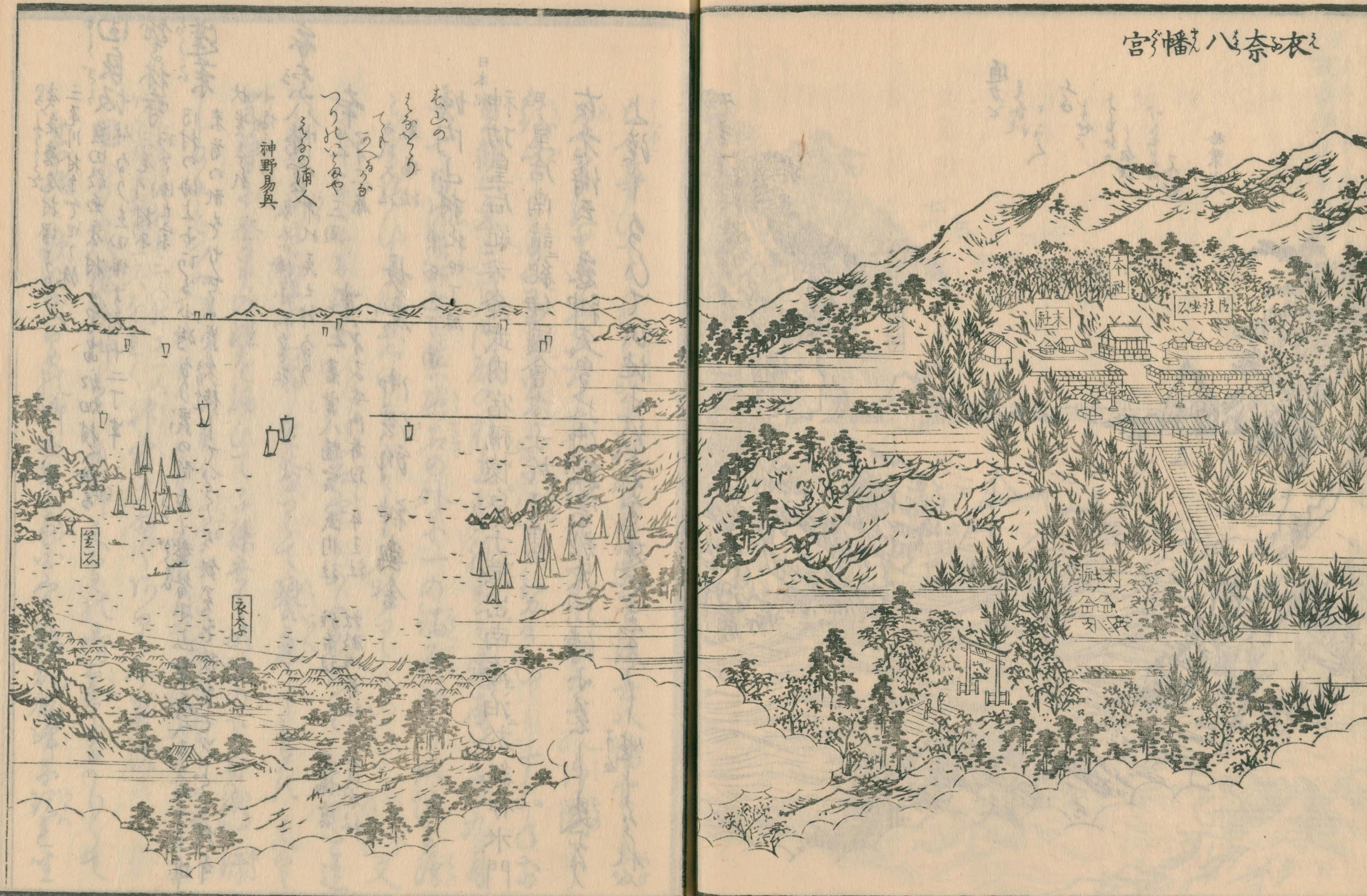
○海部郡（あまのこほり） 在田郡の南にあり 衣奈由良二村ある海部の地なれば 一郡としてもよきを 此地に属して俗に海部といふ

○衣奈荘（えなのしやう） 大ヶ村を総ふ 糸我坂より西北の連峰を海部在田二郡の堺として三尾川衣奈小引の三村湯浅の湊に相対す 在田郡

衣奈浦蓬莱の圖



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用


衣奈八幡宮
神野易興
本社
末社

由良坂 廣村唐尾村堺より三尾川村まで四丁餘 是田村西戸村より當所畑村へ越る 是田堺まで十二丁半

鷲林寺 三尾川村にあり浄土宗

蓬莱 同村の海上にある小嶋なり其の形宛も鼇背に山を負へるがごとし 遊来者の形をながむる景勝擬していにしへより詩歌を捧ぐるともがら多し 寺

衣奈八幡宮 衣奈浦にあり 此庄九ケ村の産土神なり 社地幽邃にして小塩あり

本社 方三間 三扉 末社 若宮八幡宮 武内社 住吉社 天満宮 子安御前社 牛王社 松殿御前社 石清水社

舟戸社 馬場社 長床 御供所 神輿舎

境内山林 東西三丁 南北四丁餘

日本紀略 神功皇后紀云 命武内宿禰懐皇子横出南海泊於紀伊水門 皇后南詣紀伊國會太子於日高

古老傳云 應神天皇此御社當郷大引浦に着し玉ひしより上陸しありひて此地に行宮を建て玉ひし住し玉へれば

土人尊ひて此地に神宮を造りて後世八幡宮と号る 崇め奉りしなり 又中古此縁起中にて衣奈の御園より遷り来て男山に遷られしとかや 十六ケ所 貞観二年三月御殿の柱立あり 延暦二十年九月廿七日改造せられ 其礎石の外に一の礎石有り 此地を瑞ひしとき 又ひらかれし時あやしき石出たるといへり 此石今猶ありといふ 又むかし大三本浦に 今は大引浦なり 岩守といふ者ありて 天皇を迎へ奉りて舟を此浦に着けまゐらせて饗應し奉れば 天皇岩守に登りて其の姓を賜ひて子孫長く此地の下司職を許し給ふといへり 岩守は後に蘭今上山氏といふ即ち當社の下司職にて神官の事を司り俸禄若干を賜ひ地士に命ぜられ 其他神主二人神子一人社僧一人を置く 神寶さまざまあり 今略す

國史にいふ八幡大神 應神天皇は御在世にまします時

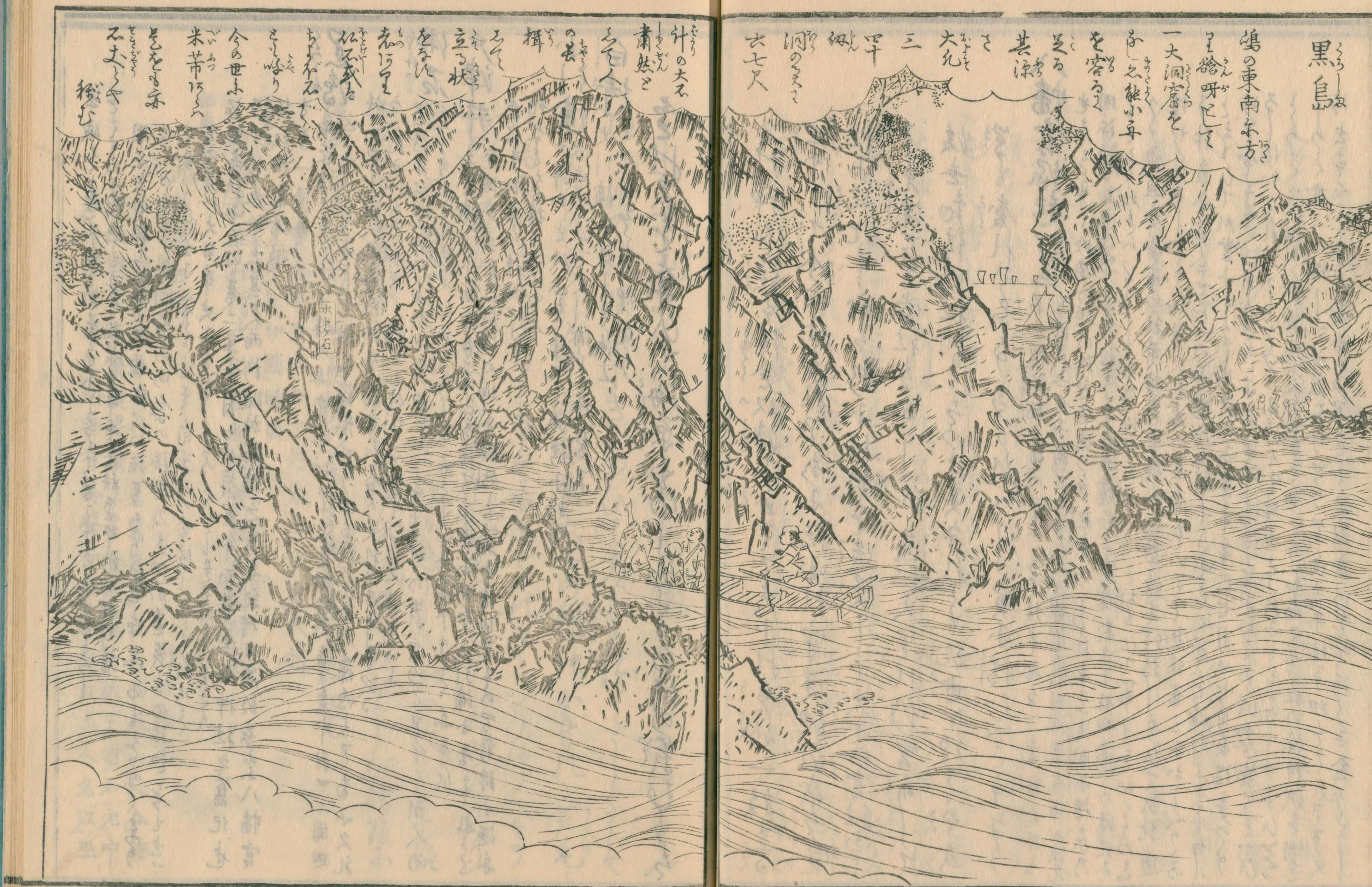
其始 欽明天皇の御世に至りて宇佐郡厩峰に現し給ふ

しして大御名を廣幡八幡麿なりと神託しあへりまた
於いて式御世佛經錦圖よりて　皇国に將来しべての經錦
文字を捧けなひし　天皇此息願によりてかゝる義を傳
へさせたまひしそれ能當附会して遂に佛及法護の大神と
稱し天平廿年東大寺に請し大佛の勧進し天息の物
奠子上云志て護の靈驗威力神なり大菩薩と稱し
奉れるなりとするも是亦佛法繁昌する時に當りて
漫にいひ出されし例の偏説の妄誕なれべけれど是より
世に八幡大菩薩と申し稱を設けし然れども上古よりも
大事あれば必ず本京にも幣帛を奉りて祈願しあり
まして武事を守りたまふ神なりしかば朝廷の尊敬大
かたならざれば史典に詳なり中古源義家朝臣氏神
號を字しとして武勇他に勝れしより源家の士殊に

これ神を信も頼奉以津に至りて天下の貴賤一致して尊
崇して今日に至れりまた国に於此守護地以或是氏
社に配祀し或は新に社殿を造営して大小の宮社あまた
あり充満せり當社も正しく　應仁天皇の行宮にして
後世勧請の社地なるべしといふ　近く寛永のころ武
家も廢れさるなり多なりべし實に恰むべき事なり

八幡宮縁起一覧

花山院照範太徳の筆にして絵出し拙なり書躰凡拾巻なる
らに上山氏に藏せり宍史云鷲峰の照用新發意が法兄
世其ぎ殊に照德の頃此縁起莫述のなり慈命あまされ夜叉宗藏園に檀家乃
周縁ありたるべしされども大菩薩の垂迹名號を十條掛かくの源記に
ことふりねまへつまさらに没他せんなりといへどもおもひて歳月をおくりぬる
かるに慈永廣辰の秋前妙光寺晩和尚鷲峰に往詣しまひて此地近
境なりおよそて新發意和尚の慈命をかへりて慈法泉三におよぐりなる
る妙縁に實合せば一の奇瑞なるべしやさく筆を染むるとよすり
とおもひて所常におよそび明れ処に翌年辛巳七月廿七日夜瑞夢のる
なりて肖まなくさきにおよそて法る事におよぐ此數ならかひ
るし経心これふりかくに治めて稀ささられにこちそめしやかしひとつ
とめく筆伐されて不日に筆業をなせり和尚又随喜の餘料紙を调せ
しめて畫工に課しで写絵をなせり翌壬午年絵なり功をとれて年又
清出まへくさよし慈命なりて為ておよそ脈痍にて既に念なくし


黒島
嶋の東南の方
に谽呀として
一大洞窟を
なし能く小舟
を容るゝに
足る
其深さ
大凡
三
四十
仞
洞の高さ
六七尺
計の大石
粛然と
して人
の長
揖
するごとく
立る状
をなし
其中に
仏石或は
ちよろい石
とし呼り
今の世に
米芾にあらぬ
是をも常
石丈とや
揖む
ホトケ石

平家をほろぼしてとおそきにようやくて筆をまかせて見せし
をたりぬ于時應永九年龍集壬午季夏耕雲野衲明魏拜書
因に云明魏は右大臣長親公の法号なり此公本朝中もならびなき
和歌の名人にや此興国寺の御寳の縁起及由良郡重宝寺の縁起をも書せ
られり然るに二書ともに自筆にて今に傳はりたるはめづらし
公の傳は大日本史にも委しく見えたれとも是等の事は見えず
縁起表紙に云明應二年七月七日有二君命一而尋二郡國神社之舊記一也
及二于終巻一故意甚久而損滅故繕二補之一者也紀州日高郡衣奈八幡宮
縁起繕表補破
之事一所

黒嶋（くろしま）

衣奈浦より十丁餘の海中にありて由良郷の寶来山に對せり周廻
二十丁ばかりにして樹木繁茂せり明恵傳記に紀州藻嶋より南に久礼
嶋ありといへるも此嶋を指せるなり久礼久呂音通じていへる
ならんこれ其西少しはなれて小嶋あるもきこへて黒嶋といふ

佛石（ほとけいし）

黒嶋に接して嶋の南面に岩窟ありて崖井の岩穴のごとくにして形人の
ごとくなるもの古人佛石又ちぶみ石ともいふ

戸津井（とつゐ）

衣奈浦より西南にある尾山を廻て小湊にありて小引浦に属すれども
匠識をも其に此浦の岬に燭嶋といふ小嶋ありてその前へ渡る舟
色々に千尋の海に流るゝ綿涛して
絶ることを捕るやといふ

小引浦（こびきうら）

戸津井と同山を隔て海湾にあり
白埼を以て大引浦と境とせり

白埼（しらさき）

大引浦に属して海上にさし出たる岬なり

雪の色を奪ひて海原にさし出る白埼の巖むらは
しも二十丈にもあまりてそゝく聳え岩がねはいかめしく
打よる浪の栲領巾ふきかへして見る目もめざましく
おもひけれそれが中に息長大后の龍神にまされる芦毛
の駒のあしをとゞめてしも渡るとはいひ伝へぬる
浪の子黒も花さくと見えて大寶のむかし人の文のくう
つらむとも数てこゝにいかしげに恋しきことにいはれようもろ縄
なすれくも岩にむかうがれな搖を沖中に舟をとよび鴻跨に
絡むまでおもしろき梶の音に夢をさましつ

万葉集

大寶元年辛丑冬十月太上天皇大行
天皇幸二紀伊國一時歌
白埼者幸在待大船爾眞梶繁貫又將歸見

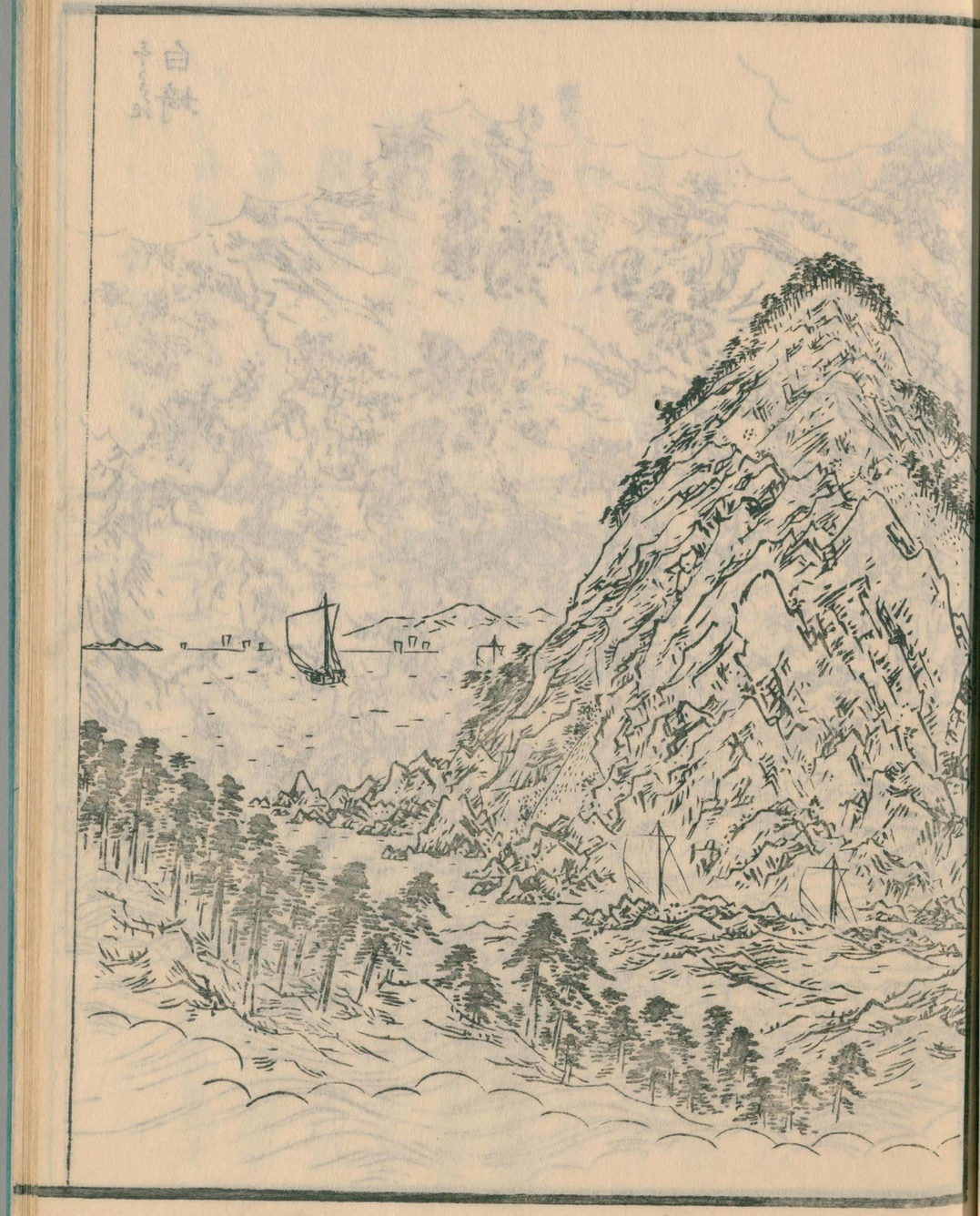
松盧遺稿

汎舟游白﨑　野呂隆訓

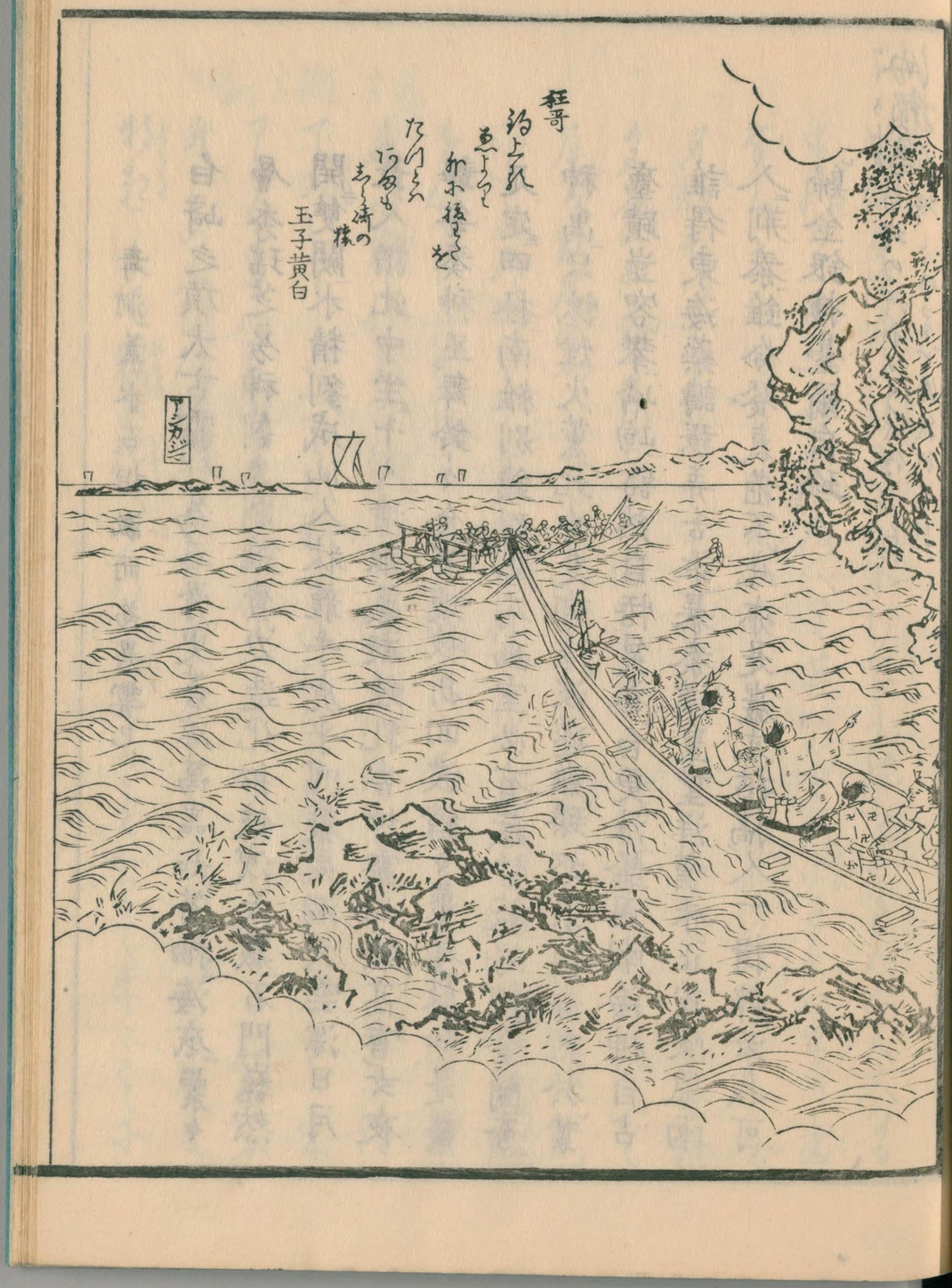
白嵜萬葉集既有二什其名舊矣在二日高西界一山足入海
可二三四里一巨巖競聳攢立累疊奇態萬狀下有二石窕中
數二千席一其深叵測時有二鈴聲一而似二巫奏一故土人名以二巫

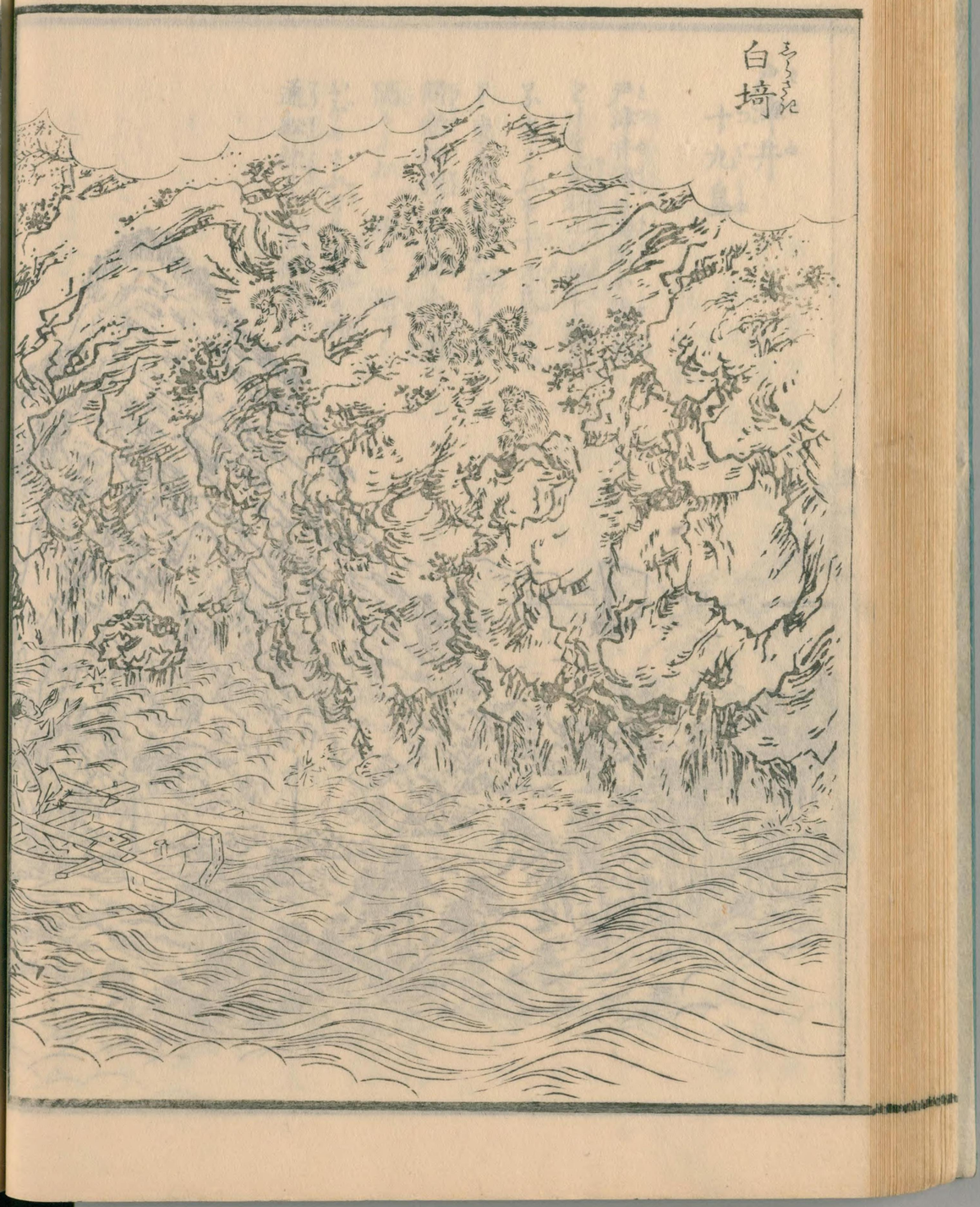
戸津井
十九島

戸津井浦の海面ふ聳然
とーて宛研山の趣を具ふ
ふ者これを十九島こゝへ
と東南ハ地方ふ接ー其
間断相挟アて纔ふ一溝を
隔るふ似一躍せバ踰べく
おゞゆさんぞも満潮の時ハ
通船快くこを往来ス



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

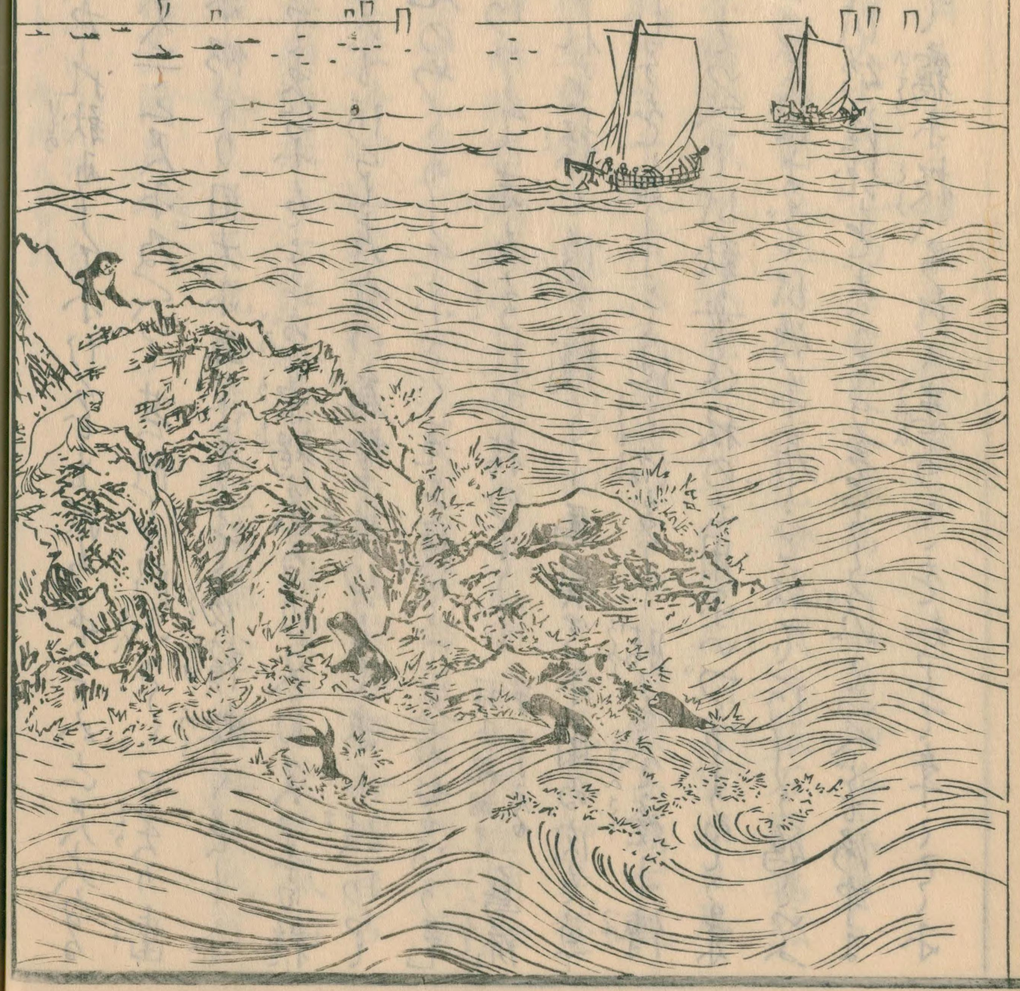
舞洞蓋水石相激而為異響已

白崎之頂太古霜化為石骨更蒼涼萬嵓如筍抽海底纍々層秀瑤芝房神剷鬼刻誰費力造化秘使洩天藏石門巍然開雙闕水精劉成仙人狀龍乎虎乎呵巖扃洞天雲深日月長人謂此中坐千人清淑氣凝鍾乳香坤霊始鎖高唐女夜靜每奏神巫舞鈴々金響瓊枝折田波鏜々鼉尾鼓知是鼇足定四極南維別鎮群真府幽室必有藏碧籙好捜金簡奇神禹只愧煙火薫此身隻擲淩波遂難臻怒浪簸舟輕於葉塵蹟豈容攀嶙峋豁然自悟笑峯白更注餘瀝嘲海神自古誰得東海藥譸張弄舌誑暴秦漢皇望洋嘆未止茂陵風雨入荊秦雖令餐氣老不死亦是巖穴枯槁人一揖辭汝我可歸金銀樓臺爾自珍

海獺鳥（かはうそどり） 白埼の沖にあり此鳥を白埼とのゝると海人称す

海獺（かはうそ）は海中に住む獣にして小なるもの大なるもの長さ五六尺大なるものは一丈二三尺に及ぶ。其形は頭小さく口出て歯するどく犬に似たり。目大に耳小にして吻鬚（くちひげ）粗く長し。全身細毛ありて是を密に茶褐（ちゃかつ）色なり。又白色あり白雑文黄色のものもあり。左右の扁鬐（ひらひれ）爪ありて末に皺ありて尾は獣尾のごとくにして小さく尾を挾みて又前鬐あり足にも爪又ありて末を分れて指のごとし（桃洞遠筆記あり） 鳥説を以てこれを捕て皮を得とし馬具等に用ゐ肉は魚毒に中れる子を療し其他も治多し。膽は金瘡に傅（つけ）て功ありといへり。此獣毎年秋の末用にいづる方より来るく其の末用すぐ此鳥に居るといひてかしら鳴といふ。或云此鳥海辺をまるるをとらへんといへども海中ま特起して竄に捕へられず患おきを知りて年々に

海瀕島



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

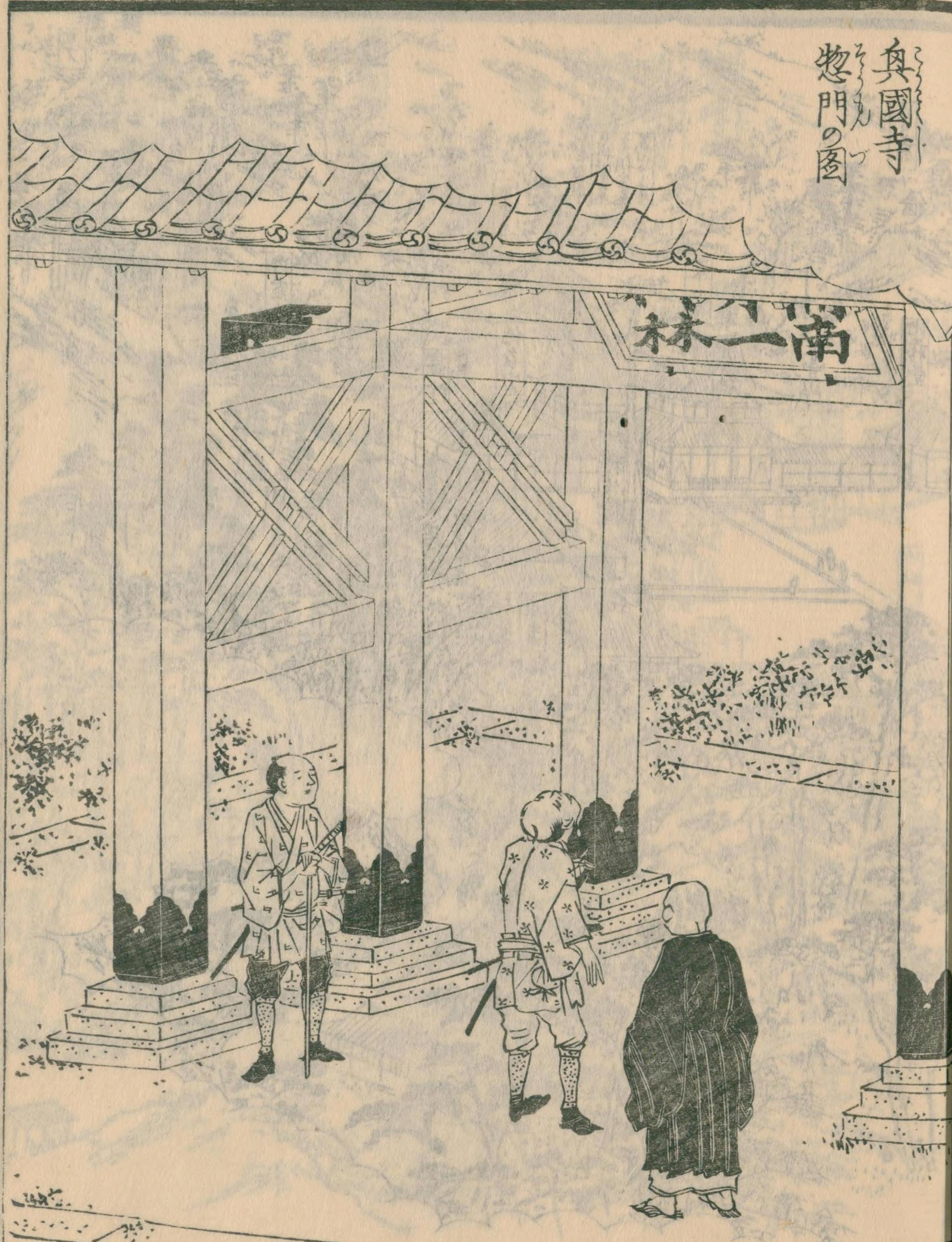
往来するゆゑんとしてこの浦之所に分れて周匝二町余の出石あり
海濤二三十尾毎に群をなし或は海中に出没し魚を捕て食とす又
夜は鳴中に棲拍ち睡として其気を悪むべし此者鮫鰐に深く
眠に就といへども一個は必起て是を看護する事最厳なり若し
人ありて此浦に近づけば魚も悉く驚して衆を起し斉く海中に
没入し海中を游ぐ時はすみやかに飛し形を乱して畏るべき勢なり
官命の外捕る事を禁ず実に当浦の一奇物なり

由良荘（ゆらのしやう） **大引浦**（おほびきうら） 白埼神谷岬の間の湾にいりて村の南に城の東浜の東岩東尾石六人山あるを以て是をいりて 氏神天室の清紀伯ありし時の在らすをいひ待つ 八ケ村を総べ中古蓮華王院の領なりしを 東鑑に見えたる今その一條を左に載く

東鑑云

文治二年八月廿六日庚子於蓮華王院領紀伊國由良庄七條細工宗紀太攄謀計致濫妨之由領家範季朝臣折紙並院宣到来之間今日令下知給之云云

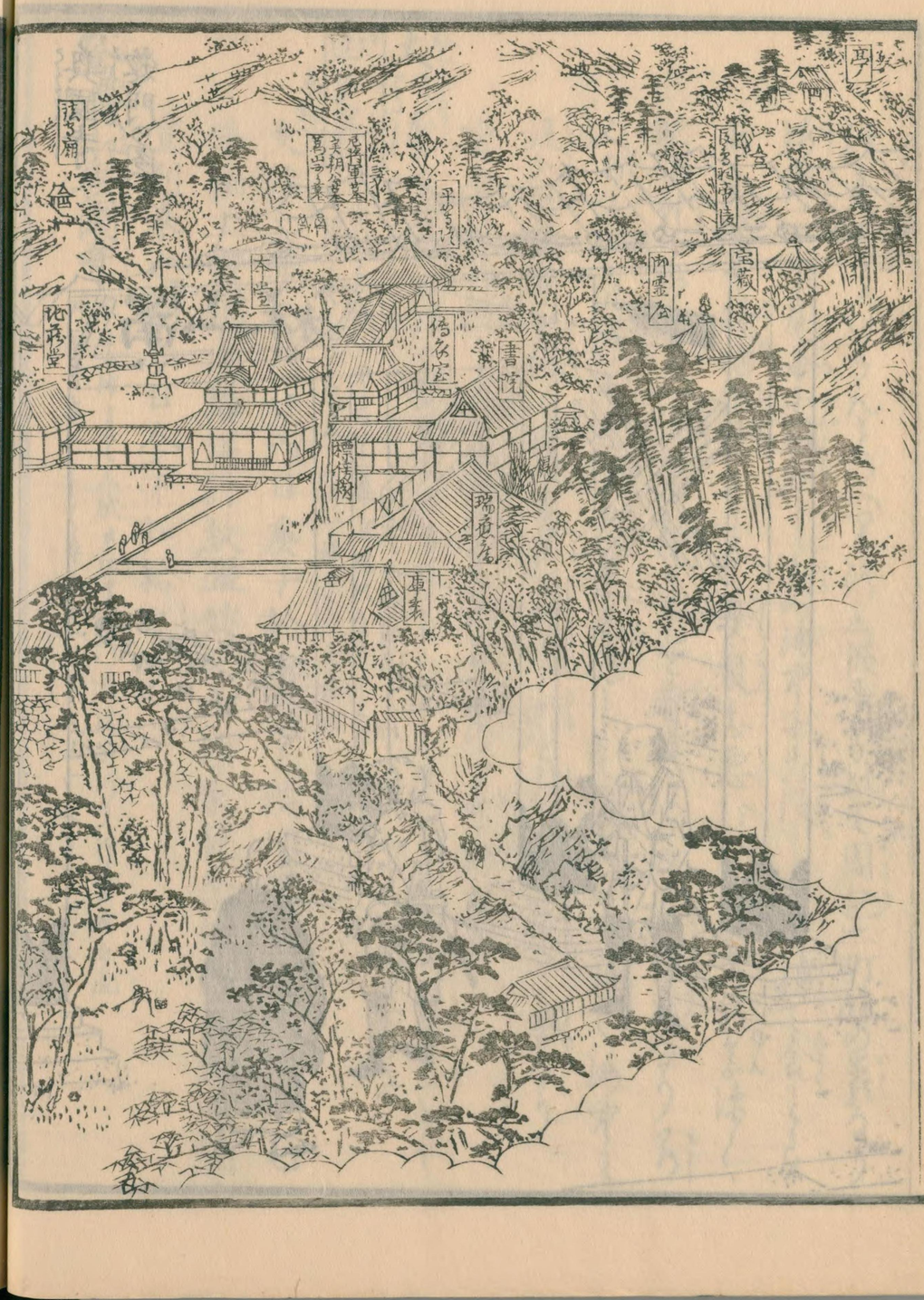
鷲峰山興國寺（じゆうわうざんこうこくじ） 衣奈浦より山越四丁余門前村にあり禅宗臨済流妙心寺末にして寺中に末寺九十九ケ寺あり



興國寺 惣門の図

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

鷲峰山興國寺全圖



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

葛山五郎入道木像

法燈國師木像

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

佛殿 方五間 開山堂 上階に國師の木像を安ず下階に右方を安ず師の影無門禅師の木像及び當山開基葛山願性の木像を安置せり 開山眼堂 庫裏 八間十間 方丈 九間半六間半 額 濟慶の二字清の周壬孫筆なり 鐘樓

地藏堂 寶藏 靈牌殿 廻廊 入間十間四 侍衣寮 修造屋

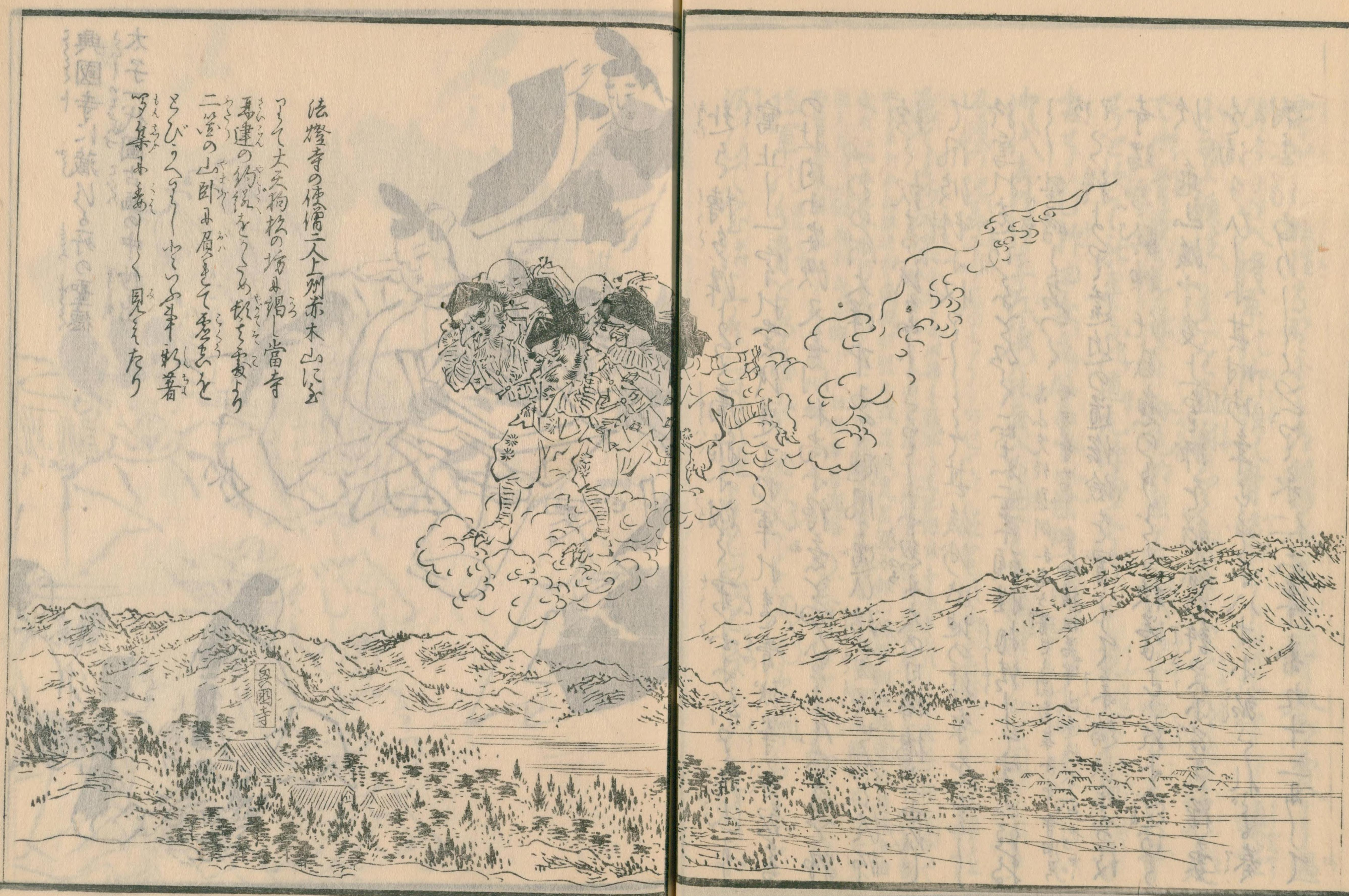
浴室 勝光庵 澄意庵 靈照庵 修禅亭 居間

鎮守六社 熊野権現八大龍王多賀天神 古橋 中門 額鷲峰山 宋ノ昨友筆 大門 額關南第一山 禅林天寧筆

伝宗派禅刹第 境内山林方八町 禁殺生

當寺開山法燈國師名は覺心号を心地といふ信州神林縣(或は近部)の人にして常澄氏の子なり母嘗子なきを憂ひて戸隠の觀音靈像に詣て祈る一夕大士みづから燭を燃して授給ふと夢みて後懐妊し師を産む心稍長となりて俗に在て書を好まず十五歳にして本州近部縣の神宮寺に投じて書を讀み十九歳にして東大寺に至り具足戒を受け高野山に上りて金剛三昧院行勇に從ひて密教を学ぶ是よりして先源實朝公或夜の夢に前身は宋の溫州雁蕩山に住して其功力を以て日本の將軍と生れけるといふ事を見られしかば渡宋のこゝろざしありしかど事ならずして終に薨ぜりかくて建仁寺の榮西禅師上僧正は實朝公の玄弉三藏の再誕なりと言ひしといへども師は近臣葛山五郎景倫に命じて入宋せしめかの雁蕩山の景を寫させ歸來りて圖のごとくに建んとす景倫鎮西に下りて順風を待て渡らんとす時に將軍の凶訃を聞しかば哀歎の餘剃髪して願性と称し高野山に登りて金剛三昧院に住して將軍の菩提を弔ふ二位尼これを聞て由良の地頭職を下し給ひ是によりて此地に來りて安貞元年當寺を建立し領地を當寺と金剛三昧院とに

寄附次願性高野にて武州の人庄司二郎入道西入に遇
ひしに西入将軍の御頭の骨懐にせしを乞出し　願性
に与ふ　願性これを感謝して当寺に実朝の石塔を建
て御骨まいらせを安し　梅尾明恵上人を請じ西方といふ寺
号を授て永平寺の道元禅師に請ひて篆文にて額字を
書せしむ　抑由良庄は西方へ修めし院（院後号相　院号后）の御料なりしが
御代後の伊王丸遠つ能(?)後入道西蓮と願性と心を同しくして
以須の地若干を当寺によせて　法皇の御菩提に資す　願性
並て法燈入宋（法燈この時猶未諸林ち天竺禅師に参せられしに天竺二偈を与へて覚励れしに一曰学道工夫須著力従門入者被人瞞三條椽下容身易六尺単前参話難退歩遠観明歴々運思近覓黒漫々銀山鉄壁雖無路透出透来且自看其二曰大道本然何費功不通一歩却能通盧談萬物皆無味身静諸縁尽在空法界聖凡非念外微塵刹海出胸中人疑個事吾應答野草春来華自紅と延宝傳燈録にあり）の志ありしを知つて彼
将軍の御骨を高野山に納めんとて紀洲(?)師にまでもを
添ひて宝治元年二月此地よりて船を發して九州に
赴き博多津よりて商船に附く宋に至りて径山に
寓止し一宗の奥義を遂て将軍の遺骨等身に附(?)き
の肚内に安じ次又無門和尚に禅意を聞ひて凡六年を経
て帰朝の時大洋中にて颶風に遇ひ船覆没せんとす　師
頸に掛る将軍の遺骨をしに忽ち大の日輪檣上に現じ
て風波忽に収りしとぞ　其後此地の勝景を愛し
将軍の志ありしを知りて正嘉二年願性相續して寺山(?)住持
し鷲峰と名づく（当山先従熊州和尚が著せる関南集に年号旧号西方寺菖山東論請祖為开山遂換今名也とく）
なく禅よりて遠近の道俗渝を冒して来り帰依する段
寺瑞霊験神託感應のあまたあれども枚挙すべからず遑なし
次　亀山後宇多上皇師を崇敬の叡感浅からず禅要
を詢ひしに其時御年すでに八十に詔されども奏
對恙なかりしといひて永仁六年寿九十二にして


法燈寺の使僧二人上州赤木山にゆ
きて大天狗杉の坊に謁し當寺
再建の約諾をうけて歸るさ天狗より
二箇の山臥に肩にのせて雲中を
とびかへらしめつゝ本寺歸着
門集に奇しく見えたり
興國寺

興國寺に藏ひる所の聖徳太子一代圖古画の中抄出

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

其二

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

逝休こゝに住まる事四十餘年かくて狗子無佛性の話
を著す又法佛悟心衆生は迷心生佛源一迷悟境分云々此偈
を竜に示せり亀山上皇法燈禅師と追謚し給ひ後年
後醍醐天皇法燈円明国師と追謚し給ふ法嗣に頑極
の僧多し其徒等法燈生前の事蹟を集録して法燈と称し
又後年画図を交へし縁起二巻を作り系譜の後人に傳を
貽しむ然るに天正十三年豊臣秀吉南征の時法堂も是も兵
燹に罹りて烏有となれり（来侍八寛永年中卯行して世に流布れ廿五大意只元亨釈書延宝伝燈録等に載たり）其
廃址に行者虚無僧等庵を結び境内を耕耨して園場と
なりし道風地を掃ておとろへし然るに慶長年中浅野氏当山
龍源寺の天叙といふ僧に命じて堂塔を中興せしめたる
所なり干支を寄附せしより法燈の霊光再世に輝きて仏
殿法堂等を追て備りし近郷の大禅刹となれりと 新著寺集に云

将一夜に法燈と遣ると戯く紀州由良の法燈をとせらへ当られするといふるに
まことゝかの寺によれば覚寺堂の今に掛れるやうに早に至て行なべて寂し
○むかし無門禅師心即是佛佛即是心心佛如此亘古亘今といふ偈を叙
て国師に授く国師是を示てたゞ秘して人に示されざれば今世に傳ふる
所読する此偈はさばれるを一紀州海草郡浜村八幡宮上様の板に此偈
を書して文に代へたり所る人其地の国に其を識しも来此偈を書
写へしが其数類をみるに是れ又国師自書の所と称し写して
在り掲ぐ正應五年を師已に八十五歳なり老健の状想ふべし

正應五年四月五日

入宋沙門覺心 正

䟭跳畫像一幅 寺記に法燈の弟子孤山至一に師の像を画かしめて師に完(?)
眼を請ふ師筆をとらず眼を點ぜず孤山再び画像を以て
賛語を述べられん事を請ふ師これを許さずして為(?)に来(?)まさ(?)
あるに筆を下さんとする時に及べり師孤山これを督責して附画
像の左右を失ひて攫し去る是れが為画像䟭跳して房(?)梁に掛れて
ありしを見れば後大に驚きて即ち拝し其読(?)を今に畧(?)す 後諸郷(?)天竺よりきたり験を数(?)と
いふまで画像と楼中に遷(?)へて(?)ありしが此時法燈国師の経を納め画像汗出
流れる事雫のごとし又弟子等是を奉(?)る事の法燈(?)像の帰化傳寫一云
の賛にあり

魏女寶珠一顆 寺記云或時一女来りて法燈に詣ひて菩薩戒を受け三日
の後姚(?)謝(?)まふべしとて去る法燈是姚女なる事を知れ
果して三日の後雷電しきりに東南の北に光明を放ち空中より宝珠二顆
を降らし法燈是を得て一顆を北に埋めて山門を建(?)し一顆は丹(?)山に埋む其
珠一顆今もなほ傳ふ紀国造(?)淑文(?)
の寶珠紀行を以て出(?)次

唐繪観音像一軸 **佛舎利二粒** **経杵一口** 並に法燈国師のもちひ給ふ
唐代作羅漢木像一軀 法燈宋より持来ると云ふ **後陽成院御書** **聖徳太子一代図古画一幅** 其外和漢古書画数百幅名品尤多しと
いへども頻りに移(?)りて今畧す又那賀郡抜(?)度寺に傳ふ
其外紀(?)綸旨文書什寶数品ともに悉くあり延寶傳燈録に

文應初年佛眼よりおくれる書并に法衣一頂七条図一鋪等を寄(よせ)
られ然る(?)に裁(?)されども今傳はらず惜むべし
(?)度寺は那賀郡粉河荘猿垣村
に有り當寺開山の弟子孤一法燈(?)覺(?)の寺
より今其寺廃れたれ(?)什宝を当寺に納む

鷲峯十境 十境の偈は七言絶句にして元亨元年仲秋法燈といふ僧の寫して壷(?)
けれを采女(?)として享和年中正二位資(?)実卿(?)の書せられ
これを十枚の額として傳
衣宝に掲く其額今(?)存れ

傳衣宝　洒琴巖　標榜樹　如意峰　廣度橋
伊法(?)窟　平等塔　座禅石　新(?)澤洞　靈源水

坐禅石 当寺後の山中にありて
年傳に云く法燈上に験石(?)にありし法燈此に坐禅し
て日夜(?)修しるに侍僧(?)法(?)のいく方を失ひて坐て
経石の畔に到るに録是大士儀(?)然として坐しまへり
侍僧驚きて(?)数(?)嘆(?)一声(?)されば寺(?)の(?)後しまへる
是(?)して坐禅石といふ

普化谷（又ちほれ山といふ又風呂谷ともいふ）

國師歸朝の時法普國佐理正宗恕といふ四居士を随くここに来りて浴室を掌らしめて此谷に住ましむ四居士はいづれも普化宗法派の虚無僧の濫觴にて其後弟相つぎて住せしに天正年中兵火に依て諸國に離散して今に普化谷の名のみ残れりと

閑南集云開祖自宋歸時有四居士相從參禪之暇皆好吹尺八嘗於船中有省値海霧冥濛弄一曲以寄道情遂以霧海路名其曲到山之後職皆司浴院云浴院旧址称普化谷蓋居士有於普化明頭来因縁契投者故名今学其道者亦以普化為祖乃俗所謂虚無僧是也

因に又虚鐸傳記に云法師宋に渡護國寺にいたりし時普化禪師十六世の孫張參に虚鐸八尺の一曲を授かりて歸朝の後弟子寄竹に傳ふ又國佐理正法普宗恕の四居士も此曲を学ぶ後寄竹行脚の志を以此地を去りて諸國の所々に此音を教へて世人に知らしめしよりて此宗起るとして今宗門の寺も数十ケ寺にいたりて新治派括惣派寄竹派小菜派小笠派梅地派等法流に分れたるが中に洛東の明暗寺は當寺の末寺にして其寺法嗣ぐもこの寺に来りて授戒するも此由縁によれるなり

按ずるに虚無僧の字勧進かぶりと等合にて薦僧と書し判詞に薦僧の三昧紙子の衣着て面桶擁に法華衆のつなにようて天八ふくにわもて利の業するもこれなるや云へることも七十一番職人歌合等にも見え薦僧とみゆ暮々とつゞけ(たり)

一山聯額数多きに擇ざれば纔に其一二を左に掲ぐ

開山堂聯

語要悟聲 学波離之軌範

行須緩歩 習馬勝之威儀

径山無準

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

大門額

闡南第一禪林

天界山住宋泐書

中門額

鷲峰山

竹友年七歳書

開山堂上階

自若

夾山

仝下階

法雲

古鏡樵洲

仝無門和尚

綿々枝葉蔵無窮

古緑唐渡人

一山一寧

佛殿聯

鷲嶺法燈照曜萬丈之光燄

亀山靈芝深友揮千秋之徳輝

古梁

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

禪堂前門

海會

少師韋魯盛典總裁官太子襲封衍聖公孔毓圻

呼猿亭

呼猿一亭築在飛来峯
崗園翠嵐流振松古鎖
雲霧淡湧憑夕吾趣勝
境殆壓荒澤庚戌之夏
掛錫鷲峰自誥
主翁来意酒壹亭当風
致酬綾安表幽景不已
號以一絶
雲起飛来小朶岑棲
遅恰似理公巖石前年
呼猿雲自在林巌自
天松

心南子題

南紀風雅集　過興國寺拝法燈國師像　　僧泐霖
師去知何處高名今已傳蘚碑横草際靈塔倚松巓山學
維摩黙雲參伽葉禪登臨時極目空盡界三千

閑南集　　法燈國師賛　　僧黙洲
昏衢法燈迷津寶筏威風凛似満地秋霜光明赫如麗天
月月超西海兮入無門関帰東土兮開耆闍崛住山當卓
錫杖妖魅頻潛説法感雨寶珠迅雷忽發敢讃一辞罪當
僭越夫是之謂三朝一國之師表五祖七世之的骨吁盛
矣哉

将軍記云
明徳三年二月山名修理亮義理ちからを失ひ一族郎従六十二人
紀の舟に乗て由良の湊にいたりて興国寺の心地上人にあひて
出家して皆ちりぢりになりけり云々

家集　興国寺にまうでて明かたの鐘をきゝて
鷲峰寺明ぬと告る鐘の音にまよひの雲も晴るらん　源令綱

同　同しところにてまかりて暮をえて
いつの波そて暮せる花の木のまより入あひの鐘の音かな　全

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

須谷尾寺 奥谷寺の東南七丁許にあり

法燈國師年譜に文永三年師六十歳此時神紀によりて經刹に到りて母堂に就て孝養を然好に請じ尚寺にしばらく孝養せし師望遷せられしかば墳墓となる此寺の結界此地に築くとぞ

辰天神社 中村にあり

白山權現社 日村の北 日村にあり

東泉寺 日村にあり 奥谷寺末

關南集 遊東泉寺詠楓 僧默洲

霜薄南中紅葉稀 獨憐楓樹映禪扉 霞標近接天台色 雲錦新成織女機 且訝枝々燈火點 又看片々雨花飛 人間縦有停車賞 爭似開窓對落暉

妙見宮 畑村にあり 寺記を

長谷寺 かうごくとくいふ 日村にあり 珠石山といふ 奥谷寺の末なり 由緒の地なり 伝云法燈國師紀州に着岸の後此山を披き其跡に宝珠二顆を得し

地に遊ぶ時に建立し大和の長谷寺の縁を幸として長谷寺と号し又宝珠一顆を当山に秘し一顆は地中に埋蔵し故に山号を珠石山といふとぞ珠の事は両珠記に詳なり紀国造淑文の両珠記に正應四年二月十九日午の時に国師奥谷寺に住し給ひし時本尊の前に燈を挑て説法し給ふをりしも忽霹靂一声して光明赫奕たり国師の宝珠一顆を授られ其時満座の男女十人ばかり驚きて堂中を見れば香気光りて其形勢大豆のごとくにして暫らく消ず又次第々々の光りて或は法螺の如く或は鐘の如く或は笙を吹が如く或は久しくして雲霧の起るが如し或は飛泉の落るが如く山後に響きわたる時烟火と共に一個の石を得たり其形怪の巌を採る者山後に至りて見れば霊寛石其中に流れありとを探て採んとすれば熱して能はず一人是を以て擲て谷に下して見れば形は円にして小さき孔あり其面少く平かにして径二寸許り其色黒く金の如く其色青黒にして微く紛れし石に似たりと其石にいへども安置し終るもの是なり一日とほて驚嘆に安置す以上要を摘む

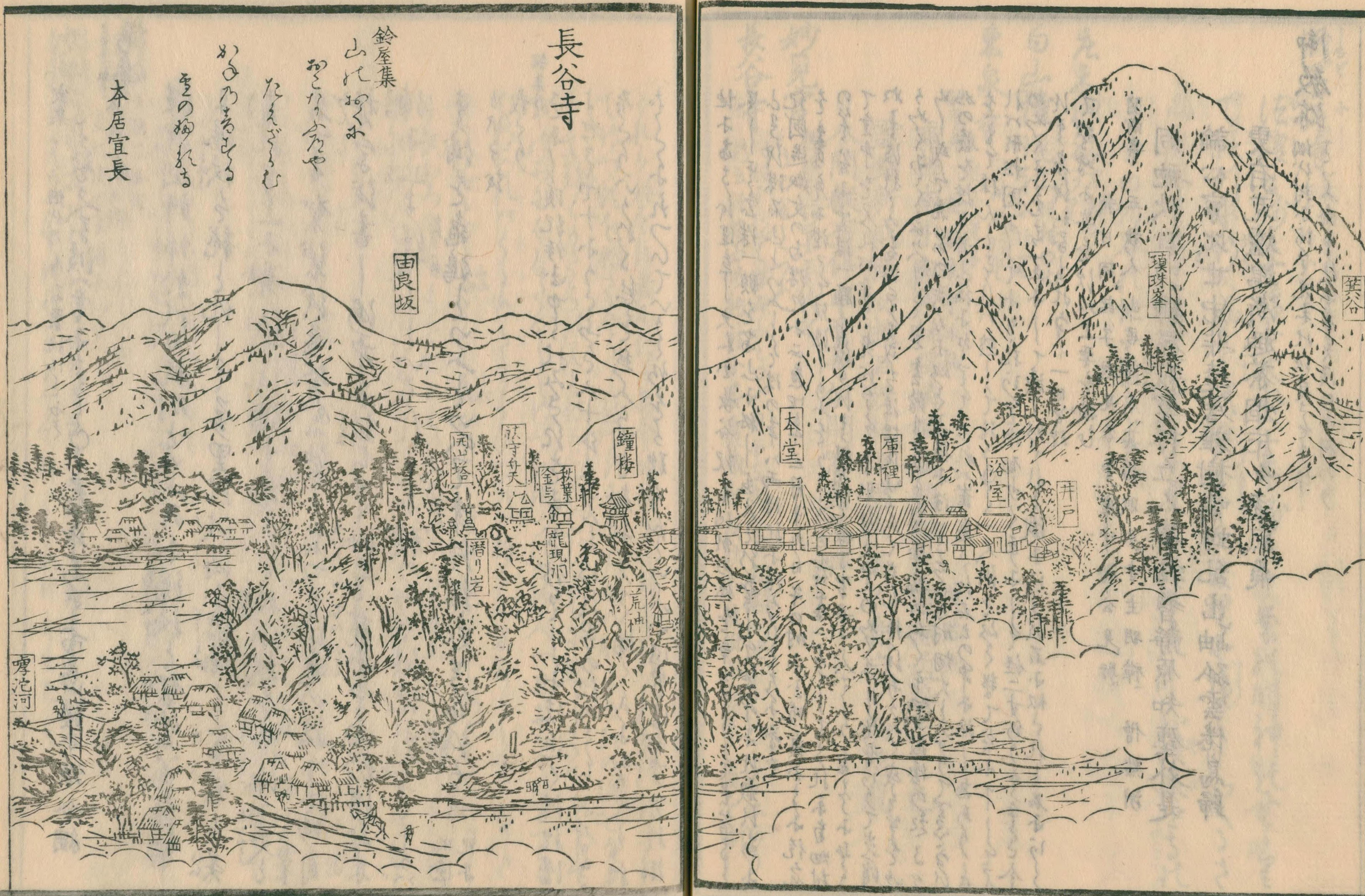
關南集 秋日同諸子遊長谷寺座中楷公見賦 五瀬人山居詩用其韻賦示寺主明禪 僧默洲

同袍秋日叩禪扉 寂寞林丘人事稀 習靜原知塵外是 論心寧比世中非 遶簷雜樹鳴蟬乱 出岫孤雲倦鳥歸 更有瓦爐鴻漸趣 茶烟片々逐風飛

御殿跡 細代村にあり元和の頃建させ玉ひしといふ今は其跡に辰頭の小祠あり

長谷寺

鈴屋集
山はおくに
おとにかなや
たえざらむ
かは乃なかるる
雲の梅れる
本居宣長



家集
よる人も波の音にかくれしのびしと見えたる南良の湊に　源令綱
佃代乃浦の葉はたれとゆく

桜淵（さくらぶち）湊内にあり 戸村にあり

法燈国師帰朝の日杭別といふ所に錫杖と袈裟とを忘れしに錫杖は龍と化して万里の波濤に游泳し袈裟は亀と化して亀は背上に負ひて此淵に来り杖は杖を游泳して夫と名づけ袈裟は亀皆袈裟と名づく此亀の背中に自梵字現書し海中に放ちて後蔓に前由良の湊に来浦に止まりでしといひしれしに教のごとく彼地に下つて今にあり浦を亀淵といふとぞ又年譜縁起等に詳なり　紀伊続風土記

撰集抄
もしも詠み哉くり
さすがにし頃紀伊国中にもみなを見て住みし侍りし法道と云ふ聖
よせて四十にならぬ女十許にて亀の男の肌のあたりあさき
あくまいられる慈を憐ぬらんと思ふに覚えて深く其ありけるに
たくふれつひていふく仰せある歌らんといひて此男涙く歩みれ折

これを給はれ者に侍る只今此浦にて釣に大なる亀を釣られて侍りつれを殺さんとし侍りつれに亀大なる眼より紅の涙をながしてあはれに見えて侍りつれば何にても其にかへて給はれといひて侍りつれば釣人一刀にて首をつきて侍りつれば悲しくてあはれなる見侍るとて身よりて頸をあてて涙に似たるをかしみとてこれを見せよといふをいひてくあちひ侍しかども世にひとりて見え侍りしかば髪をそりて侍りきさて其後もあまの家にして世を経て粉河寺の堂にまうでて造にあつて無仏上人の寺に引付発心の因縁をぞ語りまゐり侍しにそのあはれなるを聞きて南西に行くべきといへども彼も釣人もあひともに後ぞ思ふことあるよしを思はせよとて行ひすまして侍りと云々

家集
さくら淵といふ所にて
名にしおふ亀の行末も此淵にちりて桜の花ぞ匂はむ　源令綱

柏村（かしはむら）志賀荘に属す此湊の南岸にあり
沙攫明神社（さくじやうみやうじんしや）同村にあり氏神を勧請の時身に棹さし来れる人を祀れるによりて棹さし明神ともいふとぞ

小杭（をぐひ） 志賀の小名なれども拘村に属して小湊をなせり

宇佐八幡宮 横濱村にあり二ケ村の産土神なり法燈国師自筆の棟札あり又宇佐八幡宮の文字乃古き額あり亦国師の筆なりといひ伝ふ永仁四年の棟札に奉行左衛門尉源佐継神主坂上実躬とあり坂上系図に又郎実綱の後なり又法燈国師年譜元年興国寺草創の條に坂上某入道西蓮と号す坂上入道宗正法名阿念由良庄内横濱村任職なりと見えたるも当家の祖なるべし当社棟札にも祖先の名連綿として見えたり

法燈国師年譜云

建治二年十二月十七日濱宮奉遷神体於新宮之次師将額
性 葛山五郎 藤原景倫 遺付宝鏡一面納于神殿云云

由良湊 横濱村を接て右者の出崎三十町程海面にさし出て径およそ二十町に及べり其形勢さながら牛の双角を生ずるに似たり由良溪川の小流潺湲として東より来りて此湊に注ぐ此川あ多くして船舟楫の用を弁ぜずといふ 其名今に伝へぜんもれをとゞむ古人を慕ふ由良の戸由良の門由良の湊と詠める同じ所なり八雲御抄にも紀伊の国の名所とせるを正しとすべし然れども名所を知ると共に由良を詠ずるは彼人丹後様なりしかども其中を渡るべく同名異所と定むべし但紀伊の国には根ぐさ名を幸寄あく紀の由良の湊をよめるは紀州と定むべし 万葉集に由良の崎とよめるは此浦の出崎の如く見えたれども出崎の方なる船繋りし玉を拾ふべく古は此由良の湊なりしを今湊とよめるを待となる と混じて下に載る此地を詠むるもの多かれど撰び載せず

いにしへ大宮人の玉を拾ひし湯等（ゆら）の三埼（みさき）を中頃より

由良の戸とも由良の湊ともいひ今もまた由良の内（うち）と
ぞいふなり此所に到りて横濱を川尻なしめぐる
湊の門をなせる城島と一里許の浪路を隔て向ひ河戸
柏の二村を南岸に見て横濱を二むらの間にさし
出し年々松に鷺の群居し亀の枝をとる待くみさご
浮てもちれ名の栂に巣くひて家にも飛ぶべし網代を横濱
よりて根を連なりて北に背をむき元和の頃御仮屋を建
給ひし城山に今も濱の礎を残せりその
くさにかくれたる里なれば古文書に江の浦ともいへるが
正しき我いつよりか由良の文字を記して書きたらん
吹井とも同じ湊の中なり又さしも湊をなして江棲たき
鎧れるもこれらなれば沖に暴風吹きあれ
ども江に旅ぶね船人をまでむしろに繋居せるが

由良湊の圖

内裏名所百首

そらたのめ　宝永
くものひとこえ
きくもはつしぐれ
ゆふかけてふきしく紀の
まつのひゞき

旨

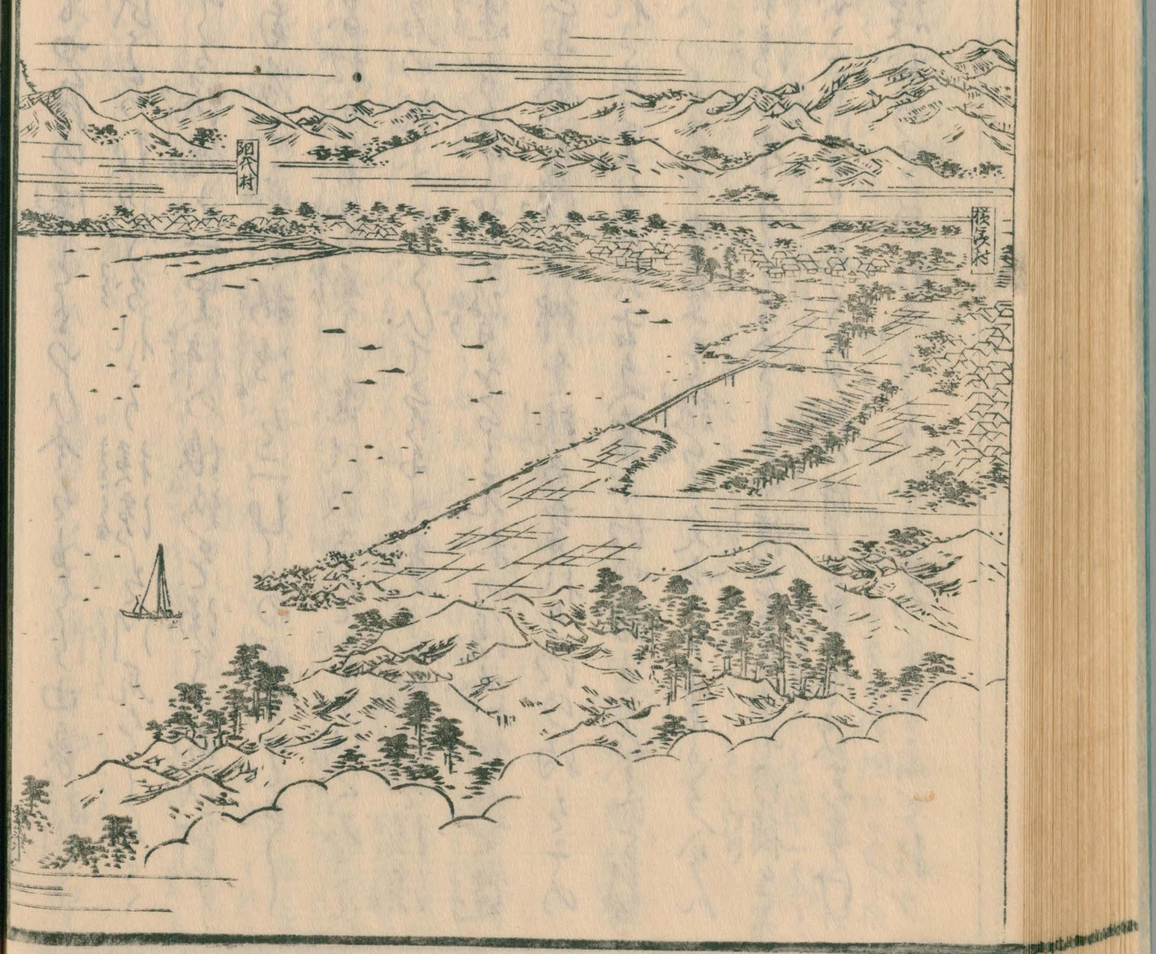
夕なみを入日を
あらふゆらのさと紀
浦ぢくれやく
くるのまつかぜ

家衡

同

ほのぐと
あけくる
時代の
もゝあふ
やまのみさと紀を
てらす
月人

康光



亀岩数百首

紀の玉や
ゆらのみさと紀ふ
日数へく
ろたえきり
敷く
玉ひろふ之

玉葉集　私ならぬ
ゆらもわたる
ものみなれの
くちもはてなん
き伽の月ふ
やどる舟人

平政村敬吉

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

其二

新玉集　左近権中将宗尹朝臣

紀のうみや いくうらくのけく このそむらん ゆうのみるゝの まの晴

玉葉集

紀の海のくれは そなたさき浦と 眺めて遠き

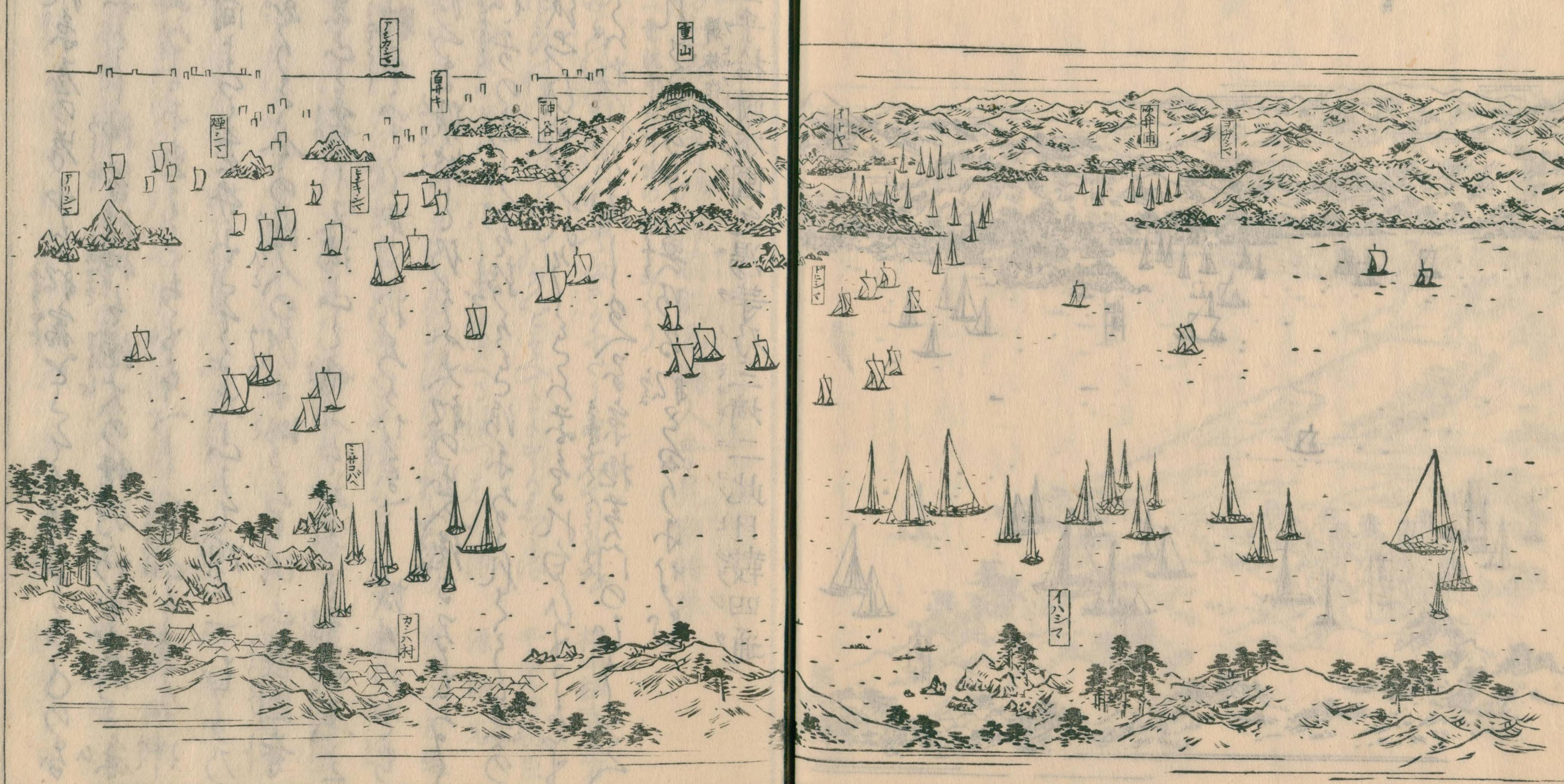
牡丹花肖柏

のこるとも をそき雨中の みさをたる

武家歌合

うせよ まよせて やうのその とかきも きつくれ よるそる 舟人

散位藤原基雄



かし侍る水屋の岸かげに船宿どもして浪のうきねの為
ぐさめとし　神谷の岬に漁火の煙のみ折々に風
尾葉濱あるも此地にかくれて見えず　衣奈浦にて水屋神
谷の中間より西上に当りて大山とて頂に一むらの
木立ありて今の漁人の目あてにしたる山也　興国寺
縁起に笠山と書し又鷲山と呼ぶ　或はかし尾上
より眺望いふばかりなし　城の方には
紀伊の水道波とほく大和の出入絶る事もなく
船々の光浮びて静かなる浪に立つを見る　西の
雲の峯より出ける有情の日に漂はれ白波もうき
ことものに通ひて晴　東は京極黄門のむかし
世をはなれて登るに見るに船もありけむ

万葉集 羇旅作
爲妹玉乎拾跡木國之湯等乃三埼二此日鞍四通

同
大宝元年辛丑冬十月太上天皇大行天皇幸紀伊國時歌
朝開榜出而我者湯羅前釣為海人乎見變將來
今一首は白神の磯の条に出せり

新古今集
紀の国やゆらの湊に拾ふてふたまさかにだに逢ひみてしがな　権中納言長方

続後撰集
玉拾ふ由良の湊に照る月の光をそへてよするしら浪　平重時朝臣

続古今集
きの国や由良の岬の月清みよせくる浪つしら浪　源師光

玉葉集
きの国やゆらの湊に風立て月の出汐の雲払ふなり　前内大臣通

新続古今集
紀の国や由良の湊の朝朗霞の外に舟漕ぐらしも　後小松院

夫木抄
きの国やゆらの浦風静かにて霞む湊に出る舟あり　安嘉門院四條

同
紀の海の由良の戸荒る渡し船よれの岬といひつべし　民部卿為家

内裏名所百首
揺る山ふもとをめぐりて由良の岬の沖のしら浪　順徳院

同
流れつゝ小舟漕ぎて紀の国や由良の岬を渡る舟人　兵衛内侍

紫禁和哥集
秋わたる来る浪あらくなりにけり由良の岬の沖の月　順徳院

金槐集
打よせて秋は来にけり紀の国や由良の岬の蜑のうけ縄　鎌倉右大臣

839
6
80

南朝五百番歌合　　　　　　　　　関白

沖つ風浪吹たてゝ紀の海や由良の戸わたる夕ぐれの空

家集　　　　　　　　　　　　　左衛門尉長親

秋ふかく由良の沖の汐風にさそへとわたる雁の衛か

同　　　　　　　　　　　　　　慶運法師

由良のとを漕出てみれは霞のみ波路に雲そ残れる

家集　　　　　　　　　　　　　宗祇法師

ゆらの戸や湊漕出るかぢの音も猶雲ふかき磯の上かな

河戸浦（かはとうら）

村中に湊辺民家群住の総名なり
村の古木は今猶存せり

家集　　　　　　　　　　　　　源朝臣令綱

ゆらの湊にて

玉拾ふ由良の湊は出舟も霞にくもる沖の嶋かけ

おもハぬにゆらの湊にやどりて

泊舟由良の湊の浪枕夢もむすはて明そまつへし

由良の海辺にて

風まちて由良の渡る月影にさそひて漕出す舟も有けり

明ぬとて湊に漕るゝ湊に春をくりいつれ舟人

中々に梅を海士のゆきて春の花の末の下

富浦（とくしま）

富浦は于渭の海上にある小嶋なり又其所に塔を

教専寺（きやうせんじ）

河戸村にあり浄土真宗西派なり

紀伊名所圖會後編巻之四終

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80